ISSN 0912－5698

秋田県埋蔵文化財センター

研究紀要

Bulletin of the Akita Prefecture
Cultural Assets Research Center

第 19 号　2005

秋田県内遺跡出土試料の^{14}C年代測定
……小林謙一・坂本稔・尾嵜大真・新免歳靖・松崎浩之・小林　克……1

小又川流域における縄文時代の竪穴住居跡について（2）……河田弘幸……17

雄物川町十三塚遺跡出土の弥生土器……島田祐悦・根岸　洋……45

鷹巣町胡桃館遺跡出土の木簡……山本　崇・高橋　学……63

大曲市内小友の礫石経塚……今野沙貴子……77

兵どもが夢の跡－東根小屋町遺跡の発掘調査－…高橋　学・五十嵐一治……87

秋田県考古学関係文献抄録（5）
－陶磁器・焼き物とその窯跡－……利部　修……91

秋田県埋蔵文化財センター

Akita Prefecture Cultural Assets Research Center

シンボルマークは、北秋田郡森吉町白坂（しろざか）遺跡
出土の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年８月発見、高さ７㎝、凝灰岩。

秋田県埋蔵文化財センター

研 究 紀 要

Bulletin of the Akita Prefecture
Cultural Assets Research Center

第 19 号

2005

秋田県埋蔵文化財センター

Akita Prefecture Cultural Assets Research Center

序

当埋蔵文化財センターは、秋田県の埋蔵文化財の公的調査機関として、主に開発事業等に伴う緊急発掘調査と報告書の刊行、調査結果を広く県民に公にするため、出土品の展示のほか発掘調査報告会や遺跡見学会等を実施しております。

発掘調査報告書のあり方、特に記載内容については議論のあるところではありますが、当センターでは、速報性を重んじ考察等の時間を極力省き事実報告に主眼をおいて速やかな刊行を目指しております。このため、報告書作成の際に生じた考古学的な新たな見解や仮説等については、個人的な研究という形で公表することを進めております。本紀要は、そのような見解や仮説の他、報告書に記載できなかった報告や職員の日常的な研究、資料紹介等をまとめたものであり、19号を数えるまでになりました。

本誌では、国立歴史民俗博物館・東京大学原子力研究総合センターとの共同研究である「秋田県内遺跡出土試料の^{14}C年代測定」や縄文時代の竪穴住居跡を論じた「小又川流域における縄文時代の竪穴住居跡について（２）」、弥生土器の資料紹介である「雄物川町十三塚遺跡出土の弥生土器」、再発見された古代木簡の釈読を行った「鷹巣町胡桃館遺跡出土の木簡」、近世の礫石経塚を紹介した「大曲市内小友の礫石経塚」、近世遺跡の調査の一端について紹介した「兵どもが夢の跡」、文献資料として「秋田県考古学関係文献抄録（５）」を掲載しています。

小誌ではありますが、ご一読の上、なお一層の御指導御鞭撻をいただけますよう切にお願いする次第です。

平成17年3月

秋田県埋蔵文化財センター

所長　大野　憲司

秋田県埋蔵文化財センター

研　究　紀　要　第19号

目　　次

秋田県内遺跡出土試料の^{14}Ｃ年代測定
…… 小林　謙一・坂本　　稔・尾嵜　大真・
新免　歳靖・松崎　浩之・小林　　克 …… 1

小又川流域における縄文時代の竪穴住居跡について（２）…… 河田　弘幸 …… 17

雄物川町十三塚遺跡出土の弥生土器 …… 島田　祐悦・根岸　　洋 …… 45

鷹巣町胡桃館遺跡出土の木簡 …… 山本　　崇・高橋　　学 …… 63

大曲市内小友の礫石経塚 …… 今野沙貴子 …… 77

兵どもが夢の跡－東根小屋町遺跡の発掘調査－
…… 高橋　　学・五十嵐一治 …… 87

秋田県考古学関係文献抄録（５）－陶磁器・焼き物とその窯跡－
…… 利部　　修 …… 91

秋田県内遺跡出土試料の^{14}C年代測定

小林謙一*1・坂本　稔*1・尾嵜大真*1
新免歳靖*1・松崎浩之*2・小林　克*3

近年、AMSを用いた炭素14年代測定が、大きな進展を見せている。弥生時代の始まりの年代について、AMS年代測定結果からは、従来の考えよりも遡る可能性が指摘されている（春成ほか2004）。最も重要なことは、考古学的コンテクストが明確で編年的位置づけがしっかりしている資料を、まとまって集中的に測定し、同一の基準で解析して、結果を比較検討することである。そのため、縄紋時代～弥生時代の考古資料が豊富な秋田県内遺跡出土試料について、小林克が資料の選択を行い、小林謙一が直接に採取することを行って、集中的な^{14}C年代測定を試みた。試料は、縄紋時代後期～弥生時代前期土器付着物である。試料番号はAKTとした。試料採取は、2003年3月に、小林謙一が、建石徹、植月学の協力を得て、秋田県埋蔵文化財センター南調査課および北調査課で行った。合計180点以上の土器・炭化材から採取を試み、120点以上のサンプルを採取した。今回は、その中で、現在までに測定が終了している縄紋中期～弥生前期の試料について、測定結果を報告する。なお、すでに茨野遺跡出土縄紋後期土器付着物および向様田A遺跡出土縄紋晩期土器付着物の測定結果については、調査報告書にレポートを掲載した。そのため、今回は説明を省く。また、柏子所Ⅱ遺跡および漆下遺跡については報告書が刊行されていない。そのため、この2遺跡の試料については、測定結果の報告にとどめ、結果の考察は行わない。

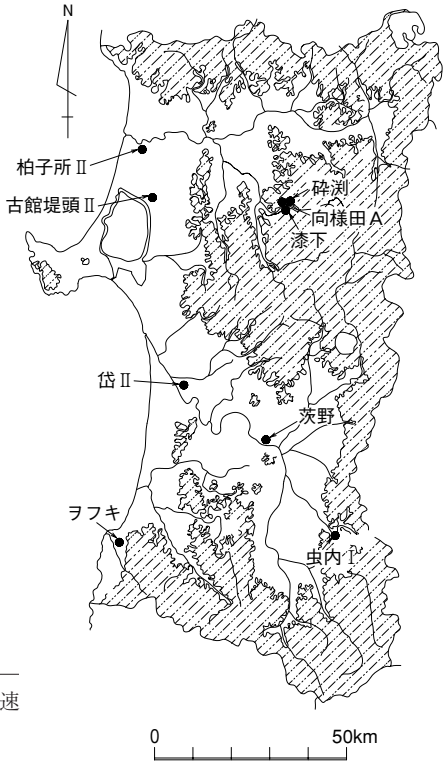
試料については、表1に示す。

1　選択した資料

今回､年代測定結果を報告する資料は秋田県内の9箇所の縄紋時代遺跡で出土した土器から採取した試料である（第1図）。以下に選択した資料の遺跡および土器の概要を記す。

古館堤頭Ⅱ遺跡（AKT61）は日本海沿岸部、八郎潟北岸の山本町に所在する縄紋時代中期末の遺跡である。平成13年に行われた発掘調査で中期末の竪穴住居跡43棟が見つかり、このうち32棟が標高20ｍ前後の台地上に径20ｍ程の環状集落を構成する。年代測定試料としたのはこのうちSI08とした竪穴住居複式炉周辺から出土した、磨消縄紋による文様が描かれた大木10式深鉢形土器の口縁部破片である。

柏子所Ⅱ遺跡（AKT62）は県北部米代川河口部の能代市に所在する、縄紋時代後期後半の遺跡である。平成14年に行われた調



＊1 国立歴史民俗博物館　＊2 東京大学原子力研究総合センター・タンデム加速器研究部門　＊3　秋田県埋蔵文化財センター北調査課長

査でトチ殻砕片を伴った木敷きの水さらし場遺構が見つかり、トチのあく抜きを行っていた遺跡と推定された。年代測定試料として採取したのは、この水さらし場遺構から出土した、後期後葉新地Ⅲ式の深鉢形土器胴部上半の破片である。

砕渕遺跡（AKT65）は県内陸北部森吉町に所在する縄紋時代中期末～後期の遺跡である。阿仁川支流小又川の右岸段丘上に位置し、平成13年に行われた発掘調査で南西に向かってのびる尾根状の地形上から、フラスコ状土坑43基などが見つかった。年代測定試料としたのは、このうちの１基（SKF45）の底面に穿たれた小ピットに、伏せて収められた状態で出土した台付きの無紋鉢形土器である。ともに出土した粗製深鉢形土器は口縁部のやや厚くなる十腰内Ⅴ式である。なお、この土器の内側から出土した炭化木片の歴年代較正値はcal AD 890と報告されている。調査者によれば根による攪乱の結果、混入した木片が測定されたとのことである。

ヲフキ遺跡（AKT73）は沿岸南部象潟町に所在する縄紋時代後期中～後葉の遺跡である。平成12年に行われた調査で多くの土坑墓、土器埋設炉、配石遺構等が見つかり、また、イノシシ・シカなど焼けた獣骨片が包含層中から多く出土した。葬送やモノ送りが行われたと推定されている。年代測定試料としたのは、配石遺構のうちSQ13とされた遺構の周辺包含層から出土した、台付きの鉢形土器胴部から底部にかけての破片である。胴下半の磨消帯縄紋から新地Ⅳ式に比定される土器である。

虫内Ⅰ遺跡（AKT85～94）は内陸南部、雄物川支流の横手川の左岸にある縄紋時代後期後葉～晩期前葉にかけての遺跡である。平成3年～5年に行われた調査で171基の土坑墓、153基の土器埋設遺構などが見つかり、当該時期の大規模な墓地であることがわかった。年代測定試料としたのは、SR3020、SR72とされた深鉢形の埋設土器2点（AKT91・94）と遺構外から出土した鉢形土器（AKT85）および深鉢形土器（AKT89）の計4点の土器である。このうち、AKT85の小波状口縁の鉢形土器は大洞BC式に、他の全面縄文施紋の深鉢形土器（AKT89・91・94）は大洞B式に比定される。

岱Ⅱ遺跡（AKT113）は沿岸中央部、雄物川と岩見川とが合流する地点南側の段丘上にある縄紋時代前期～弥生時代前期にかけての遺跡である。平成11年に行われた発掘調査によって、縄紋時代中期後葉の住居跡2棟を含む総数26基の遺構群が検出された。年代測定資料としたのはSK17とされた土坑内から押し潰された状態で出土した深鉢形土器である。無紋の口縁部が直立し、頚部が屈曲して肩部が大きく張り出す器形をもち、胴部は全面LR縄紋が施される。弥生時代前期青木畑式に比定される。

茨野遺跡（AKT77～79）は内陸南部、雄物川中流右岸に形成された縄紋時代前葉～中葉の遺跡である。平成14・15年に行われた発掘調査によって住居跡10棟、炉跡10基、土器埋設遺構3基、土坑51基等が見つかり、後期前葉～中葉を中心とした集落跡であることが確かめられている。年代測定試料としたのは、後期前葉の土坑墓と推定されたSK196の覆土中から出土した3単位波状口縁の深鉢形土器（AKT77）、同じく土坑墓と推定されたSK269の覆土中から押し潰された状態で出土した全面LR縄紋の施された深鉢形土器（AKT78）、そして石囲土器埋設炉SN175の炉体に使用されていた連鎖状S字沈線紋が施された深鉢形土器（AKT79）の計3点である。AKT77・78は十腰内Ⅱ式、AKT79は宮戸Ⅰb式に比定される。なお、これら資料に関連して今回の測定とは別に覆土中から出土したクリ材が年代測定されているが、それによればSK196についてはcal　BC　1750、SK269についてはcal　BC　1890、SN175についてはcal　BC　2140という歴年代較正値が報告されている。

漆下遺跡（AKT118・121・124・128）は砕渕遺跡と同じ阿仁川支流、小又川沿いの遺跡である。砕渕

遺跡から４kmほど下流の左岸段丘上にあり、平成13・14年に行われた発掘調査によって縄紋時代後期前葉の配石遺構群、前葉～後葉の建物跡群および捨場が見つかり、後期を通じて大規模な祭祀が営まれた遺跡と推定されている。年代測定試料としたのは、いずれも遺跡西側に位置した建物跡群および捨場から出土したもので、AKT118およびAKT121はST01とされた西側斜面の捨場から、AKT124はSX07とされた建物跡群の位置する地点の土坑内から、AKT128はST101とされた東側斜面から出土した土器である。AKT118は口縁部に貼瘤列を施した深鉢形土器で後期末十腰内Ⅴ式に、AKT121は刺突列を沿わせた磨消縄文が施された鉢形土器で後期中葉十腰内Ⅱ式に、AKT124は胴上部に入組帯状文が施された深鉢形土器で後期末十腰内Ⅴ式に、AKT128は胴上半に沈線紋を施した小型鉢形土器で十腰内Ⅰ式にそれぞれ比定される。

向様田Ａ遺跡（AKT145・163）は漆下遺跡の対岸にある晩期前葉の遺跡である。平成12・13年に行われた発掘調査によって環状配石遺構２基や土坑墓71基、捨場などが見つかり、比較的規模の大きな墓域が作られていたことが明らかになっている。年代測定試料としたのは、土坑墓群の北東側、ST183とされた捨場から出土した台付鉢形土器２点である。AKT145は口縁直下で大きく「く」の字形に屈曲し底部まで直線的に下りる器形の台付鉢形土器で、口縁部文様帯には截痕列が施され、大洞Ｃ１式に比定される。またAKT163は口縁部で屈曲し胴部は球胴に近くなる台付鉢形土器で口縁上部に左傾、下部に右傾する羊歯状文が施され、大洞BC式に比定される。

２　炭化物の処理

試料については、以下の手順で試料処理を行った。(1)の作業は、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において小林・新免、(2)(3)は、坂本・尾嵜が行った。AKT85、121,124については、炭素量不足が予想され、(3)については、地球科学研究所を通してベータアナリティック社へ委託した。ただし121、124については121re、124reとして改めて前処理から行った試料を、別に調製し、測定を行った。

(1) 前処理：酸・アルカリ・酸による化学洗浄（AAA処理）。

AAA処理は、土器付着物については、アセトンで洗浄し、油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した（２回）。AAA処理として、80℃、各１時間で、希塩酸溶液（1N-HCl）で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去（２回）し、さらにアルカリ溶液（NaOH、１回目0.1N）でフミン酸等を除去する。４～５回行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに酸処理（240分以上）を行い中和後、水により洗浄した（４回）。

試料は、AAA前処理を行った量（処理量）、処理後回収した量（回収量）、二酸化炭素化精製に供した量（精製）、精製した二酸化炭素の炭素相当量（ガス）の重量（mg）を表２に記す。処理した量に対するAAA処理後に回収された試料の重量による重量比を含有率１、二酸化炭素に精製した際の炭素含有率を含有率２、含有率１と２を掛けて求められるところの処理した量に対する炭素量の重量比を含有率３として表２に付す。

(2) 二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を酸化（二酸化炭素化）、真空ラインを用いて不純物を除去する。

AAA処理の済んだ乾燥試料を、500mgの酸化銅とともに石英ガラス管に投じ、真空に引いてガスバーナーで封じ切った。このガラス管を電気炉で850℃で３時間加熱して試料を完全に燃焼させた。得られ

た二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので、ガラス真空ラインを用いてこれを分離・精製した。

(3) グラファイト化：鉄（またはコバルト）触媒のもとで水素還元しグラファイト炭素に転換し、アルミ製カソードに充填する。

1.5mgのグラファイトに相当する二酸化炭素を分取し、水素ガスとともに石英ガラス管に封じた。これを電気炉で650℃で12時間加熱してグラファイトを得た。管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり、グラファイトはこの鉄粉の周囲に析出する。グラファイトは鉄粉とよく混合した後、穴径1㎜のアルミニウム製カソードに600Nの圧力で充填した。

3　測定結果と暦年較正

AMSによる^{14}C測定は、AKT121、124は地球科学研究所を通してベータアナリティック社へ委託した。AKT73、77、78、79、121re、124reは、東京大学原子力研究総合センターのタンデム加速器施設（MALT、機関番号MTC）で行った。その他は、加速器分析研究所（測定機関番号IAAA）に依頼して行った。

年代データの^{14}C BPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した^{14}C年代（モデル年代）であることを示す（BPまたはyr BPと記すことも多いが、本稿では^{14}C BPとする）。^{14}Cの半減期は国際的に5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差（１標準偏差、68％信頼限界）である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の^{14}C/^{12}C比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した^{13}C/^{12}C比により、^{14}C/^{12}C比に対する同位体効果を調べ補正する。^{13}C/^{12}C比は、標準体（古生物belemnite化石の炭酸カルシウムの^{13}C/^{12}C比）偏差値に対する千分率δ^{13}C（パーミル，‰）で示され、この値を-25‰に規格化して得られる^{14}C/^{12}C比によって補正する。補正した^{14}C/^{12}C比から、^{14}C年代値（モデル年代）が得られる（英語表記ではConventional Ageとされることが多い）。

δ^{13}C値は、東京大学測定分については、加速器による測定を参考として付す。加速器分析研究所によるδ^{13}C値は、加速器による測定を、加速器分析研究所による誤差を付して参考として記す。ベータアナリティック社の測定した試料は、^{13}C用ガス試料を質量分析計により測定した^{13}C/^{12}C比の値を示してある。

測定値を較正曲線INTCAL98（暦年代と炭素14年代を暦年代に修正するためのデータベース、1998年版）（Stuiver,M.,etal. 1998）と比較することによって実年代（暦年代）を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。暦年較正プログラムは、OxCal Programに準じた方法で作成したプログラムを用いている。統計誤差は２標準偏差に相当する、95％信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦　cal BCで示す。（　）内は推定確率である。図は、各試料の暦年較正の確率分布である。

4　年代的考察

今回の測定結果から計算した暦年較正年代についてまとめておく。

まず、やや異常な値を示した2点について検討する。

AKT63とAKT77の2測定は、同一の型式に比定されている他の土器付着物に比べ、400～500年程度古い測定結果が得られている。可能性としては、炭化物中に含まれていた不純物を十分に除去できなかったために古い炭素が影響を及ぼしたことが考えられる。もう一つ、海産物の調理によるおこげなどであった場合、海洋リザーバー効果により、実際よりも古い年代となる場合がある。例えば、秋田県大館市池内遺跡の縄紋前期土器付着炭化物の炭素年代測定では、9点のうち、2点が、他のデータの4780-4940BPから、それぞれ約300年、約1100年古くなった。このうち、1100年古かった例は、δ^{13}Cの値が-22‰で、他の-25～-27‰と比べて高かった。これについて、今村峯雄は、海産物のお焦げである可能性を指摘している（今村2000）。AKT63とAKT77の2測定について検討すると、炭素含有率は、特に不良という状態ではなく、顕微鏡観察の結果でも、特にミネラル等の混入が多いとはいえない。一方、δ^{13}C値をみると、加速器による測定結果であるが約-24‰、-21.5‰と他に比べやや重く、海産物に由来するおこげである可能性は否定できない。炭化物の由来を検討する必要があり、今後の課題であるが、海洋リザーバー効果を受けている可能性を想定し、年代については保留したい。また、AKT121と124については、上記したように、一度ベータアナリスティック社に委託して測定したが、炭素含有率の不良であり、ミネラルを含むことが観察された試料であるため、改めて処理量を増してAKT121re、124reとして前処理、調製を行い、東京大学で測定し直した。こちらの試料の方が、炭素含有率が高く、良好な状態であるので、ミネラルからの古い炭素の影響等を除去できていると考えられるので、以下では121re、124reの年代を用いることとする。なお、結果的に、121reはより新しい年代となり、124reは124とほぼ同一の数値であった。

大木10式土器であるAKT61については、上記のように海洋リザーバ効果を受けている可能性について検討する必要がある。

十腰内式土器群では、十腰内1式に比定されるAKT128は、紀元前2030～1880年に、十腰内2式に比定されるAKT121reは紀元前1910～1730年に含まれる可能性が、それぞれ90%以上である。茨野遺跡の十腰内2式土器付着物のAKT78の較正年代が、紀元前1920～1730年の確率が95%であり、同様な年代が示唆されている。なお、より古い編年的位置付けである茨野遺跡AKT79付着物は、紀元前2200-2020に90%以上の確率である。

AKT62は後期新地Ⅲ式に比定され、較正年代では、紀元前2030～1860年に含まれる確率が81%である。AKT73は縄紋後期新地Ⅳ式に比定され、較正年代では紀元前1775～1600年に含まれる可能性が約90%と最も高い。

十腰内Ⅴ式に比定されるAKT124reは紀元前1620～1420年が95%、AKT118は紀元前1500～1370年が88%で、それらの年代に較正される確率が最も高い。両者は、紀元前1500～1400年頃において重なっており、その頃に近いものと推定される。AKT65は、後期末の十腰内末期と考えられる土器に付着物で、紀元前1260～1010年に含まれる可能性が92%である。山形県高瀬山の大洞B1式土器の測定結果（小林2004）から考えると、紀元前1260年に近い頃の所産ではないかと考える。

関東地方の土器編年における、小林の推定暦年代と対比させると、AKT79は堀之内1式中～新段階、AKT62、128は堀之内2式古段階頃、AKT121reは堀之内2式中段階から加曽利B1式頃、AKT73は加曽利B1後半からB3式頃、AKT124reは加曽利B2式後半から安行Ⅰ式にかけて、AKT118は曽谷式から安行Ⅰ

式の年代に対比できる。

縄紋晩期では、AKT85が大洞B～BC頃に比定されているほか、土器編年上の位置づけが難しい粗製土器であるため、不明である。較正年代で見ても、おおむね晩期前葉頃の年代であろう。

弥生時代前期青木畑式に比定されるAKT113は、較正年代で紀元前400～345年に含まれる可能性と紀元前315～225年に含まれる可能性とが40%台でほぼ等しく、どちらの年代が妥当であるか、これだけでは決し得ない。前者の年代とみれば、これまでに国立歴史民俗博物館が行ってきた東日本の弥生前期・中期の年代測定結果（小林2004）に照らすと、弥生前期末頃にほぼ重なる年代である。類例の測定結果を増していく必要がある。

この報告は、平成16年度文部科学省・科学研究費補助金　学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジアー炭素年代測定による高精度編年体系の構築ー」（研究代表　西本豊弘）の成果の一部である。

＜参考文献＞

今村峯雄2000「考古学における^{14}C年代測定　高精度化と信頼性に関する諸問題」『考古学と化学を結ぶ』馬淵久夫・富永健編　UP選書　東京大学出版会

小林謙一2004「東日本」『弥生時代の実年代』春成秀爾・今村峯雄編　学生社

春成秀爾・今村峯雄・藤尾慎一郎・坂本稔・小林謙一2004「弥生時代の実年代」『日本考古学協会第70回総会研究発表要旨』

Stuiver,M.et.al. 1998 INTCAL98 Radiocarbon age calibration,24,000-0 cal BP.Radiocarbon 40(3),1041-1083.

秋田県教育委員会2002『古舘堤頭Ⅱ遺跡』秋田県文化財調査報告書第338集

秋田県教育委員会2003『砕淵遺跡』秋田県文化財調査報告書第349集

秋田県教育委員会2003『ヲフキ遺跡』秋田県文化財調査報告書第352集

秋田県教育委員会1998『虫内Ⅰ遺跡』秋田県文化財調査報告書第274集

秋田県教育委員会2001『岱Ⅰ遺跡・岱Ⅱ遺跡・岱Ⅲ遺跡』秋田県文化財調査報告書第314集

秋田県教育委員会2002『向様田A遺跡 遺物篇』秋田県文化財調査報告書第370集

神岡町教育委員会2004『茨野遺跡』神岡町文化財調査報告書

（追記）脱稿後、砕渕遺跡出土土器付着物1点について、追加の測定結果を得たので、結果のみを速報しておきたい。

AKT63re MTC-05382　砕渕遺跡包含層出土（349集47図105）、縄紋後期十腰内Ⅰ式（古）、口縁内付着、3875±35^{14}CBP、2460～2275（87.5%）、2250～2225（5.7%）、2215～2205（21%）cal BC

表1　試料一覧

試料No.	所在地	遺跡	報告	種類	出土区	部位	時代	型式
AKT　61	秋田県山本町	古館堤頭Ⅱ		土器付着	338集95P49図74　SI08	胴内	縄文中期	大木10
AKT　62	秋田県能代市	柏子所Ⅱ		土器付着	SX42	胴内	縄文後期	新地Ⅲ(宮戸Ⅲa)
AKT　65	秋田県森吉町	砕渕		土器付着	349集67P41図62　SKF45	口縁外・胴外上	縄文後期	十腰内Ⅴ
AKT　73	秋田県象潟町	ヲフキ		土器付着	352集105P86図707　遺構外 MB44-d　2b層	底内	縄文後期	新地Ⅳ
AKT　85	秋田県山内村	虫内Ⅰ		土器付着	274集未使用	胴内外	縄文晩期	大洞BC
AKT　89	秋田県山内村	虫内Ⅰ		土器付着	274集未使用	胴内外	縄文晩期	大洞B
AKT　91	秋田県山内村	虫内Ⅰ		土器付着	274集図版282　SR3020	胴内	縄文晩期	大洞B
AKT　94	秋田県山内村	虫内Ⅰ		土器付着	274集図版255　SR72	口縁外・胴内	縄文晩期	大洞B
AKT　113	秋田県河辺町	岱Ⅱ		土器付着	314集32p17図17　SK19	胴部外	弥生前期	青木畑
AKT　77	秋田県神岡町	茨野遺跡	文1	土器付着	土坑SK196，No.1	胴部内面焦	縄文後期	十腰内Ⅱ
AKT　78	秋田県神岡町	茨野遺跡	文1	土器付着	土坑SK269	胴部外面煤	縄文後期	十腰内Ⅱ
AKT　79	秋田県神岡町	茨野遺跡	文1	土器付着	石囲土器埋設炉SN175	胴部外面煤	縄文後期	宮戸Ⅰb
AKT　118	秋田県森吉町	漆下遺跡		土器付着	捨場ST01	口縁内	縄文後期	十腰内Ⅴ
AKT　121	秋田県森吉町	漆下遺跡		土器付着	捨場ST01	胴部内面焦	縄文後期	十腰内Ⅱ
AKT　121re	秋田県森吉町	漆下遺跡		土器付着	捨場ST01	胴部内面焦	縄文後期	十腰内Ⅱ
AKT　124	秋田県森吉町	漆下遺跡		土器付着	土坑SX07	口縁内	縄文後期	十腰内Ⅴ
AKT　124re	秋田県森吉町	漆下遺跡		土器付着	土坑SX07	胴部内面焦	縄文後期	十腰内Ⅴ
AKT　128	秋田県森吉町	漆下遺跡		漆	捨場ST101	胴内	縄文後期	十腰内Ⅰ
AKT　145	秋田県森吉町	向様田Ａ遺跡	文2	土器付着	370集97図9　捨場ST183	口縁内側焦	縄文晩期	大洞C1
AKT　163	秋田県森吉町	向様田Ａ遺跡	文2	土器付着	370集66図6　捨場ST183	胴部外側焦	縄文晩期	大洞BC

文献１　神岡町文化財調査報告書『茨野遺跡』、文献２　秋田県文化財調査報告書第370集『向様田Ａ遺跡遺物篇』

表2　試料の炭素量

No.	番号	採取量	処理量	回収量	含有率１	精製	ガス	含有率２	含有率３
AKT	61	48.62	40.97	2.90	7.1	2.27	1.08	47.6	3.4
AKT	62	59.27	25.45	15.65	61.5	5.18	3.18	61.4	37.8
AKT	63	89.07	49.59	0.70	1.4				
AKT	65	43.68	37.80	6.22	16.5	5.14	3.43	66.7	11.0
AKT	68	48.78	38.95	0.00	0.0				
AKT	73	44.48	44.48	27.56	62.0	4.64	3.07	66.1	41.0
AKT	89	1011.44	42.97	20.03	46.6	5.25	3.32	63.2	29.5
AKT	91	364.75	47.59	6.05	12.7	5.44	3.04	55.9	7.1
AKT	76	27.0	19.0	0.67	3.5				
AKT	77	27.0	21.0	6.38	30.4	2.84	1.66	58.5	17.8
AKT	78	16.0	16.0	9.40	58.8	3.85	2.38	61.8	36.3
AKT	79	14.0	14.0	6.52	46.6	2.77	1.51	54.5	25.4
AKT	82	122.22	39.54	1.56	3.9				
AKT	85	39.72	37.09	2.08	5.6	1.58	0.92	58.2	3.3
AKT	94	100.89	27.25	8.78	32.2				
AKT	109	28.17	24.82	1.11	4.5				
AKT	113b	175.69	29.50	6.69	22.7	5.52	3.64	65.9	15.0
AKT	118	262.0	33.5	4.47	13.4	1.63	1.05	64.4	8.6
AKT	121	102.4	32.4	2.30	7.1	2.04	0.88	43.1	3.1
AKT	121re	66.90	28.90	3.05	10.6	2.75	1.66	60.4	6.4
AKT	124	1314.3	146.2	3.95	2.7	1.62	0.68	42.0	1.1
AKT	124re	760.66	10.30	5.96	57.9	4.38	2.58	58.9	
AKT	128	25.0	16.0	13.30	83.1	2.54	1.68	66.1	55.0
AKT	135	156.2	23.2	10.56	45.5	1.99	1.28	64.3	29.3
AKT	145	59.4	20.1	2.19	10.9	2.07	1.23	59.4	6.5
AKT	159	99.7	26.1	1.19	4.6	0.80	0.28	35.0	1.6
AKT	163	498.6	31.7	3.07	9.7	1.85	1.12	60.5	5.9
AKT	164	140.3	21.3	0.64	3.0				

註　量はmg、率は%。精製は、二酸化炭素精製用の資料量、ガスは、二酸化炭素の炭素相当量
含有率１は回収量／処理量、含有率２はガス／精製、含有率３は、含有率１×２

表3　測定結果及び暦年較正年代

測定機関番号	試料No.		δ^{13}C (‰)1	δ^{13}C(‰)2	補正値		較正年代 cal BC	%		%		%		%		%
IAAA-40515	AKT	61		-23.93	4510	±40	3355-3085	94.3%	3055-3045	1.2%						
IAAA-40516	AKT	62		-22.74	3580	±40	2030-1860	81.5%	1840-1805	8.7%	1800-1775	5.0%				
IAAA-40517	AKT	65		-30.52	2950	±40	1365-1360	0.4%	1290-1270	2.9%	1260-1010	91.8%				
MTC-04298	AKT	73	-29.2	-33.1	3405	±35	1865-1840	4.0%	1805-1800	0.6%	1775-1600	89.7%	1550-1540	0.7%		
Beta-194821	AKT	85	-27.2		2850	±40	1185-1180	1.0%	1145-1140	0.5%	1125-900	93.8%				
IAAA-40518	AKT	89		-19.16	2990	±40	1375-1335	7.9%	1320-1110	84.3%	1095-1075	2.0%	1060-1050	1.0%		
IAAA-40519	AKT	91		-27.48	2900	±40	1255-1240	2.1%	1210-1195	3.9%	1190-1135	15.9%	1130-970	71.3%	955-940	1.9%
IAAA-40520	AKT	94		-20.88	3030	±40	1395-1205	84.8%	1200-1185	3.5%	1175-1155	3.9%	1140-1130	2.7%		
IAAA-40521	AKT	113		-26.11	2280	±40	400-345	43.5%	315-225	46.7%	220-205	5.2%				
MTC03301	AKT	77		-21.5	4090	±35	2860-2800	19.6%	2770-2770	0.5%	2750-2710	6.9%	2700-2550	61.1%	2530-2530	40.0%
MTC03302	AKT	78		-26.5	3510	±35	1920-1730	95.2%	1700-1700	0.6%						
MTC03303	AKT	79		-26.0	3720	±40	2270-2250	1.8%	220-2220	0.5%	2200-2020	91.3%	1990-1980	1.6%		
IAAA-31605	AKT	118		-32.1±0.8	3150	±30	1510-1510	0.8%	1500-1370	87.9%	1330-1320	6.2%				
Beta-186413	AKT	121	-26.1		3640	±40	2130-2070	19.8%	2060-1890	75.0%						
MTC-04046	AKT	121re		-27.5	3495	±40	1910-1730	91.2%	1710-1690	4.1%						
Beta-196412	AKT	124	-24.3		3280	±40	1680-1660	4.7%	1660-1650	1.4%	1630-1480	83.0%	1480-1450	6.0%		
MTC-04047	AKT	124re		-24.6	3250	±40	1670-1670	0.9%	1620-1420	94.8%						
IAAA-31606	AKT	128		-28.5±0.7	3620	±30	2110-2090	2.9%	2030-1880	92.0%						
IAAA31101	AKT	145		-40.1±0.9	2980	±40	1370-1350	3.4%	1350-1340	0.9%	1310-1100	84.9%	1100-1050	6.1%		
IAAA31102	AKT	163		-29.6±0.9	3100	±40	1480-1480	0.6%	1440-1260	94.4%	1220-1220	0.5%				

δ^{13}C値１は、安定質量分析計での測定値、δ^{13}C値２は加速器による測定で参考に付す。

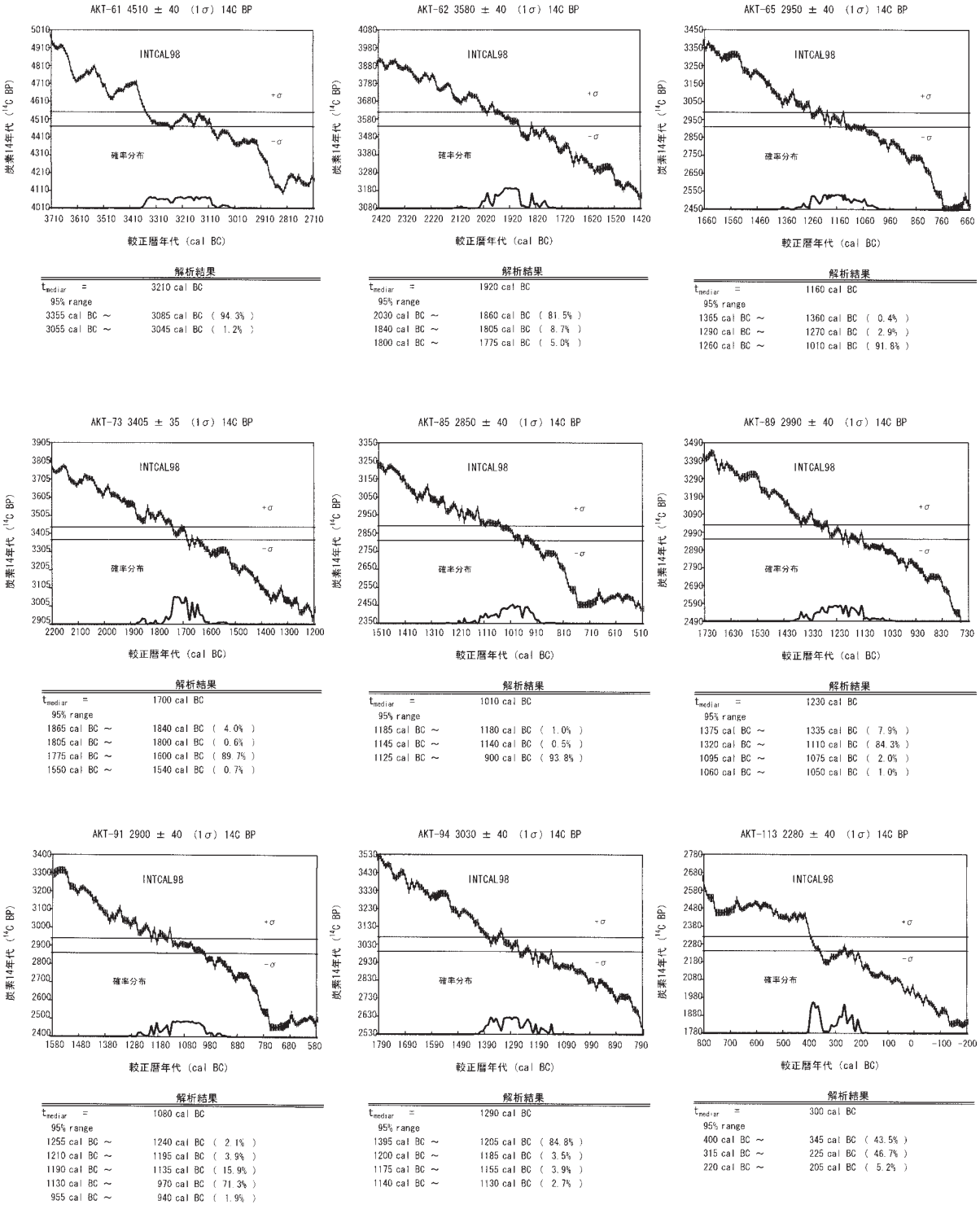


図１　秋田県出土試料の歴年較正確率分布（１）

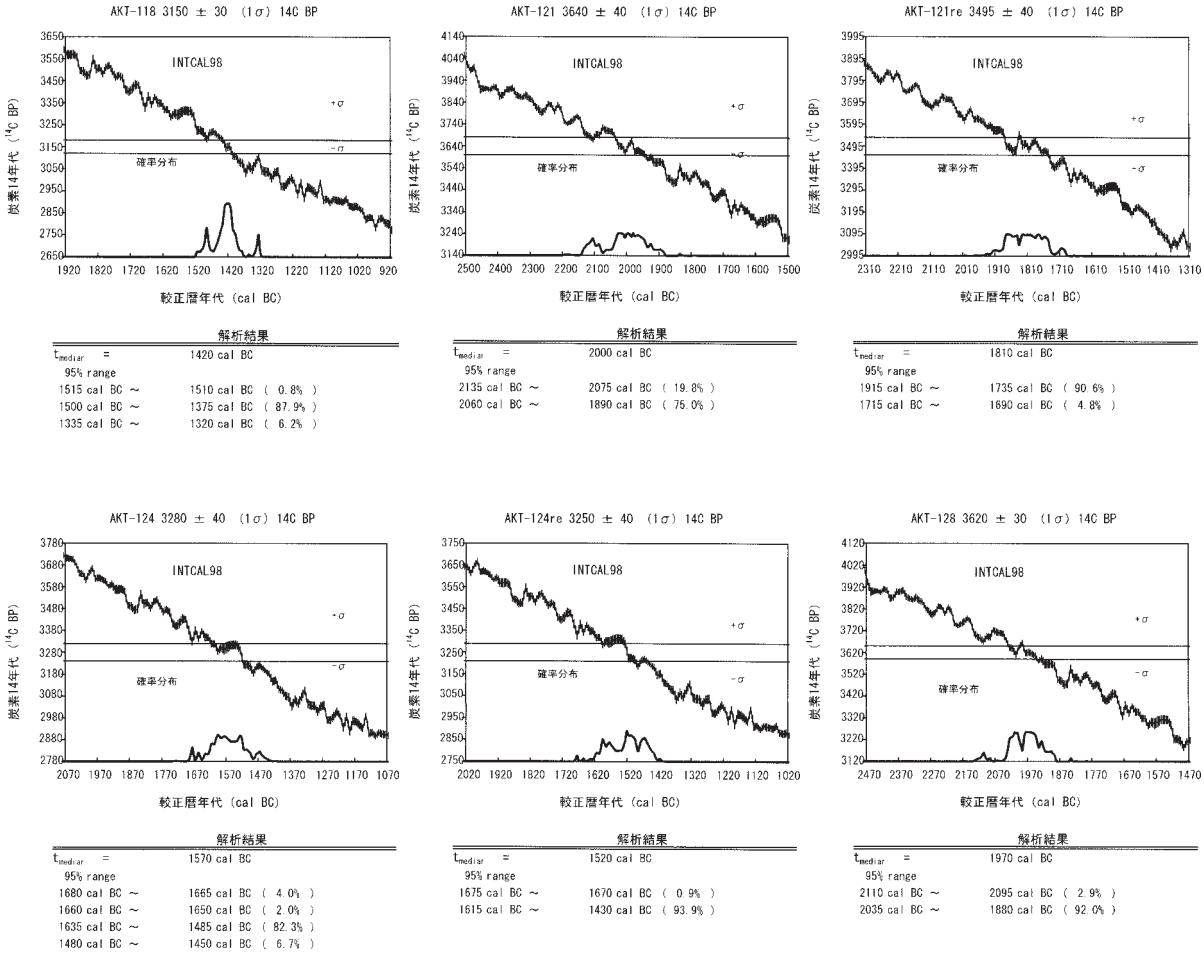
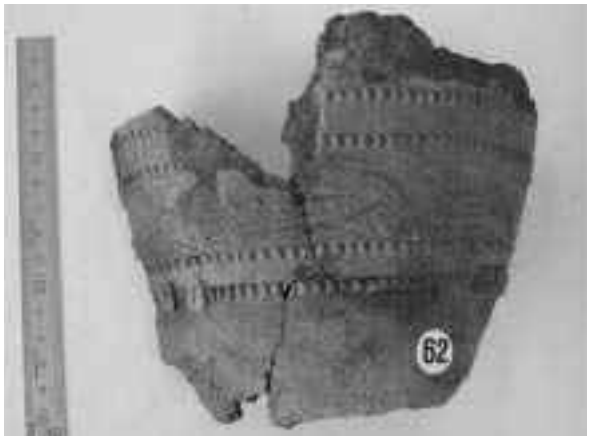


図２　秋田県出土試料の歴年較正確率分布（２）

図版1

AKT61　測定土器

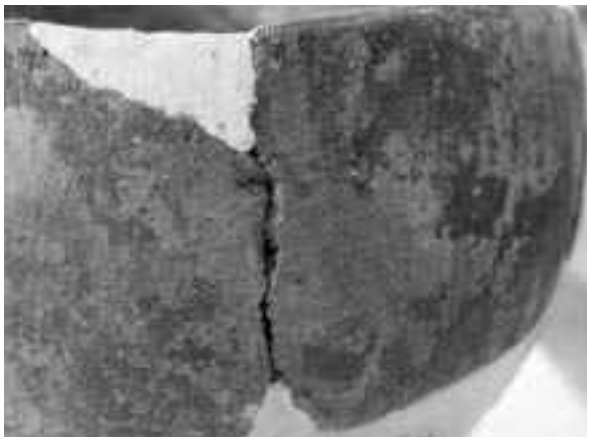
AKT61　内面炭化物付着状態



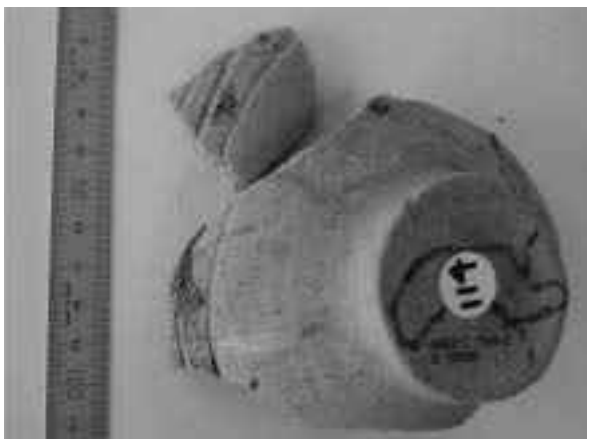
AKT62　測定土器

AKT62　内面炭化物付着状態

AKT65　測定土器



AKT65　外面炭化物付着状態



AKT73　測定土器

AKT73　内面漆付着状態

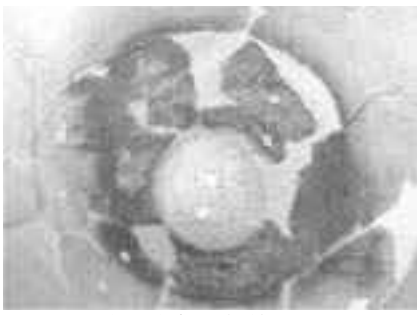
AKT85　測定土器

AKT85　外面炭化物付着状態

AKT85　内面炭化物付着状態

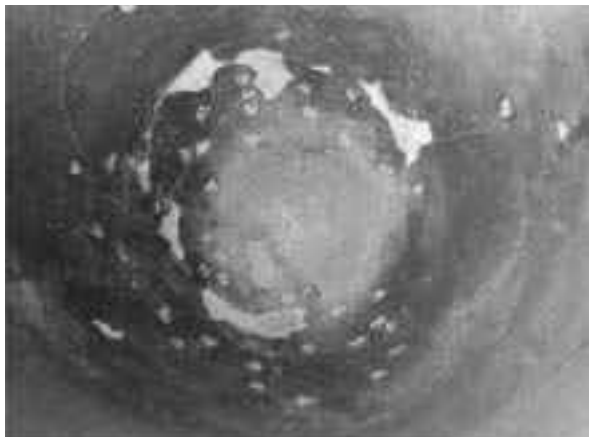
AKT89　測定土器

AKT89　外面炭化物付着状態



AKT89　内面炭化物付着状態

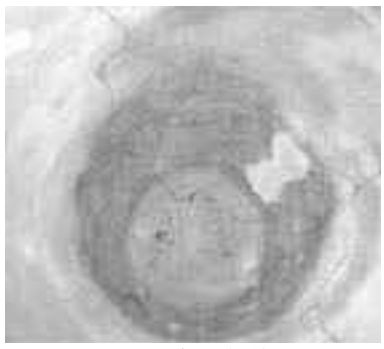
AKT91　測定土器



AKT91　内面炭化物付着状態

AKT94　測定土器

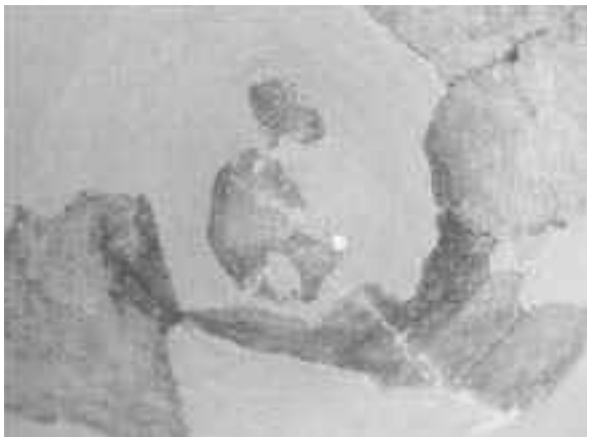
AKT94　外面炭化物付着状態



AKT94　内面炭化物付着状態

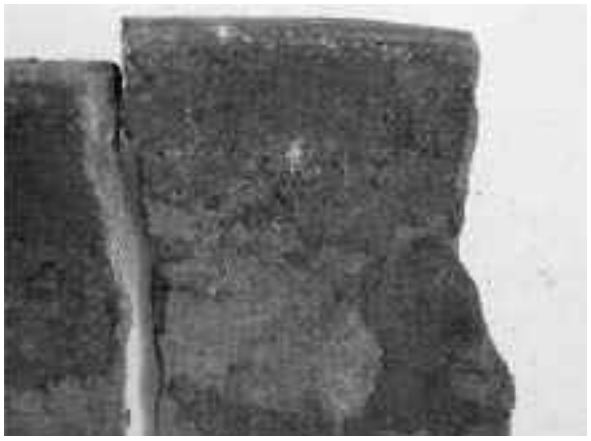
図版3

AKT113　測定土器



AKT113　内面炭化物付着状態

AKT118　測定土器



AKT118　内面炭化物付着状態

AKT121　測定土器

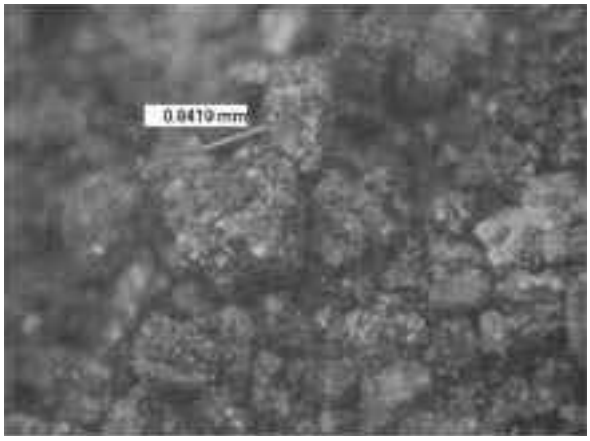
AKT121　内面炭化物付着状態

AKT124　測定土器

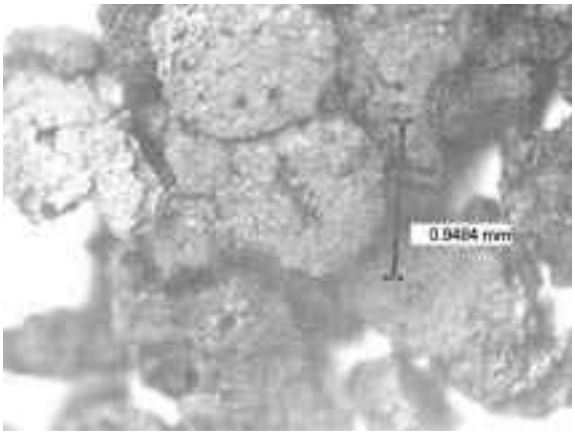
AKT124　内面炭化物付着状態

AKT128　測定土器

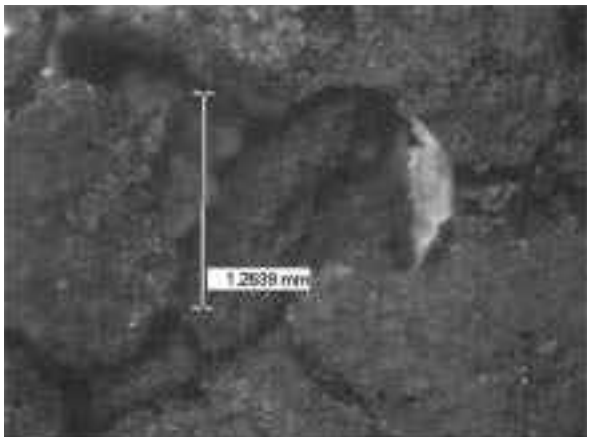
AKT128　内面漆付着状態



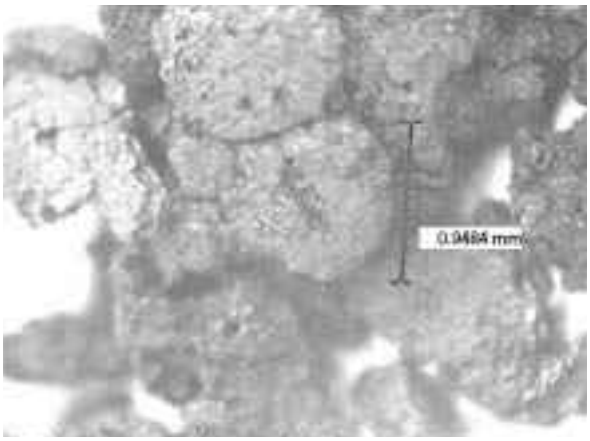
AKT61　AAA 処理前　23 倍



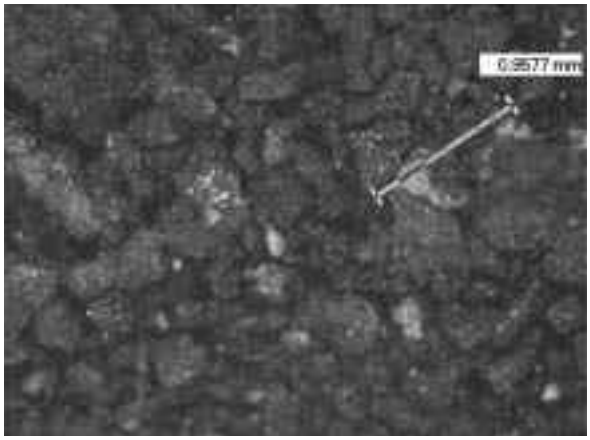
AKT61　AAA 処理済み　23 倍



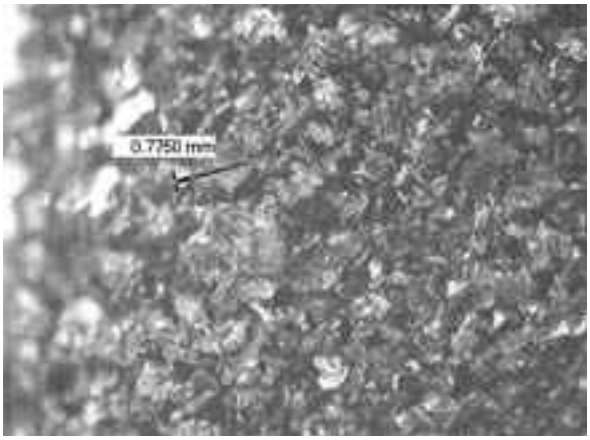
AKT62　AAA 処理前　23 倍



AKT62　AAA 処理済み　23 倍

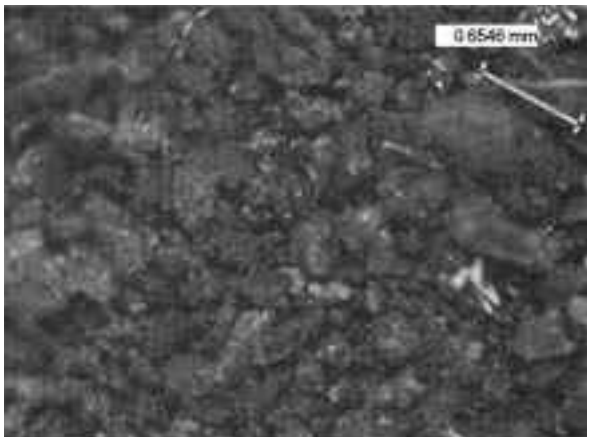


AKT65　AAA 処理前　23 倍

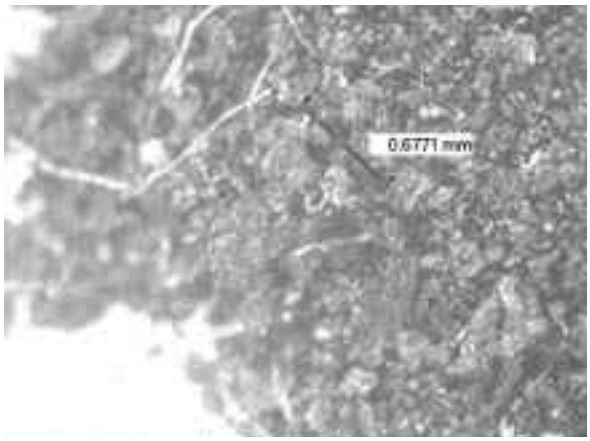


AKT65　AAA 処理済み　23 倍

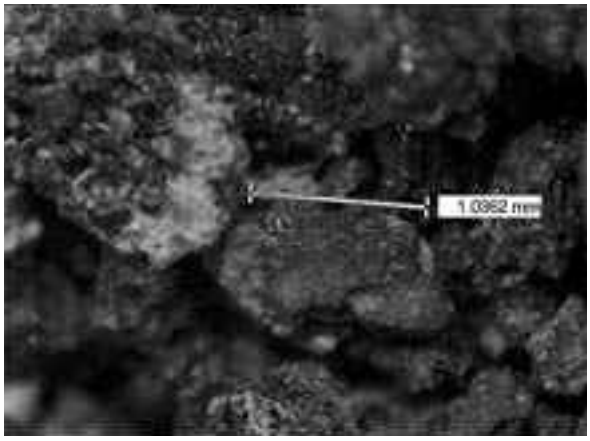
図版5



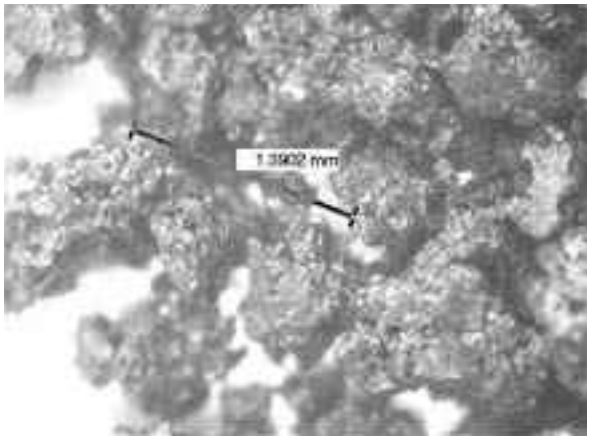
AKT85　AAA 処理前　23 倍



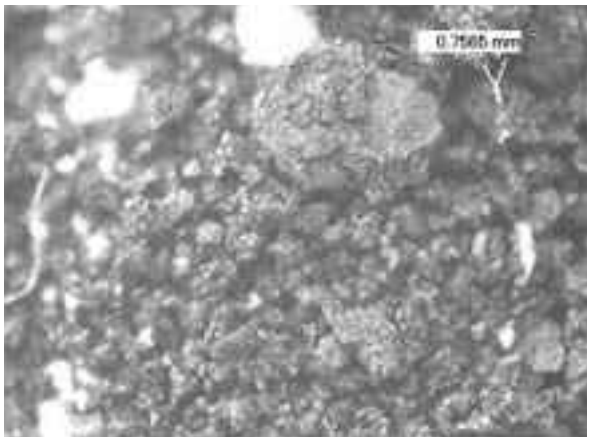
AKT85　AAA 処理済み　23 倍



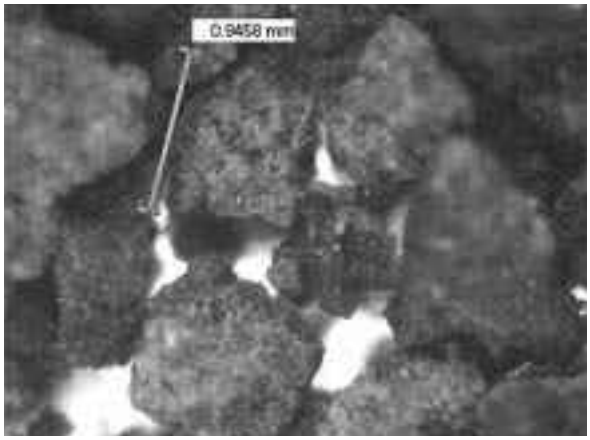
AKT89　AAA 処理前　23 倍



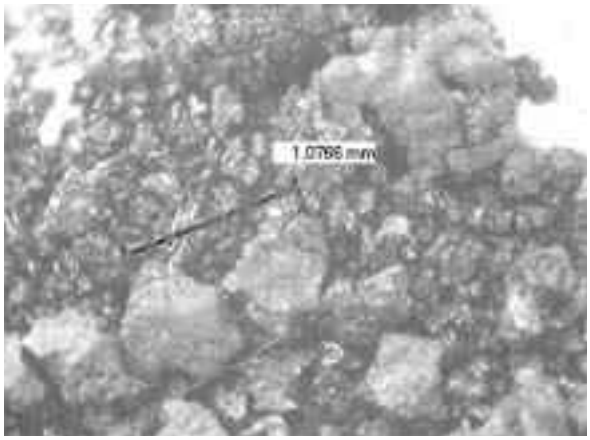
AKT89　AAA 処理済み　23 倍



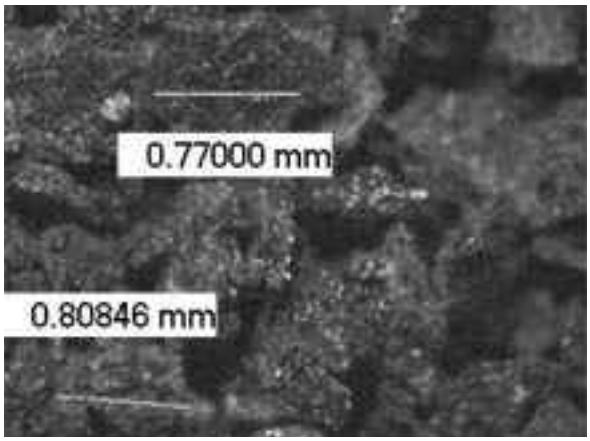
AKT91　AAA 処理後　23 倍



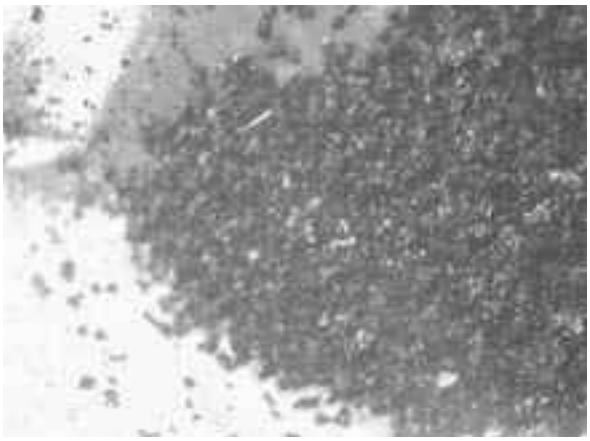
AKT94　AAA 処理前　23 倍



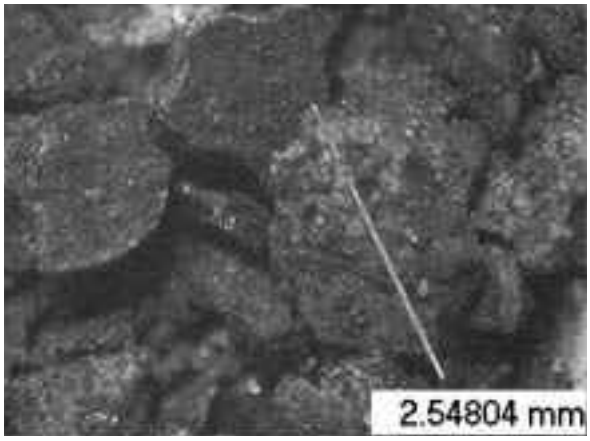
AKT94　AAA 処理済み　23 倍



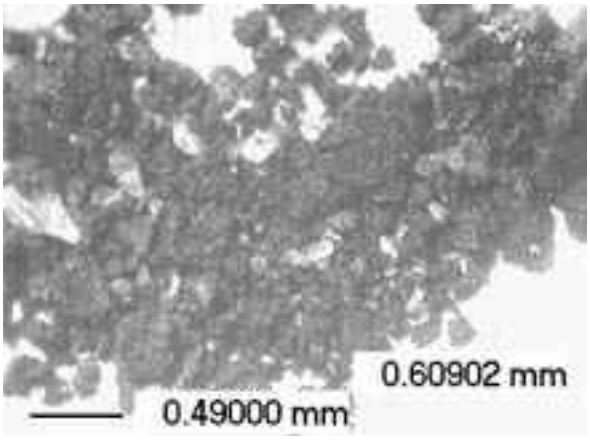
AKT118　AAA 処理前　25 倍



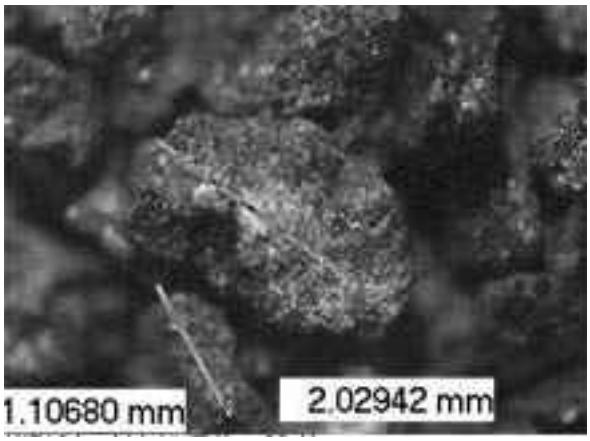
AKT118　AAA 処理済み　25 倍



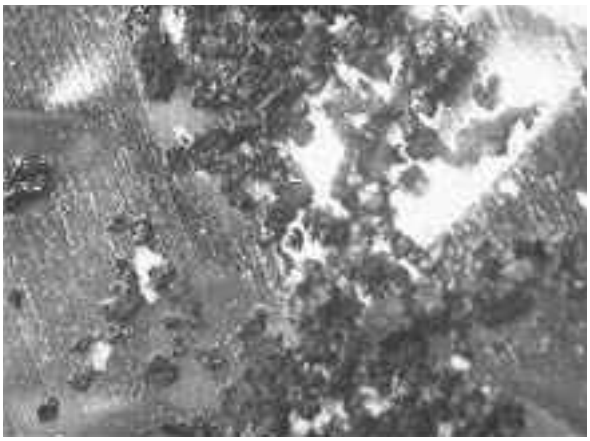
AKT121　AAA 処理前　25 倍



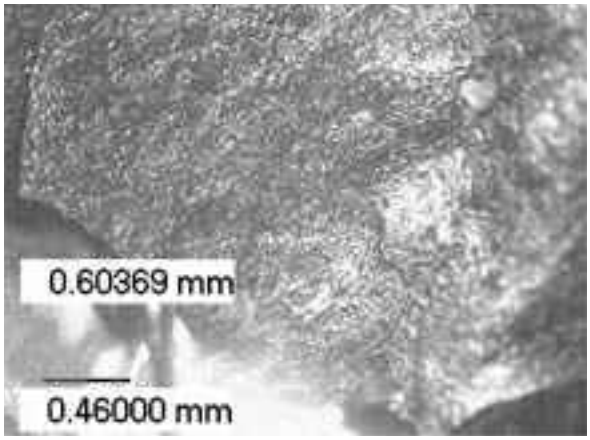
AKT121　AAA 処理済み　25 倍



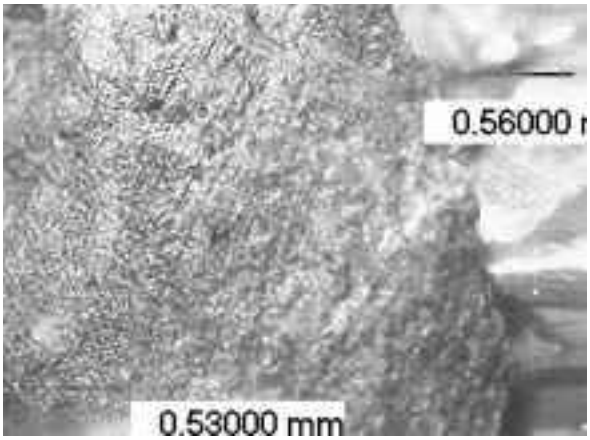
AKT124　AAA 処理前　25 倍



AKT124　AAA 処理済み　25 倍



AKT128　漆表面 AAA 処理後　25 倍



AKT128　漆裏面 AAA 処理済み　25 倍

AKT61
AKT62
AKT65
AKT73
AKT91
AKT94
AKT113
AKT77
AKT78
AKT145
AKT163
AKT79
0
10cm

図３　年代測定土器

小又川流域における縄文時代の竪穴住居跡について（２）

河田　弘幸*

はじめに

前稿では、小又川流域における縄文時代前期から中期の竪穴住居跡について論じた(註１)。当該地域における縄文時代前期の竪穴住居跡を検出した遺跡は５遺跡、中期の竪穴住居跡を検出した遺跡は18遺跡あり、小集落が分散して存在していた。竪穴住居の平面形は、円形または楕円形を基調としており、森吉家ノ前Ａ遺跡の前期後葉と考えられる大型住居跡や同じく前期後葉の小型の住居が多い二重鳥Ｃ遺跡で竪穴住居の規模に特徴が見られる。前期中葉の円筒下層ａ式期から中期中葉の円筒上層ｅ式期の竪穴住居には、一般的に地床炉が伴うが、漆下遺跡では、前期中葉に円筒下層ａ式土器を使用した土器埋設炉が屋外炉として出現し、中期前葉から中期中葉には土器埋設炉や土器片囲炉を有する竪穴住居もある。中期後葉には、複式炉が一般化し、複式炉→立石＋地床炉→立石＋土器埋設炉の変遷が見られる。深渡遺跡と深渡Ａ遺跡では、複式炉を有する竪穴住居を廃絶する際に、壁際に礫を配する廃絶儀礼が行われた住居が検出された。これらは、後期前葉に見られる配石遺構の祖形と考えられる。

本稿では、前稿の続きとして縄文時代後期から晩期にかけての竪穴住居跡について論ずる(註２)。

１　縄文時代後期の竪穴住居跡

後期の遺跡は、上悪戸Ａ遺跡、上悪戸Ｃ遺跡、上悪戸Ｄ遺跡、桐内Ａ遺跡、桐内Ｂ遺跡、桐内Ｃ遺跡、桐内Ｄ遺跡、桐内沢遺跡、姫ヶ岱Ａ遺跡、姫ヶ岱Ｂ遺跡、姫ヶ岱Ｃ遺跡、姫ヶ岱Ｄ遺跡、日廻岱Ａ遺跡、日廻岱Ｂ遺跡、橋場岱Ｂ遺跡、橋場岱Ｃ遺跡、橋場岱Ｇ遺跡、上ハ岱Ａ遺跡、上ハ岱Ｂ遺跡、漆下遺跡、二重鳥Ａ遺跡、二重鳥Ｂ遺跡、二重鳥Ｃ遺跡、二重鳥Ｄ遺跡、二重鳥Ｅ遺跡、二重鳥Ｆ遺跡、二重鳥Ｇ遺跡、二重鳥Ｈ遺跡、向様田Ｂ遺跡、向様田Ｃ遺跡、向様田Ｅ遺跡、向様田Ｆ遺跡、惣瀬遺跡、天津場Ａ遺跡、天津場Ｂ遺跡、天津場Ｃ遺跡、ネネム沢Ａ遺跡、ネネム沢Ｂ遺跡、森吉家ノ前Ａ遺跡、森吉家ノ前Ｂ遺跡、森吉家ノ前Ｃ遺跡、森吉Ａ遺跡、森吉Ｂ遺跡、地蔵岱遺跡、地蔵岱Ａ遺跡、鷲ノ瀬遺跡、栩岱遺跡、砕渕遺跡、深渡遺跡、深渡Ａ遺跡、丹瀬口遺跡、桂の沢遺跡がある。これらの遺跡の中で、漆下遺跡は検出した遺構数・出土遺物から当地域において後期の最大級の遺跡である。後期の竪穴住居跡を検出した遺跡は、桐内Ａ遺跡５軒（後葉）、桐内Ｃ遺跡４軒（不明）、姫ヶ岱Ｄ遺跡１軒（後葉１・中期末葉から後期初頭は含まず）、日廻岱Ｂ遺跡29軒（前葉）、漆下遺跡14軒（前葉５・中葉４・後葉３・不明２）、二重鳥Ｃ遺跡２軒（前葉以前１・前葉１）、二重鳥Ｄ遺跡12軒（後葉）、二重鳥Ｅ遺跡６軒（後葉）、向様田Ｄ遺跡１（中葉）、向様田Ｅ遺跡１（不明）向様田Ｆ遺跡２軒（後葉～晩期初頭）、砕渕遺跡１（後葉）、深渡遺跡１（前葉）である。

検出した竪穴住居の床面積は、10㎡未満３軒、10～20㎡37軒、20～30㎡16軒、30～40㎡４軒であり、前葉・中葉・後葉における床面積には、時期ごとの特徴は見られない。平面形は、姫ヶ岱Ｄ遺跡ＳＩ40のみが不整形と報告されているが、その他は円形または楕円形を基調とする。住居は４～６基の主柱穴で構築されている場合が多く、並んで３軒検出された桐内Ｃ遺跡の住居跡の主柱穴は７

＊ 秋田県埋蔵文化財センター北調査課学芸主事

基または８基であり、円形に配置される。また、漆下遺跡ＳＩ 170と二重鳥Ｄ遺跡ＳＩ140のように壁柱穴が巡るものもある。

検出した後期の竪穴住居跡81軒（桂の沢遺跡を除く）のうち炉を伴う住居は65軒ある(註3)。炉の形態は、地床炉12、地床炉→石囲炉（炉の作り替え）１、石囲炉15、石囲炉→地床炉（炉の作り替え）１、土器埋設炉20、立石＋地床炉（立石炉(註4)）２、立石＋土器埋設炉（土器埋設炉立石炉(註4)）13、石組＋土器埋設炉１、石囲土器埋設炉１、石組炉１、土器片囲炉１である。

前葉の竪穴住居跡は、日廻岱Ｂ遺跡で29軒、漆下遺跡で５軒、二重鳥Ｃ遺跡で２軒、深渡遺跡で１軒検出された。この時期の住居に伴う炉は、石囲炉１、土器埋設炉17、立石＋地床炉１、立石＋土器埋設炉13、石組＋土器埋設炉１、石組炉１であり、地床炉を作り替えている炉もある。土器埋設炉や立石＋土器埋設炉を伴う住居跡は日廻岱Ｂ遺跡でまとまって検出されており、漆下遺跡でも立石＋土器埋設炉を伴う住居跡を検出している。炉は住居中央に構築している場合が多い。姫ヶ岱Ｄ遺跡で検出されたＳＩ40の床面積は７㎡と小さく、平面形はやや不整な楕円形を呈する。柱穴と炉は検出されていない。二重鳥Ｃ遺跡で検出されたＳＩ39・124の床面積はそれぞれ12㎡と16㎡であり、平面形はどちらも円形を呈する。壁高は17㎝と45㎝であり、ＳＩ124が深く掘り込まれている。ＳＩ39は８基の柱穴が検出されており、Ｐ３とＰ４は入口に伴う柱穴の可能性があるという(註5)。炉の形態は石組＋土器埋設炉であり、住居中央に構築されている。ＳＩ40は７基の柱穴が検出されたが、入口に伴う柱穴はなく、炉も検出されていない。深渡遺跡で検出したＳＩ95の床面積は10㎡で平面形は円形を呈する。柱穴は住居の掘り込みの外側に６基検出された。住居中央には２個の大きい川原石が出土したが、炉は検出されていない。住居内より、４単位の小突起を有し口縁に沿って２条の撚糸圧痕を施文する深鉢形土器である。突起下部にリング状の貼付を配し、リング状の貼付より１条の撚糸圧痕が垂下する。この土器は日廻岱Ｂ遺跡で出土している土器と類似し、当時期における地域性を伺わせる土器である。

中葉の竪穴住居跡は、漆下遺跡で５軒、向様田Ｄ遺跡で１軒が検出された。中葉の住居に伴う炉は、地床炉２、石囲土器埋設炉１である。漆下遺跡では、遺跡中央南側の低位段丘面で重複した６軒の住居跡が検出され、そのうちの４軒が中葉の所産である。床面積は５～16㎡（推定）で、平面形は円形または楕円形を呈する。いずれの住居跡からも主柱穴は検出されていない。炉を検出した住居跡は、ＳＩ168とＳＩ204であり、どちらも住居中央に地床炉をもつ。ＳＩ975はＳＴ101捨て場上面に作られており、住居西側の壁と床面の一部を検出した。平面形は楕円形を呈すると考えられ、柱穴５基と壁柱穴をもつ。炉は検出されなかった。漆下遺跡で検出した住居跡は、出土遺物から十腰内３式期に構築されたと考えられる。向様田Ｄ遺跡のＳＩ12の床面積は16㎡で円形を呈する。住居中央には川原石を円形に配し、正位に埋設した石囲土器埋設炉を構築している。

後葉の竪穴住居跡は、桐内Ａ遺跡で５軒、姫ヶ岱Ｄ遺跡で１軒、漆下遺跡で２軒、二重鳥Ｄ遺跡で12軒、二重鳥Ｅ遺跡で６軒、向様田Ｆ遺跡で２軒、砕渕遺跡で１軒が検出された。後葉の住居に伴う炉は、地床炉９、地床炉→石囲炉１、石囲炉12、石囲炉→地床炉１、土器片囲炉１であり、地床炉と石囲炉が一般的になる。すべての炉は住居ほぼ中央部に位置する。石囲炉は基本的に河原石を円形に配する。桐内Ａ遺跡で検出した竪穴住居跡の床面積は、12～29㎡であり、平面形は円形または楕円形を呈する。住居中央には円形の石囲炉をもつ。ＳＩ32は６基の柱穴が、ＳＩ37は４基の柱穴が住居

掘り込みの外に巡る。その理由として、床面から柱穴を掘り掘り下げると地山砂礫中の礫の含有率が顕著になりさらに掘り下げることが困難になることから、掘り込み易い周縁部に設置した可能性を挙げている。(註６) 漆下遺跡では、中葉の住居と重複して２軒の住居跡が検出された。床面積は、10㎡と17㎡であり、平面形は楕円形を呈する。主柱穴は検出されず、ＳＩ170の一部には壁柱穴が巡る。ＳＩ170は住居中央に地床炉と石囲炉をもつが、地床炉から石囲炉に作り替えられている。ＳＩ204は住居中央に地床炉をもつ。出土土器から十腰内４式期に構築されたと考えられる。向様田Ｆ遺跡では、後期後葉から晩期前葉に位置づけられる竪穴住居跡が２軒検出された。どちらも平面形は楕円形を呈し、床面積はＳＩ01が18㎡、ＳＩ02が29㎡である。柱穴はＳＩ02で８基検出している。ＳＩ01の中央はわずかに褐色に変色しており、ＳＩ02の中央には礫が半環状に巡るが、いずれも地床炉または石囲炉とは判断できないとしている。(註７) ＳＩ02の東壁際には長さ3.5ｍにわたり壁溝が巡るが、壁溝を伴う住居は他の遺跡では検出されていない。なお、放射性炭素年代測定結果は、ＳＩ01は2920±50ＢＰ、ＳＩ02は3240±60ＢＰであり時期差を示す。砕渕遺跡でも後葉の住居跡が１軒検出されている。検出されたＳＩ94は、大半が攪乱等で消失しているが、平面形は径４～５ｍの略円形を呈すると考えられる。柱穴は７基検出されたが、明確な柱配置にはなっていない。住居中央には、長軸62㎝、短軸52㎝の楕円形を呈する土器片囲炉が構築されている。浅く掘り窪めた底面中央に大型の凹んだ礫を設置し、周囲には中型の円礫を敷き詰めて火床面としている。壁には同一個体の深鉢形土器破片を突き立てて並べている。また、二重鳥Ｄ遺跡と二重鳥Ｅ遺跡では合わせて18軒の住居跡が検出されている。

２　縄文晩期の竪穴住居跡

晩期の遺跡は、上悪戸Ｃ遺跡、上悪戸Ｄ遺跡、桐内Ａ遺跡、桐内Ｂ遺跡、桐内Ｃ遺跡、桐内Ｄ遺跡、姫ヶ岱Ａ遺跡、姫ヶ岱Ｂ遺跡、姫ヶ岱Ｃ遺跡、姫ヶ岱Ｄ遺跡、日廻岱Ａ遺跡、日廻岱Ｂ遺跡、橋場岱Ｂ遺跡、橋場岱Ｃ遺跡、橋場岱Ｄ遺跡、橋場岱Ｆ遺跡、上ハ岱Ａ跡、上ハ岱Ｂ遺跡、二重鳥Ａ遺跡、二重鳥Ｂ遺跡、二重鳥Ｃ遺跡、二重鳥Ｄ遺跡、二重鳥Ｅ遺跡、二重鳥Ｇ遺跡、水上ミ遺跡、向様田Ａ遺跡、向様田Ｂ遺跡、向様田Ｃ遺跡、向様田Ｄ遺跡、向様田Ｅ遺跡、向様田Ｆ遺跡、ネネム沢Ｃ遺跡、森吉家ノ前Ｂ遺跡、栩岱、深渡遺跡、深渡Ａ遺跡、桂の沢遺跡がある。その中で、向様田Ａ遺跡、向様田Ｄ遺跡は遺物の出土量から当地区の晩期の最大級の遺跡である。これらの遺跡のうち、検出された晩期の竪穴住居跡は、姫ヶ岱Ｄ遺跡２（前葉）、日廻岱Ｂ遺跡１（前葉）、二重鳥Ｅ遺跡４（前葉３・後葉１）、深渡遺跡１（中葉）である。(註８)

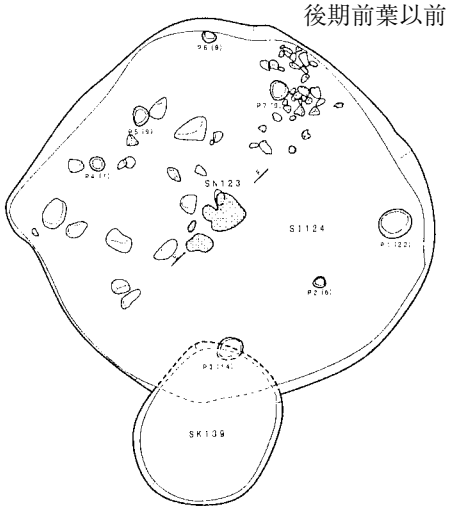
前葉の竪穴住居跡は、姫ヶ岱Ｄ遺跡で２軒、日廻岱Ｂ遺跡で１軒、二重鳥Ｅ遺跡で３軒、深渡遺跡で１軒が検出された。姫ヶ岱Ｄ遺跡で検出された２軒の住居の床面積は、ＳＩ04が７㎡、ＳＩ05が９㎡と小さく、平面形はどちらも円形を呈する。ＳＩ04では住居掘り込み外から２基の柱穴が検出された。炉の形態は、ＳＩ04が石囲炉、ＳＩ05は石囲土器埋設炉と土器埋設炉が住居中央に構築される。どちらの石囲も河原石を円形に配する。石囲土器埋設炉の土器は胴部上半を欠損しており、土器埋設炉の土器は口縁部と底部を欠損している。どちらも粗製土器であり、正位に埋設している。ＳＩ05の石囲土器埋設炉と土器埋設炉は隣接しており、炉の作り替えか併存していたのかははっきりしない。日廻岱Ｂ遺跡で検出された竪穴住居跡の床面積は10㎡で、平面形は楕円形を呈する。住居中央に石囲炉が構築されており、炉の礫は二重に配されている。炉の中央部には扁平な巨礫が入れられてお

り、住居の廃絶儀礼と考えられる。ただし、本住居は石囲炉に焼土がないこと、礫にも被熱痕がいられないことから配石遺構の可能性もあるとしている(註9)。二重鳥Ｅ遺跡で検出された３軒の住居跡の床面積は10～14㎡であり、平面形はすべて楕円形を呈する。主柱穴は、ＳＩ26は３基、ＳＩ35は４基検出されているが、ＳＩ26は南側が削平されており本来は４本柱の可能性もある。また、ＳＩ34は10基の柱穴が検出されているが、明確な柱配置にはなっていない。炉の形態は、ＳＩ26は土器埋設炉、ＳＩ34は掘込炉、ＳＩ35は石囲炉であり、それぞれ住居中央に構築される。石囲炉は河原石を円形に配している。ＳＩ26の埋設土器は、口縁部を沈線で区画し区画内に刺突文を巡らす完形の土器である。深渡遺跡で検出された住居跡は、北半が削平されているが、平面形は楕円形を呈すると考えられる。住居ほぼ中央に地床炉を有し、壁際には壁柱穴が巡る。

後葉の竪穴住居跡は二重鳥Ｅ遺跡で１軒検出された。検出された住居の床面積は10㎡で、平面形は楕円形を呈する。柱穴は、床面で９基、掘り込み外で２基検出されており、床面の４基が主柱穴である。住居中央に地床炉をもつ。

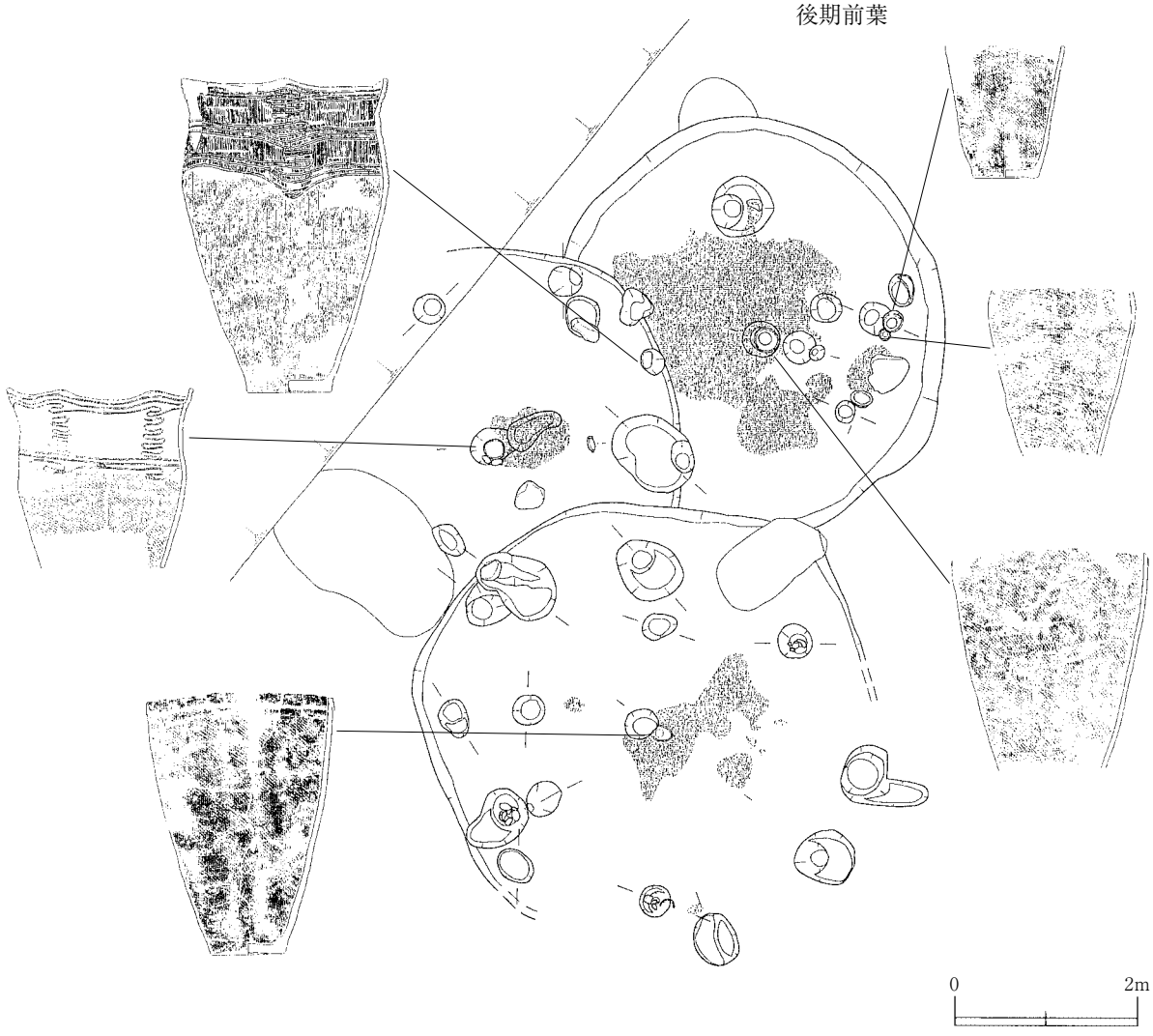
二重鳥Ｃ　SI124

後期前葉以前

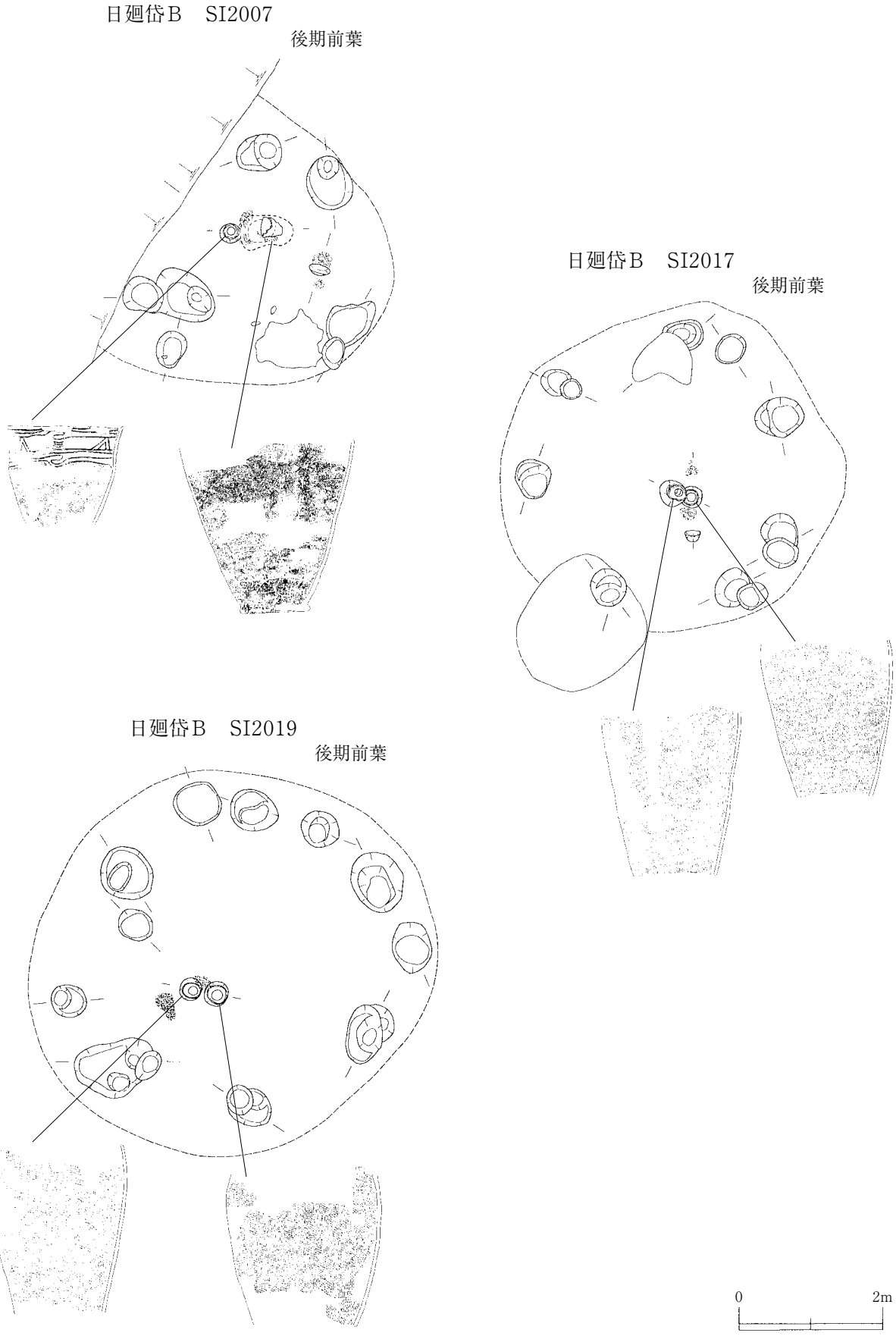


日廻岱Ｂ　SI2001・2005・2042

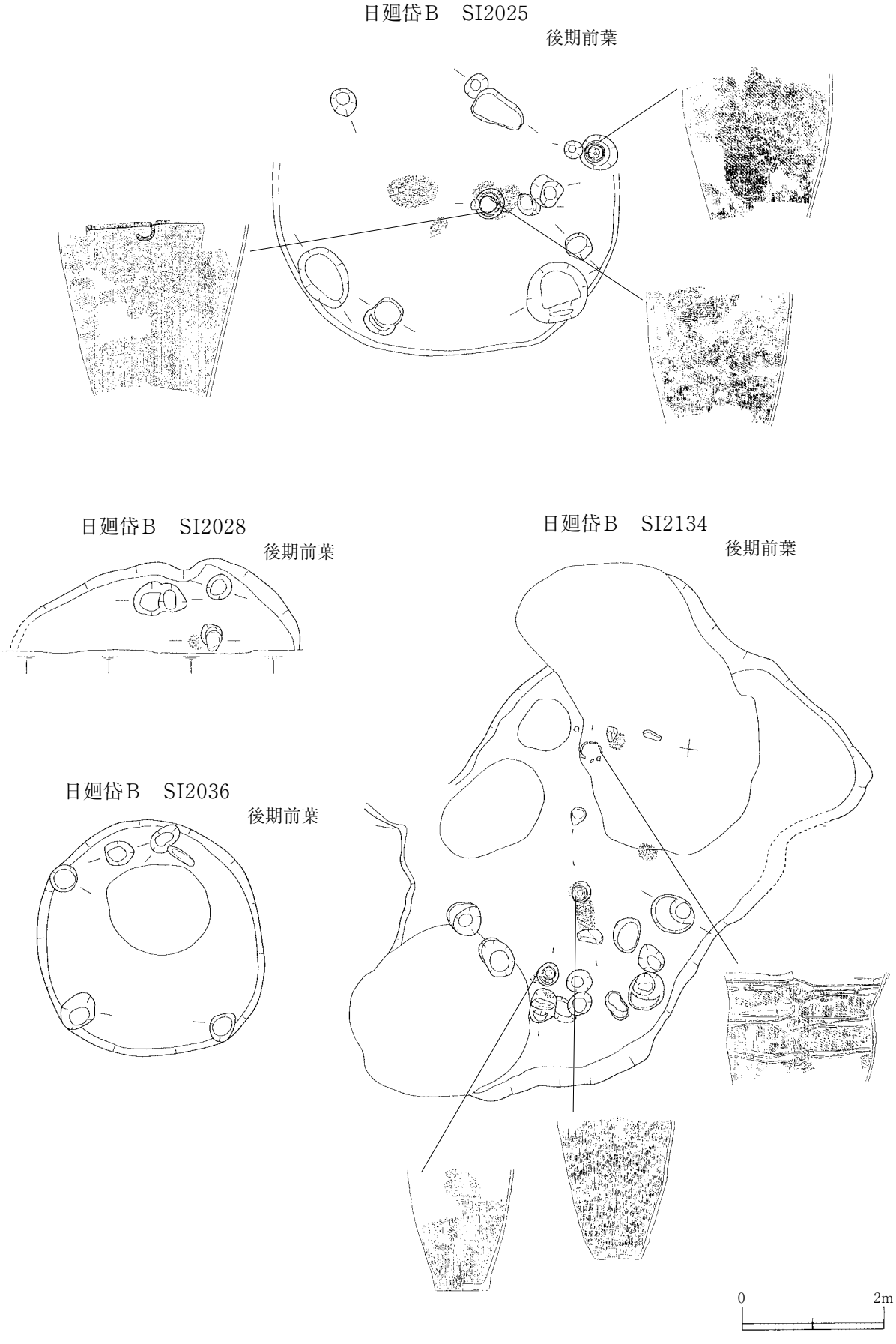
後期前葉



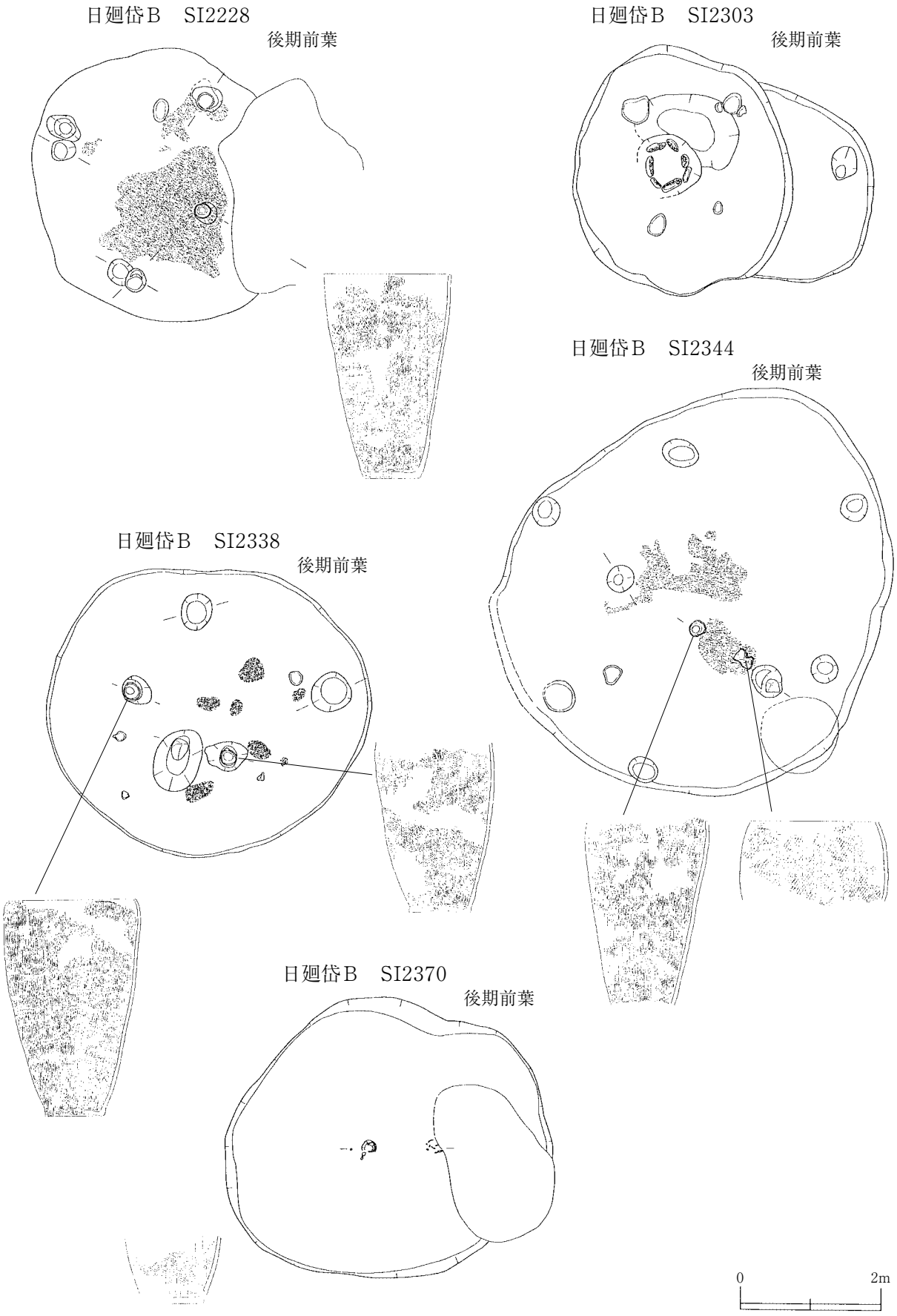
第１図　検出された竪穴住居跡



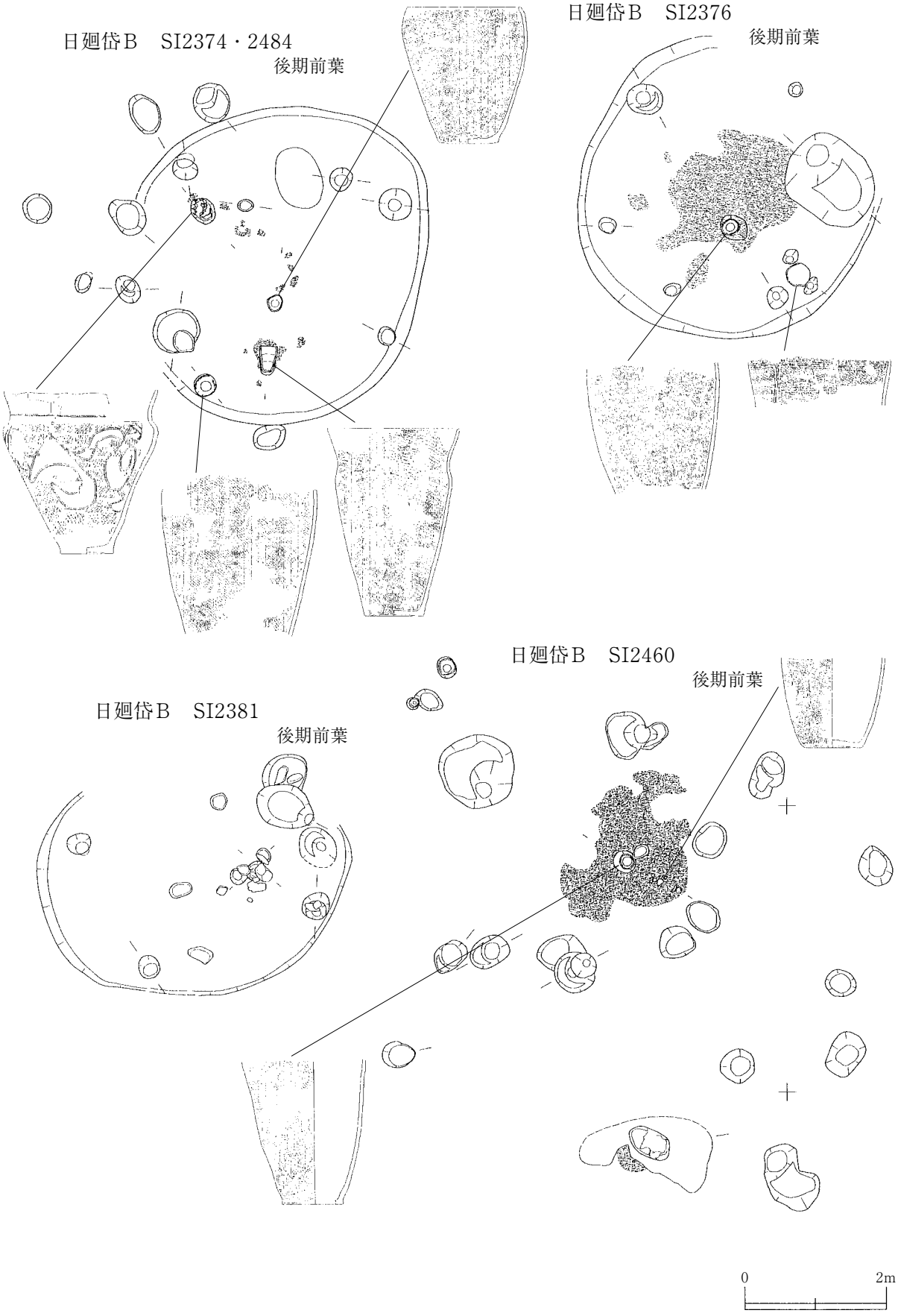
第２図　検出された竪穴住居跡



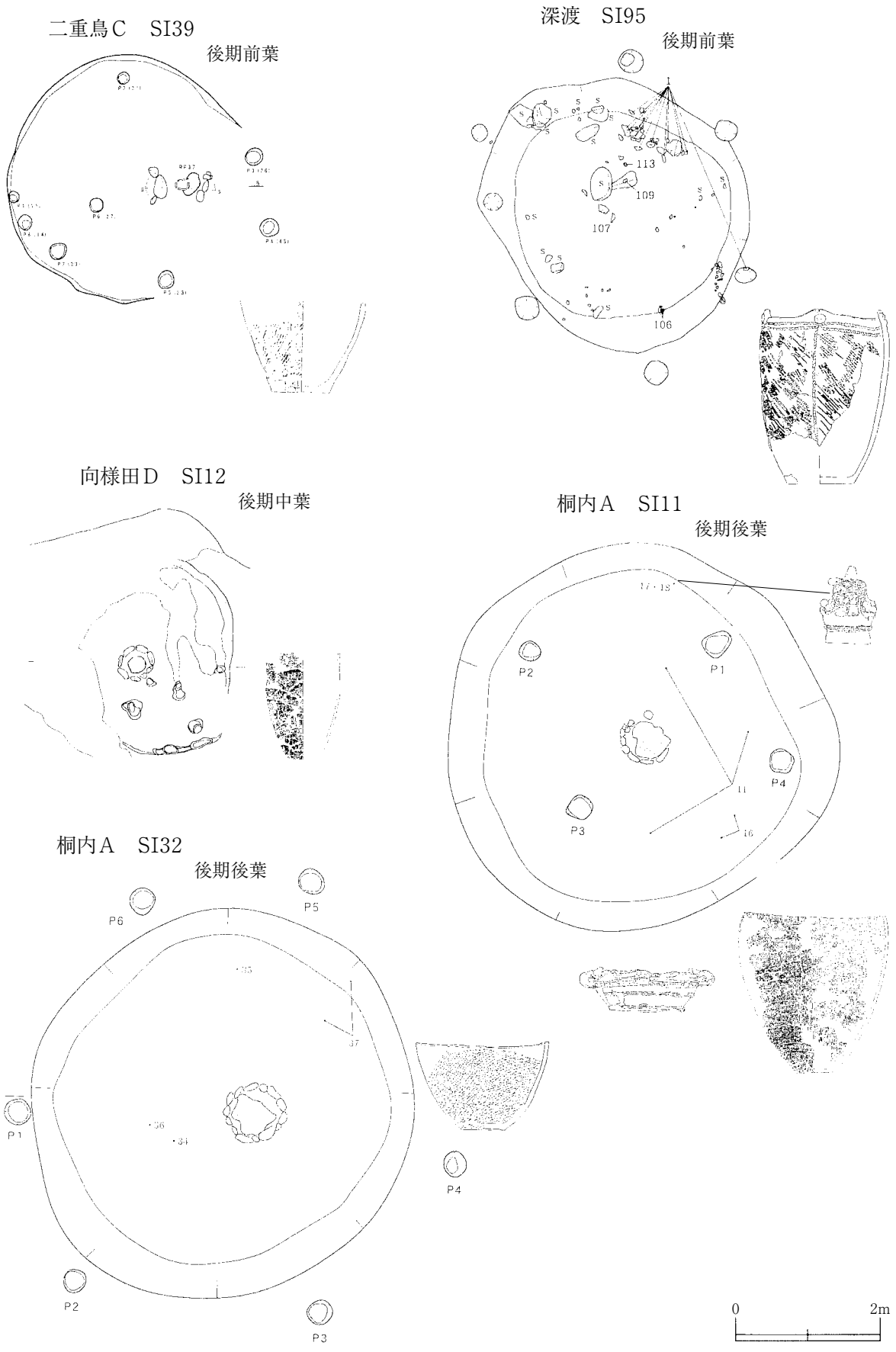
第3図　検出された竪穴住居跡



第４図　検出された竪穴住居跡

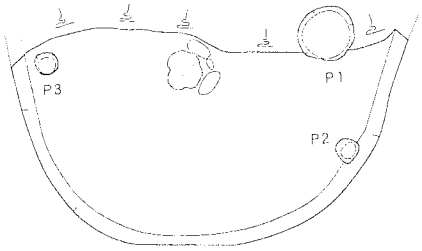


第5図　検出された竪穴住居跡

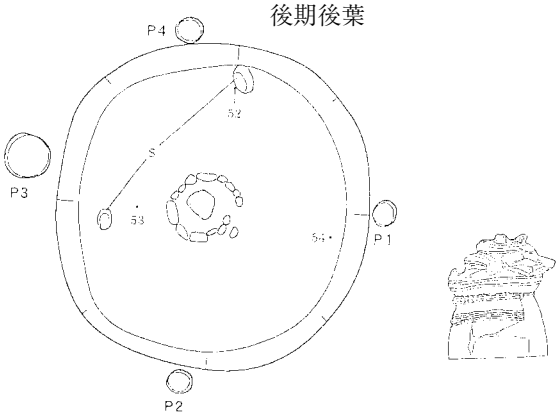


第６図　検出された竪穴住居跡

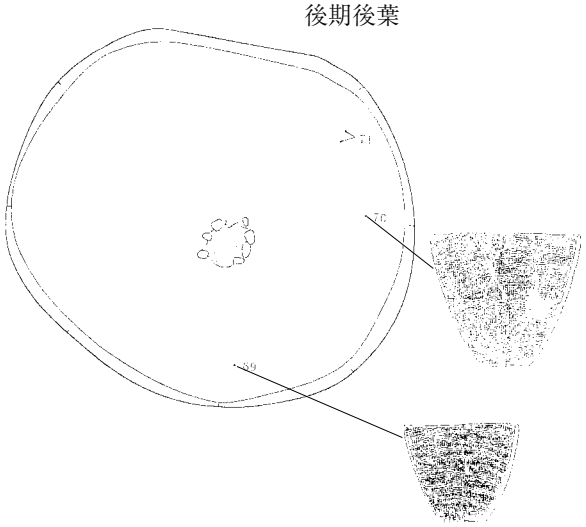
桐内A　SI82
後期後葉



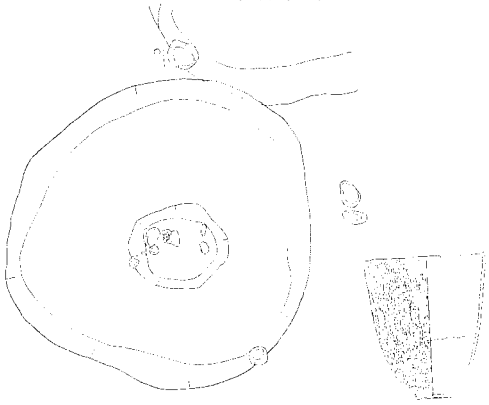
桐内A　SI37
後期後葉



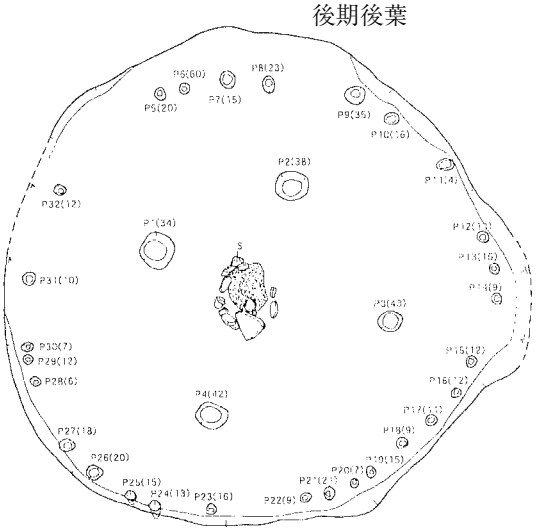
桐内A　SI123
後期後葉



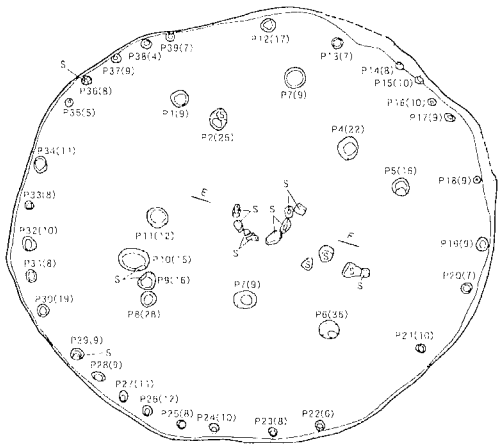
姫ヶ岱D　SI41
後期後葉

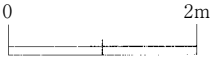


二重鳥D　SI02
後期後葉

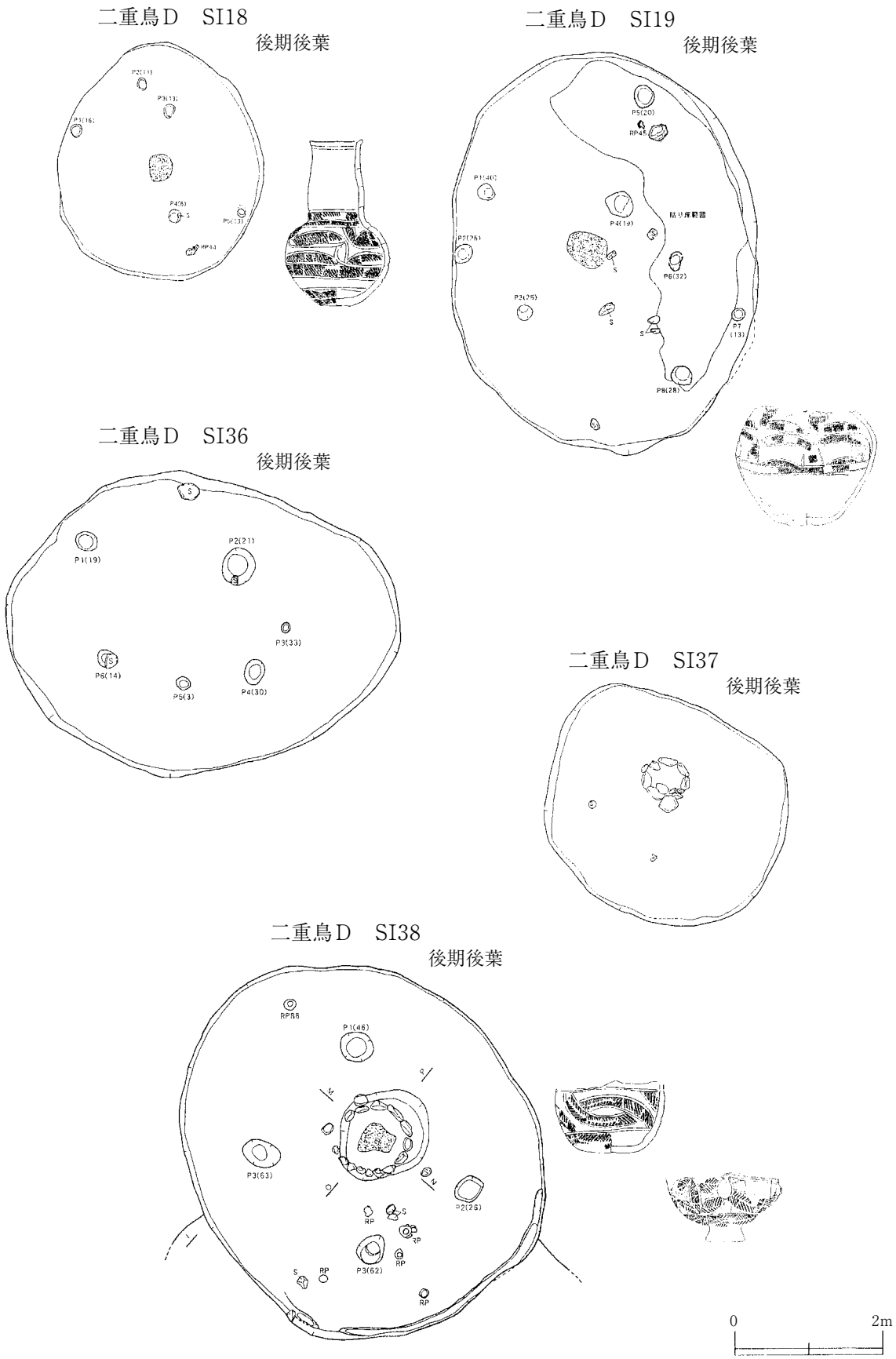


二重鳥D　SI03
後期後葉

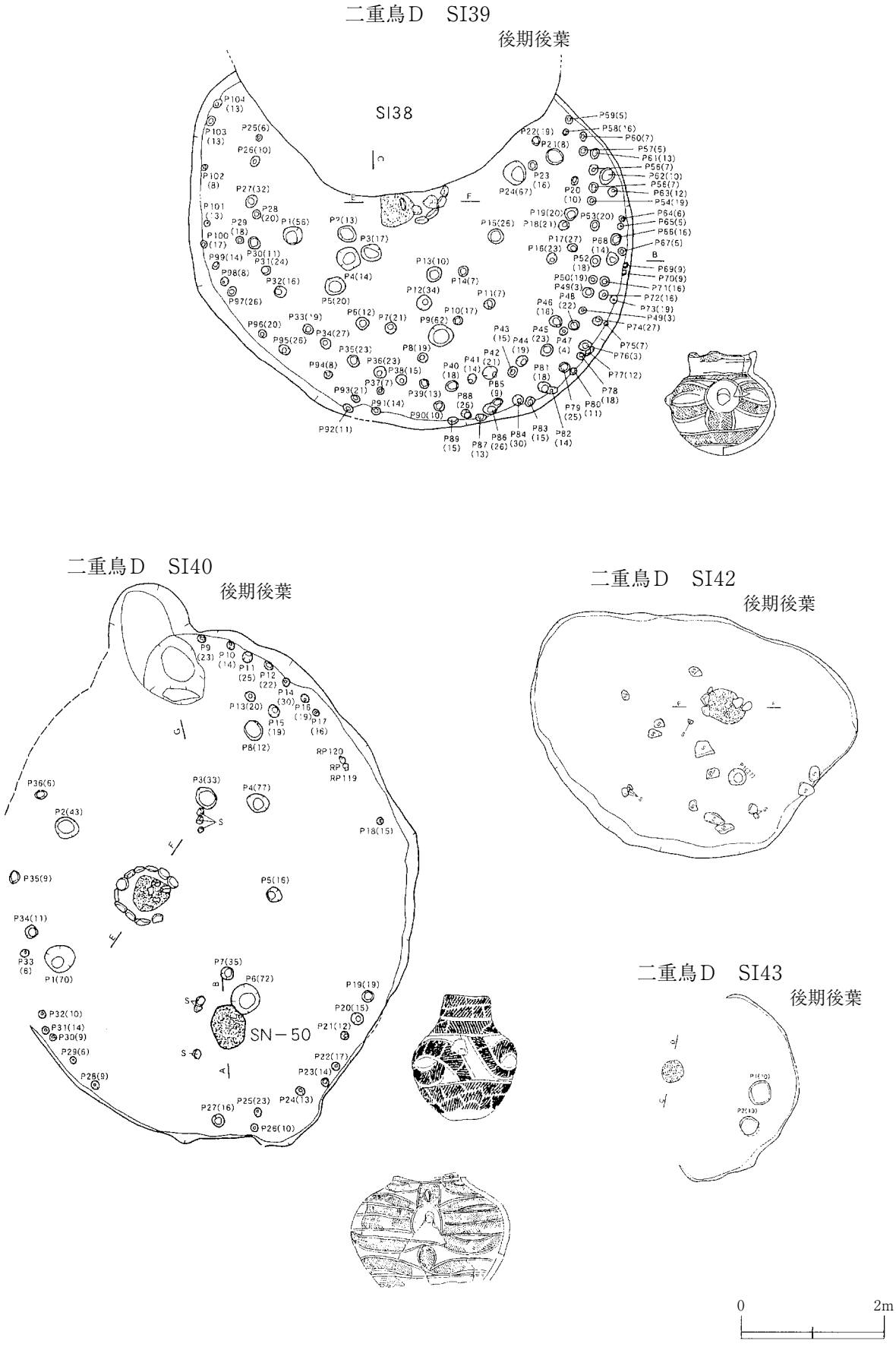




第7図　検出された竪穴住居跡

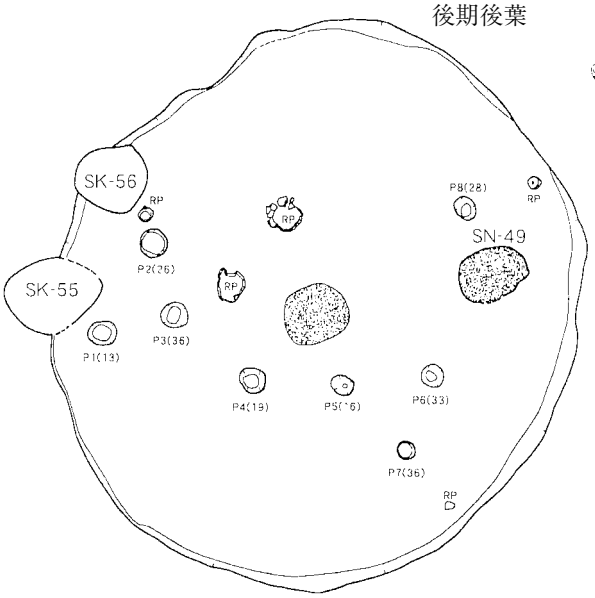


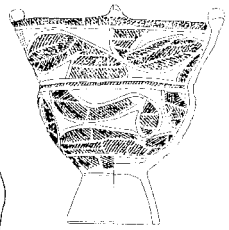
第８図　検出された竪穴住居跡

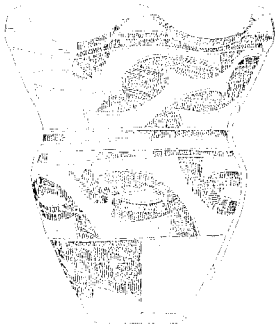


第9図　検出された竪穴住居跡

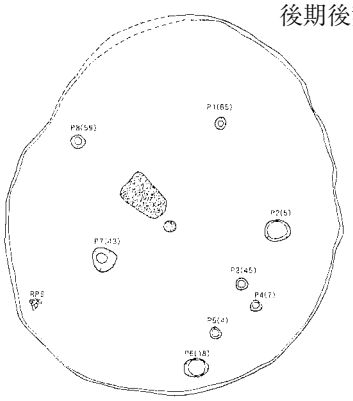
二重鳥D　SI44
後期後葉

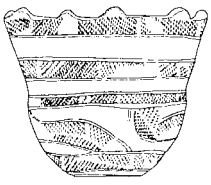




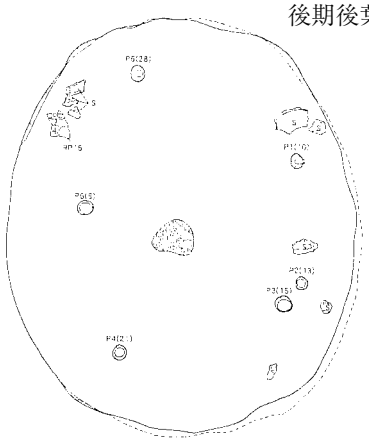


二重鳥E　SI02
後期後葉

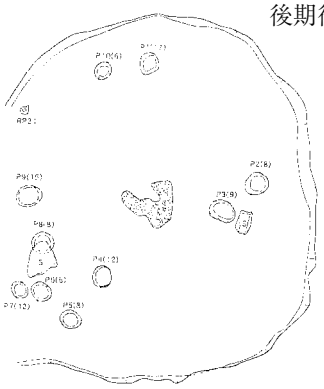


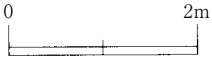


二重鳥E　SI03
後期後葉



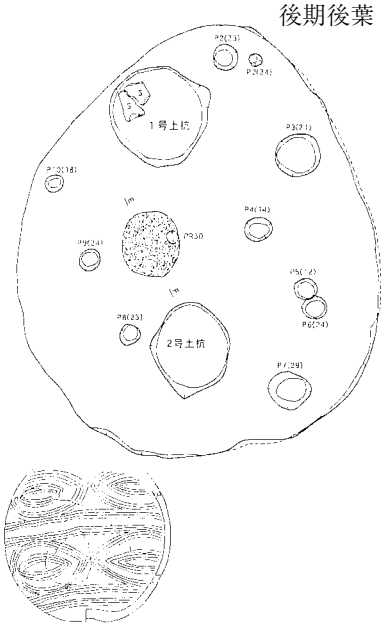
二重鳥E　SI10
後期後葉



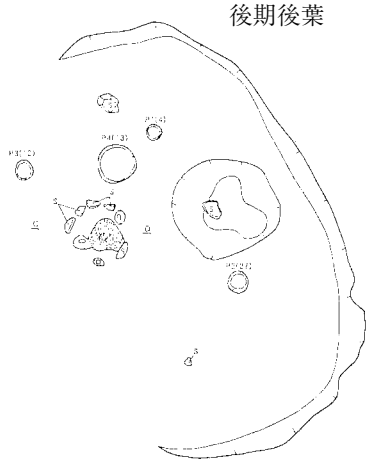


第10図　検出された竪穴住居跡

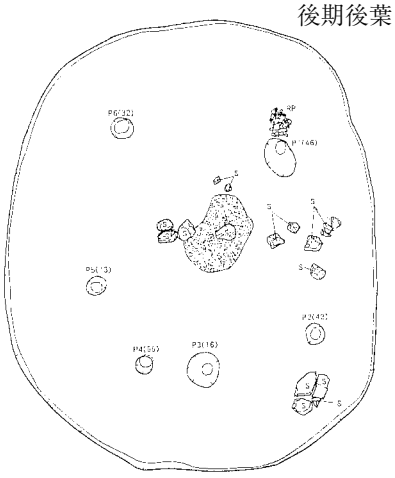
二重鳥Ｅ　SI12
後期後葉



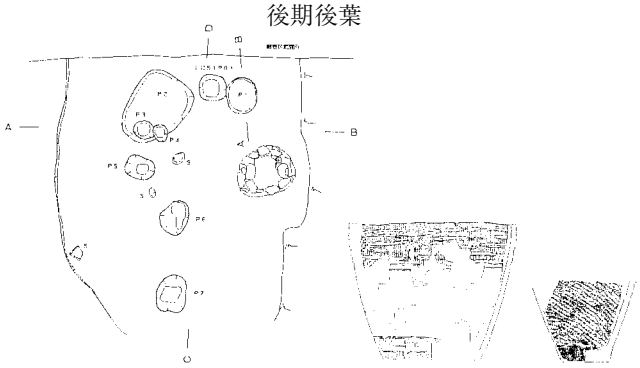
二重鳥Ｅ　SI75
後期後葉



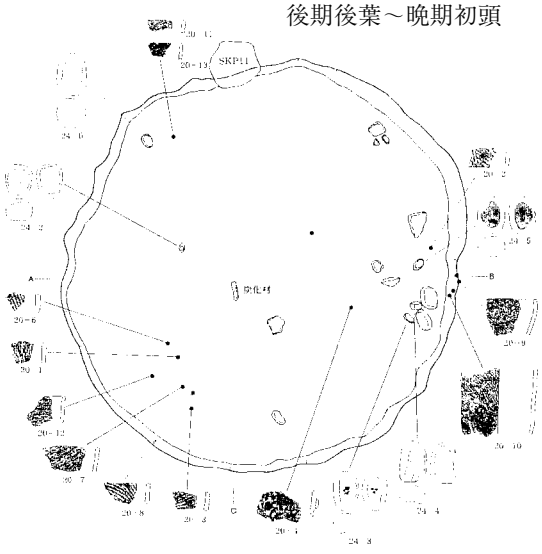
二重鳥Ｅ　SI95
後期後葉

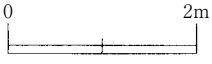


砕渕　SI94
後期後葉



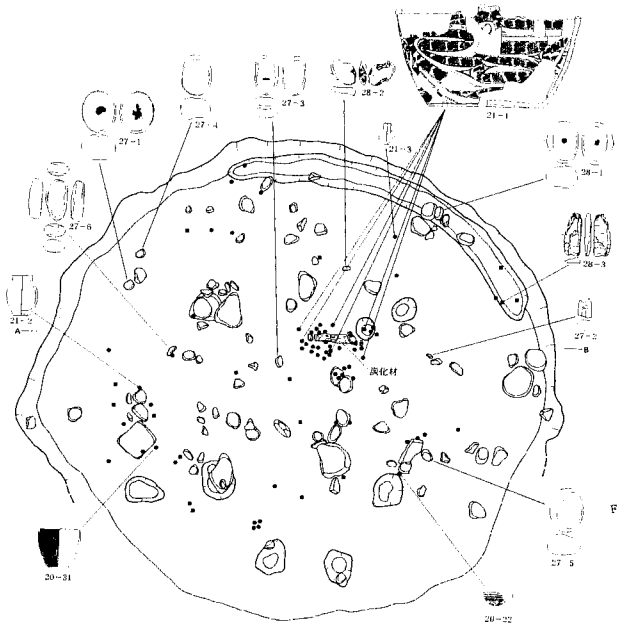
向様田Ｆ　SI01
後期後葉～晩期初頭



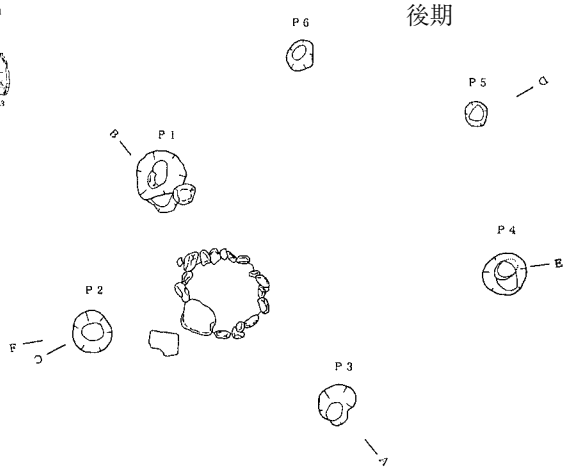


第11図　検出された竪穴住居跡

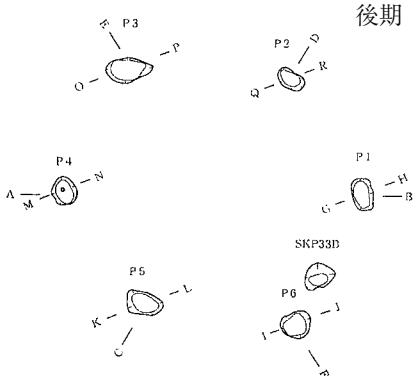
向様田Ｆ　SI02
後期後葉～晩期初頭



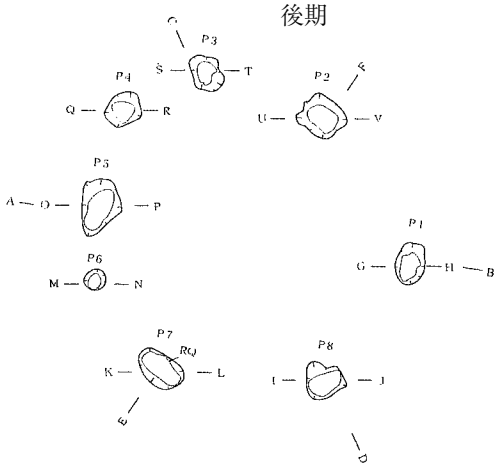
桐内Ｃ　SI36
後期



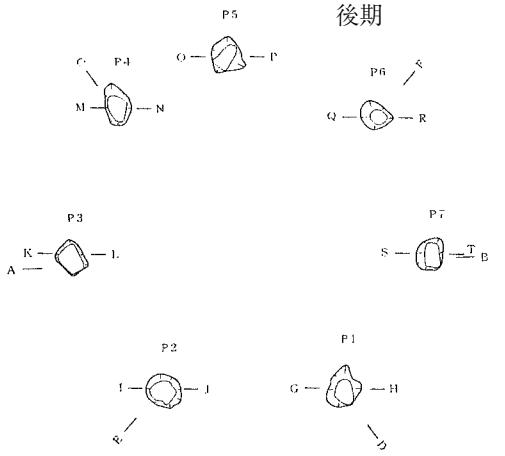
桐内Ｃ　SI14B
後期



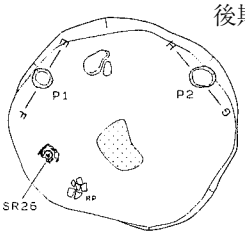
桐内Ｃ　SI15B
後期



桐内Ｃ　SI16B
後期

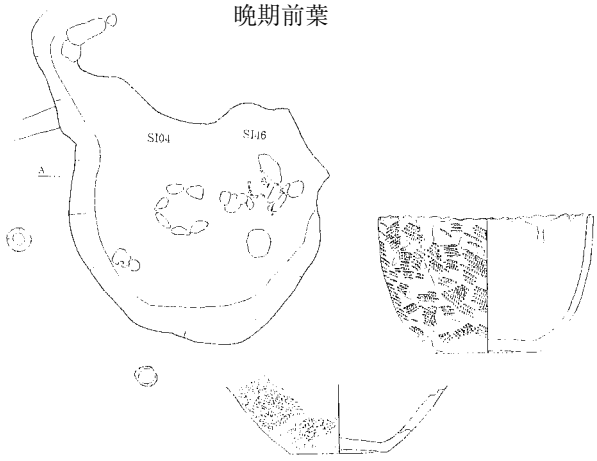


向様田Ｅ　SI20
後期

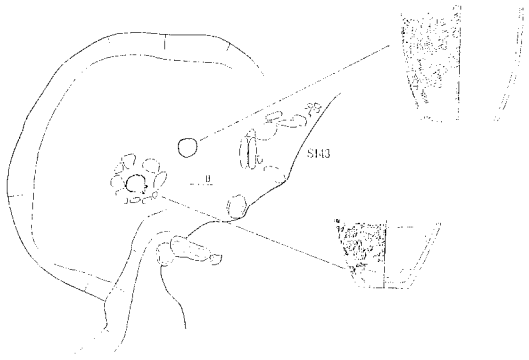


第12図　検出された竪穴住居跡

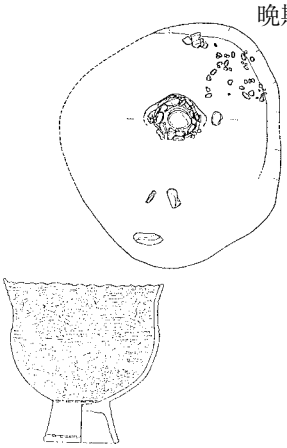
姫ヶ岱D　SI04
晩期前葉



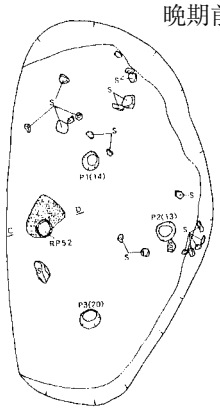
姫ヶ岱D　SI05
晩期前葉



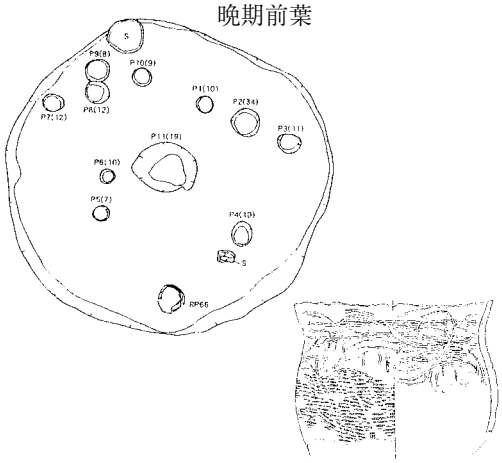
日廻岱B　SI2333
晩期前葉



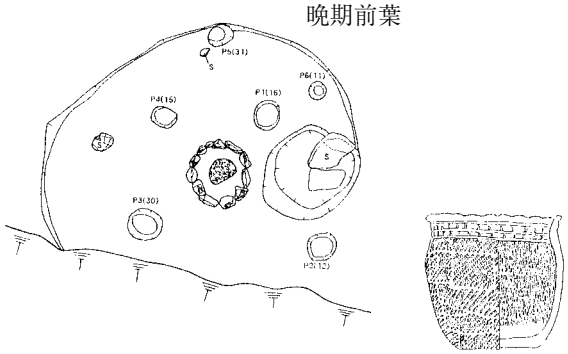
二重鳥E　SI26
晩期前葉

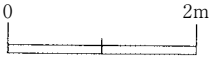


二重鳥E　SI34
晩期前葉

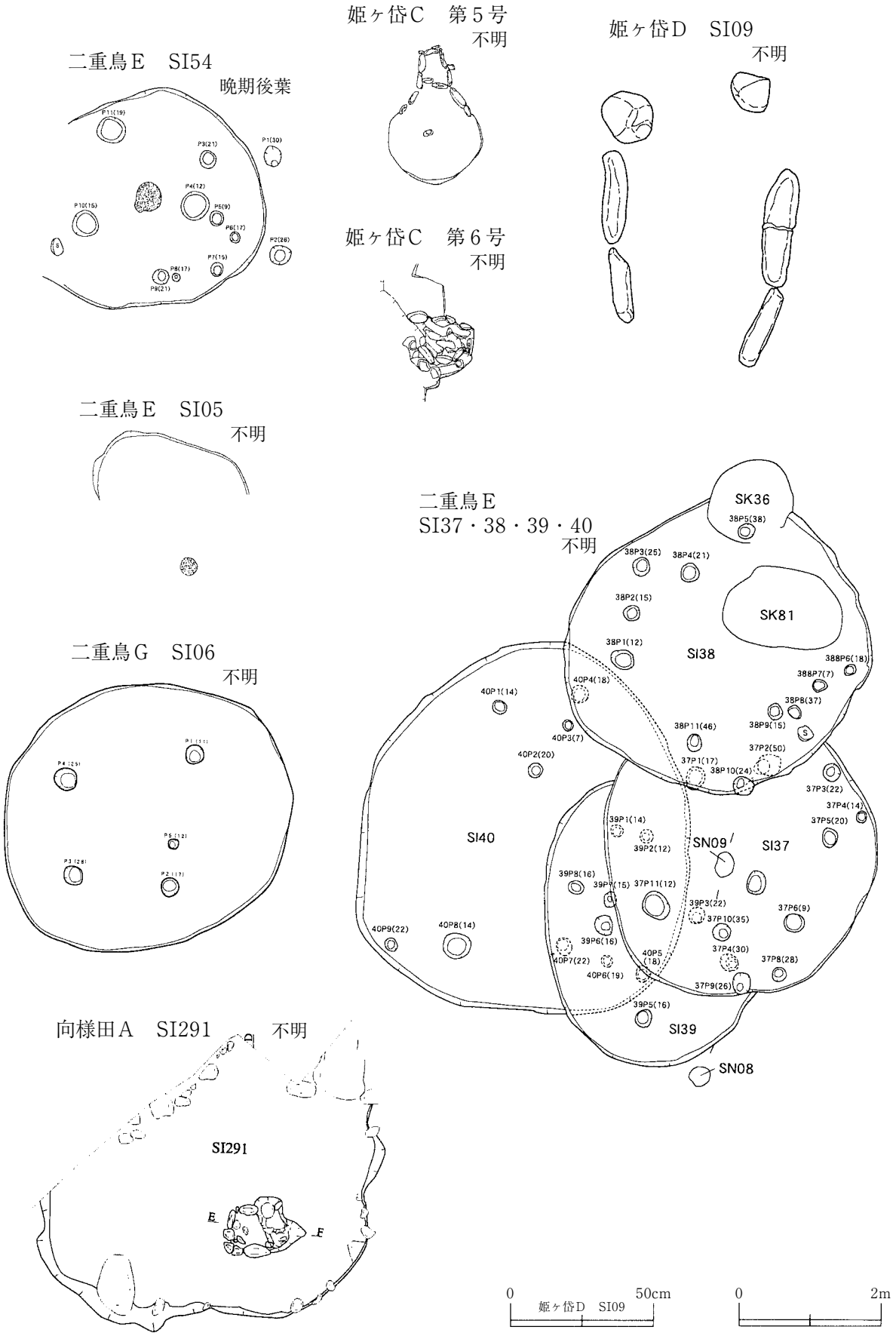


二重鳥E　SI35
晩期前葉

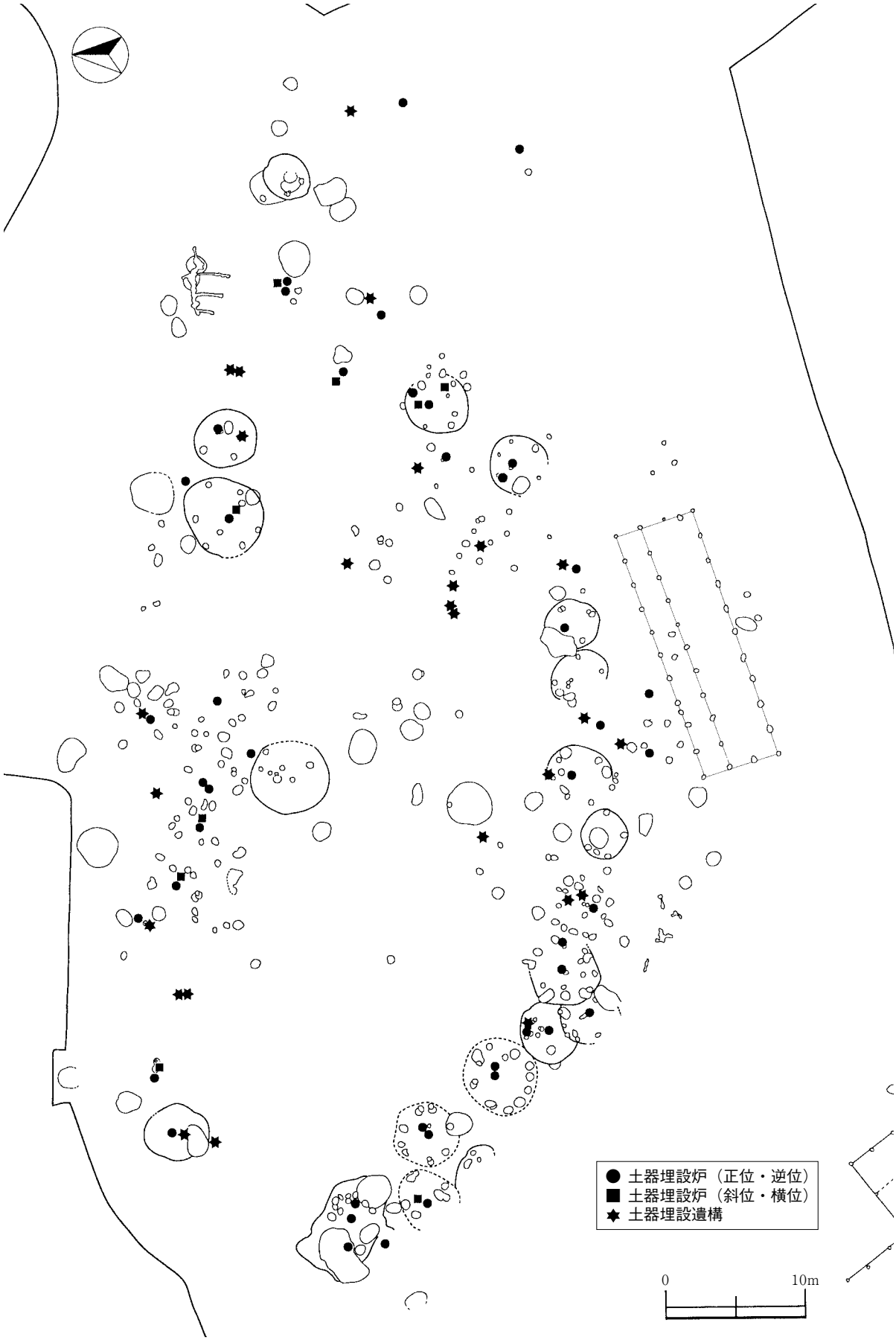




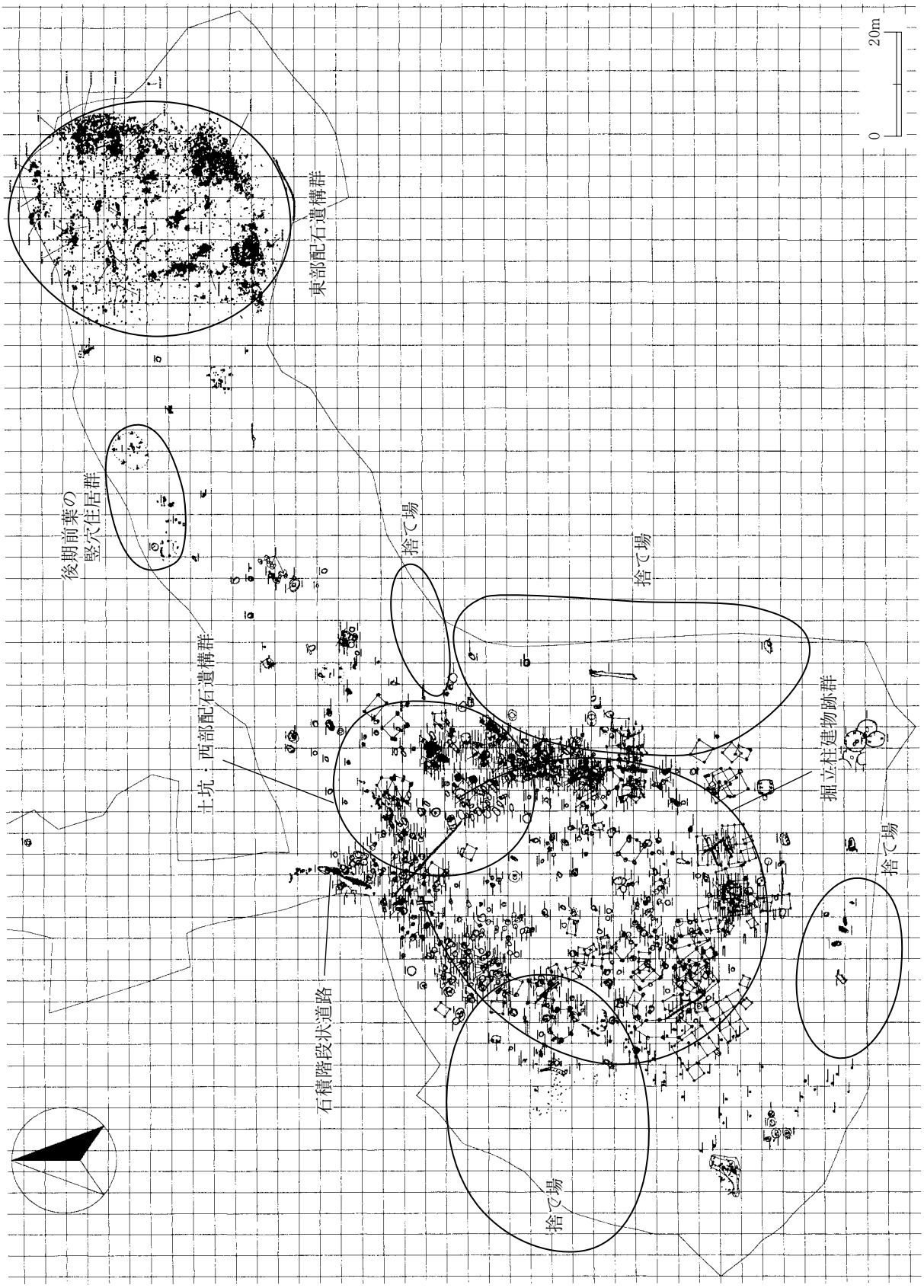
第13図　検出された竪穴住居跡



第14図　検出された竪穴住居跡



第15図　日廻岱B遺跡・遺構配置図



第16図　漆下遺跡遺構配置図

３　考察

一般的に、縄文時代中期後葉になると集落の規模が大きくなり、いわゆる環状集落も出現する。秋田県内においても、山本町の古館堤頭Ⅱ遺跡、河辺町の松木台Ⅲ遺跡などで環状集落が検出されているが、(註10)県北地域の米代川流域ではまだ確認されていない。小又川流域における中期の様相は、１～数軒の竪穴住居で営む小集落が点在していた。そして中期後葉になると、竪穴住居跡が検出された遺跡も検出された竪穴住居跡も増えるが、大規模な集落が形成されていた様相はない。この時期の竪穴住居には、一般的に複式炉が構築される。小集落が点在する当地域において、二重鳥Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｇ遺跡が存在する台地は、中期前葉から後葉にかけて脈々と集落が営まれており、検出された住居跡も30数軒と比較的大きな集落であった。

後期になると、小又川流域に分布する61遺跡のうち、50を超える遺跡で遺物が出土し、81軒の竪穴住居跡が検出されている。小又川左岸では、桐内Ａ遺跡５軒、桐内Ｃ遺跡４軒、日廻岱Ｂ遺跡29軒、漆下遺跡15軒、二重鳥Ｃ遺跡２軒、二重鳥Ｄ遺跡12軒、二重鳥Ｅ遺跡６軒、深渡遺跡１軒、小又川右岸では、姫ヶ岱Ｄ遺跡２軒、向様田Ｄ遺跡１軒、向様田Ｅ遺跡１軒、向様田Ｆ遺跡２軒、砕渕遺跡１軒の竪穴住居跡が検出されている。この分布状況を見ると、小又川左岸の８遺跡で74軒、右岸の５遺跡で７軒の住居跡が検出されており、左岸には比較的大きな集落が、右岸には小集落が存在していたことが分かる。ちなみに、前期では小又川左岸の４遺跡で13軒、右岸の１遺跡で１軒、中期では左岸の12遺跡で47軒、右岸の６遺跡で12軒の住居跡が検出されており、前期から中期にかけても小又川左岸に集落が多く形成されている。小又川流域沿いの前期から中期までの遺跡では、前期後葉の森吉家ノ前Ａ遺跡ＳＩ120の大型住居跡、中期後葉の深渡遺跡ＳＩ2001や深渡Ａ遺跡ＳＩ29の住居壁際に礫を配する廃絶儀礼を行った住居跡など特徴的な遺構は検出されているが、集落としての特徴的な遺跡は出現していない。しかし、後期になると、前葉に営まれた日廻岱Ｂ遺跡、後期全般にわたり営まれた漆下遺跡、後葉に営まれた二重鳥Ｄ遺跡など注目に値する遺跡が出現する。

前葉の竪穴住居跡がまとまって検出された日廻岱Ｂ遺跡は、小又川左岸の今から２～３万年前に発達した段丘上に立地しており(註11)、遺跡の標高は125～131ｍである。小又川上流約１㎞には漆下遺跡と二重鳥遺跡群が位置している。日廻岱Ｂ遺跡の住居跡は遺跡北側にまとまっている。検出された住居跡は29軒であるが、土器埋設炉も20基以上検出されている。遺跡全体が昭和40～50年代のほ場整備の際に大きく削平されており、住居のプランは確認されなかったが、これらの土器埋設炉は本来竪穴住居に伴う炉と考えられる。竪穴住居跡と確認された遺構と合わせると、実に50軒もの住居が存在していたことになる。住居の配置を見ると、北側と南側に弧状に並ぶ。中央部は広場を呈し、一種の環状集落の形態を呈する。もちろん、すべての住居が同時期に存在していたわけではなく、確認された重複関係によると少なくても４回の切り合いが認められている。一般的に環状集落か否かを論ずる際には、検出した住居跡が同時期にどのような配置で何軒程存在していたのかということが問題になろう。数軒の竪穴住居がある程度長い年月の中で建て替えをした結果、環状集落のような形態になり検出されることもあろだろうし、本来は時期差のある小単位の集落であったのが、調査結果として環状集落の形態で検出されることもあろう。本遺跡が一種の環状集落かどうかを検討する前に、個々の竪穴住居について考察する。遺跡全体が著しく削平を受けているためプランが不明な住居も数多くあるが、住居の平面形は円形または楕円形を基調とする。住居の床面積は、10～20㎡が多く、次に20～

30㎡の順になる。住居に伴う炉の形態は、立石炉２軒、土器埋設立石炉８軒、土器埋設炉約40軒（プランが確認できなかったが、竪穴住居に伴う炉と考えられる土器埋設炉を含む）、石囲炉１、石組炉１である。炉は基本的に住居中央に構築されている。立石炉をもつ住居はＳＩ2007とＳＩ2028の２軒である。ＳＩ2007は北東壁際に立石炉をもち、土器埋設炉（正位＋斜位）が住居中央に位置する。ＳＩ2028は、住居の２／３以上が削平を受けており詳細は不明であるが、立石炉が住居中央より北東壁際に位置している。ＳＩ2005・2017・2025・2134ａ・2134ｃ・ＳＩ2338・ＳＩ2344は、土器埋設立石炉をもつ住居である。ＳＩ2005は住居北壁に土器埋設立石炉をもち、住居中央には土器埋設炉が構築される。ＳＩ2001、ＳＩ2042と重複しており、住居構築順は、ＳＩ2005（土器埋設炉・土器埋設立石炉）→ＳＩ2042（土器埋設炉）→ＳＩ2001（土器埋設炉）→ＳＩ2475（土器埋設炉）である。ＳＩ2005と他の２軒の住居床面には約10㎝程のレベル差があり、ＳＩ2005床面が深く掘り込まれている。ＳＩ2017は柱穴と炉の作り替えを行っており、炉の形態は土器埋設立石炉→埋設土器炉に作り替えている。ＳＩ2025は住居ほぼ中央に土器埋設立石炉をもつ。埋設された炉体土器は、底部を打ち欠いた２個の深鉢形土器が入り子になっている。炉を作り替えた痕跡はなく、当初より土器を入り子の状態で埋設している。ＳＩ2134ａ、ＳＩ2134ｂ、ＳＩ2134ｃは重複しており、炉の形態は、すべて土器埋設立石炉である。ＳＩ2134ｃと他の２軒の住居の床面にはレベル差が生じ、ＳＩ2134ｃの床面はＳＩ2134ａ・ｂより約10㎝程深く掘り込まれている。ＳＩ2338は、立石＋土器埋設炉の他にもう１基土器埋設炉が構築されている。ＳＩ2019はＳＩ2017同様に柱穴と炉の作り替えを行っている。炉の形態は、土器埋設炉→土器埋設炉である。ＳＩ2228は柱穴を作り替えているが、炉の作り替えは行っていない。ＳＩ2374とＳＩ2460は、横位埋設土器の下面に焼土が広がり、地床炉→土器埋設炉（正位＋横位）に炉の作り替えの可能性もあるのかもしれない。炉体土器の埋設状態は、正位が約60基、逆位４基、斜位５基、横位８基であり、正位に埋設している場合が圧倒的に多い。また、底部が残存する土器が底部を打ち欠いている土器より多い。斜位または横位に埋設している土器は、正位に埋設された土器とセットになっていることが多く、これらの土器には機能差が考えられる。埋設された炉体土器はほとんどが縄文や撚糸文を施文する粗製土器であるが、ＳＩ2007・2025・2042・2134のように文様を有する土器もある。文様を施文する土器は、細い隆線を貼り付ける土器と沈線で文様を描く土器に分けられる。ＳＩ2025の炉体土器は、貼付による平行隆線に「ノ」の字状の単隆線が垂下する。隆線上には刺突文が巡る。ＳＩ2007・2042・2134の炉体土器は沈線文を有する。横走する沈線で口縁部文様帯を区画し、区画内には垂下する蛇行沈線や縦位に連結する渦巻文が描かれる。これらの沈線で文様を描く土器は、岩手県湯舟沢Ａ遺跡出土の土器と類似する。同様の文様を描く土器は、桐内Ａ遺跡と砕渕遺跡等でも出土しているが同時期の住居跡は検出されていない。どちらの土器も型式的には十腰内１式土器以前の後期初頭に位置づけられる土器に該当する。住居内の炉の形態は、立石炉、土器埋設立石炉、土器埋設炉、石囲炉、石組炉があるが、土器埋設炉が非常に多い。炉の作り替えや住居の重複関係から、地床炉→土器埋設立石炉→土器埋設炉の形態の変化が考えられるが断定はできない。いずれにしても土器埋設炉が本遺跡においては一般的な炉の形態になる。さて、本集落が環状集落であるか否かであるが、前述したように短期間に営まれた集落であることから、ある程度の長い期間に作られた竪穴住居跡が偶然に環状集落のように並んで検出されたとは考えにくい。少なくとも広場を意識した集落形態を呈していたと思われる。住居の作り替えや重複が多いのは、何らかの

理由により居住場所が限定されていたか、住居が密集しており建て替える場所が限られていた可能性もあろう。このように考えると、同時期に遺構配置図のような環状集落の形態を呈していたというより、若干の時期差がある東西２単位の形態、または南北弧状の形態等の可能性が高いのかもしれない。今後同様の集落形態を呈する遺跡の発見に期待したい。

漆下遺跡は、日廻岱Ｂ遺跡同様に今から２～３万年前に発達した段丘上に立地する[(註12)]。遺跡の標高は135～140ｍであり、中央部より東側に緩やかに傾斜する。遺跡東側には、後期前葉に構築された配石遺構群がある。小礫を半円状に並べて区画し、区画内には礫を「Ｘ」字状に配し、さらにその中心から小礫を平行あるいはこれと直行させるように配した左右対称を呈する規模の大きい配石遺構や、「日」の字状に配したもの、弧状に配したもの、列状に配したもの等様々な形態をした30数基の配石遺構が構築されている。遺跡中央部には、後期全般にわたり構築された、墓と考えられる土坑やフラスコ状土坑が密集する。中央部東側には、後期中葉に構築された配石遺構群があり、その中にはいわゆる日時計状の形態を呈するものもある。これらの配石遺構は基本的に下部に掘り込みをもち、土坑墓と考えられる。この配石遺構群を中心として楕円形の土坑墓が放射状に作られている。この配石遺構群の北側斜面には、石積階段状道路が小又川に向かって延びる。この道路は、比高差5.8ｍ、全長16ｍにわたり扁平な川原石を丁寧に並べている。遺跡全体には約3,000基におよぶ柱穴様ピットがあり、亀甲形や４本柱の掘立柱建物跡が約100棟遺跡を囲むようにして検出された。また、４カ所の捨て場をはじめ、遺跡全体から整理用中コンテナ3,000箱に及ぶ遺物が出土した。前葉の竪穴住居跡は、遺跡東側の配石遺構群と中央部をつなぐ細長い尾根上で５軒検出された。いずれの住居も地山まで掘り込んでおらず、床面は地山直上の黒土と考えられる。同時期の二重鳥Ｃ遺跡のＳＩ124の壁高は45㎝であり、壁高に大きな差が見られる。炉の形態は、幅８～23㎝、長さ23～64㎝の細長い川原石を突き立てた、立石＋土器埋設炉である。文様を有する炉体土器は、日廻岱Ｂ遺跡出土の沈線で文様を描く土器に類似する。これらの住居に関する性格等については現在整理中であり、詳細は報告書で論ずることとするが、東側の配石遺構群との関連を考える必要があるだろう。

二重鳥Ｃ遺跡のＳＩ39の炉の形態は石組＋土器埋設炉で、住居中央やや壁寄りに構築されている。石組は、細長い礫を横位の状態で突き立て、それに添うように礫が４個配される。焼土面はこの石組と土器埋設炉の間に広がる。また、この石組と反対側にも同様の石組を配するが、埋設土器と石組の間に焼土面は検出されてない。日廻岱Ｂ遺跡や漆下遺跡の立石は細長い礫を縦位の状態で突き立てており、立石に付設する礫もない。本住居の炉は、立石＋土器埋設炉のバリエーションの一つというよりは特殊な石組＋土器埋設炉と考えた方が良さそうである。

中葉では、検出された住居跡も少なく、炉の形態等で特徴的なことは見いだせない。この時期の遺構･遺物は漆下遺跡で大量に発見されており、また対岸の向様田Ｃ遺跡でも十腰内２式土器がまとまって出土している。

後葉の竪穴住居跡は、27軒（向様田Ｆ遺跡の後葉から晩期初頭２軒を含む）と中葉に比べて増える。桐内Ａ遺跡のＳＩ11の壁際からは、多孔底土器に入れられた香炉形土器が出土している。この住居は、石囲炉の礫の一部が抜き取られており、共に廃絶儀礼と考えられる。また、ＳＩ37では香炉形土器が、その他の住居跡からも完形の土器が出土しており、廃絶時に土器を入れて埋め戻す習慣が伺える。出土したこれらの土器は十腰内５式土器と考えられ、炉から採取した炭化物の放射性炭素年代測定は５

軒とも3100ＢＰ前後を示す。本遺跡の住居は、土器を入れて埋め戻す廃絶儀礼、出土土器、炭化物の放射性年代測定等から、５軒ともほぼ同時期に存在していたと考えられ、短期間に営まれた集落であることが分かる。二重鳥Ｄ遺跡と二重鳥Ｅ遺跡は、漆下遺跡の南側に位置し、標高156 ～ 162ｍの台地上に立地する。二重鳥Ｄ遺跡で検出された後葉の住居跡は12軒である。４基または５基の主柱穴をもつ住居が多く、壁柱穴が巡る住居もある。床面積には10 ～ 32㎡とばらつきがあるが、地山土を深く掘り下げて床面を形成している住居が多い。中でもＳＩ12の壁高は70㎝を測り、住居東側では貼り床を確認している。明らかな貼り床が確認されたのは本住居のみである。住居の平面形は円形または楕円形を基調としているが、ＳＩ40は東側が張り出し緩やかに傾斜する。張り出し底面に掘り込みを伴うことから、入り口とは考えにくく、祭祀に関する空間の可能性もあろう。炉の形態は、地床炉４軒、石囲炉が７軒である。炉はほとんどが住居中央に位置する。ＳＩ38は壁柱穴が二重に巡り、住居の増築が行われている。その際に、炉も地床炉から石囲炉に作り替えられている。ＳＩ03の石囲炉の礫の一部は抜き取られており、焼土も掻き出されている。また、ＳＩ37の石囲炉の焼土も掻き出されており、ＳＩ75の石囲炉の礫の一部は抜き取られている。これらは住居の廃絶儀礼と考えられる。住居跡からは比較的良好な遺物の出土が多く、廃絶時に置かれたものだろう。ＳＩ38とＳＩ39は重複しており、出土遺物からＳＩ38は十腰内５式期、ＳＩ39は十腰内４式期の所産と考えられる。その他の住居から出土した土器からも、本遺跡の住居は十腰内４式期から十腰内５式期に構築された住居であり、後葉でもある程度の時期差が見られる。隣接する二重鳥Ｅ遺跡では後葉の住居跡が６軒検出された。住居の床面積は14 ～ 19㎡とほぼ同規模であり、平面形は円形または楕円形を呈する。二重鳥Ｄ遺跡の住居同様に床面までの掘り込みは深く、４基または５基の主柱穴をもつが、壁柱穴が巡る住居はない。炉は住居ほぼ中央に位置し、ＳＩ75以外は地床炉である。ＳＩ75は石囲炉であり、礫が一部抜き取られている。二重鳥Ｃ・Ｅ遺跡の石囲炉をもつ住居と地床炉をもつ住居の時期差は判然としない。砕渕遺跡で検出されたＳＩ94の炉は、炉の底面に礫を敷き詰めて同一個体の土器片で囲んでいる。土器片囲炉は漆下遺跡で１基検出されているが、時期は中期中葉であり、炉の底面には礫は敷き詰められない。また、底面に礫を敷き詰める炉は、向様田Ａ遺跡のＳＩ200の複式炉に見られるのみである。この炉は、石組部の底面に扁平な礫を敷き詰めている。砕渕遺跡で検出した住居の炉の形態は、極めて特異な形態であり、本流域における他の遺跡での検出例はない。

晩期の竪穴住居の特徴としては、検出された住居跡が、姫ヶ岱Ｄ遺跡２（前葉）、日廻岱Ｂ遺跡１（前葉）、向様田Ｆ遺跡２（後期後葉～晩期初頭）、二重鳥Ｅ遺跡４（前葉３・後葉１）、深渡遺跡１（中葉）で、向様田Ｆ遺跡の２軒を含めてもわずかに10軒と極めて少ないことにある。また、住居の床面積が７～14㎡と小さく、小型化する傾向が見られる。後期同様にほとんどの遺跡でこの時期の遺物が出土しており、遺跡の分布は広範囲にわたる。特に小又川右岸に位置する向様田Ａ遺跡では晩期前半に構築された２基の環状配石遺構・30数基の配石遺構・150基以上の土坑墓と２箇所の盛土状の捨て場から大量の遺物が出土している。また、隣接する向様田Ｄ遺跡でも大量の遺物が出土しており、向様田Ｃ遺跡では径3.3ｍの円形を呈する配石遺構が検出されている。その他にも日廻岱Ａ遺跡、向様田Ｅ遺跡等でも晩期の遺構が検出されている。このように、遺物の出土だけでなく遺構も相当数検出されているにもかかわらず竪穴住居の数が少ない。

二重鳥Ｅ遺跡では、前葉の住居跡が３軒、後葉の住居跡が１軒検出されている。本遺跡では後期後

葉の竪穴住居跡も６軒検出されており、後期後葉から晩期前葉に継続して営まれた集落といってよいだろう。しかし、隣接する二重鳥Ｄ遺跡では、後期後葉の住居跡が12軒検出されているが晩期の住居跡は見つかっていない。同様に、桐内Ａ遺跡でも後期後葉の住居跡が５軒検出されているが、晩期の住居跡は検出されていない。また、住居跡を検出した遺跡でも、検出された住居跡は１・２軒と少ない。その理由の一つとしては、晩期になると後期より集落が分散化していくということが考えられる。住居も小さくなり、それに伴い１軒の住居で生活する人の数も少なくなるのだろう。集落を営むための広い空間はいらなくなり、沢のちょっとした平場ででも生活できたのだろう。前述したように、二重鳥Ｅ遺跡では、後期後葉６軒→晩期前葉３軒→晩期後葉１軒と検出された住居跡の推移に分散していく様相が見られる。しかしながら晩期になると集落がより分散化する理由は、食料の確保に関連してなのか、その他の理由によるものなのかは判然としない。次に考えられるのは、住居の構造上の変化が考えられる。具体的には、地山を掘り窪めた面を床面とするのではなく、地山面または直上の黒土が床面となり、同様に柱の掘り込みも床面までと浅くなる。そのため発掘調査において住居として確認できないのではないかということである。しかし軒数は少ないといえ地山面まで掘り窪めた住居跡も検出されており、検討を要する。もう一つは、掘立柱建物跡のように平地式の住居に変化することも考えられよう。しかし、本流域では、縄文時代を通して明らかに掘立柱建物跡が住まいとして機能したものは今のところ確認されていない。その最大の理由は、炉が検出されないことにある。漆下遺跡で検出された100棟以上の掘立柱建物跡の性格等が解明されれば、掘立柱建物跡の機能についての一つの指針にもなり得よう。このことに関しても現在整理中であり、検討中であるため詳細はさけたい。晩期最大の遺跡である向様田Ａ遺跡では、30数基の配石遺構を検出している。その中には、竪穴住居の炉とも考えられるが床面と柱穴が確認できなかったため土器埋設石囲炉状配石遺構や祭祀に関連する焚き火を行った配石遺構としているものが半数近くもある。もしも、これらの遺構が住居に伴う炉であるならば、土器埋設石囲状配石遺構は石囲土器埋設炉、配石遺構は石囲炉ということになる。もちらん本遺跡は大規模な祭祀関連の遺跡であるため、祭祀に関連する配石遺構である可能性も高く、簡単に住居に伴う炉であるとはいえない。しかし、同様の配石遺構でも、焼土が検出されず礫に被熱痕も見られないタイプの遺構もあり機能差が見られる。向様田Ａ遺跡の配石遺構はすべてとはいえないまでも、竪穴住居に伴う炉である可能性もあろうか。また、他の遺跡でも、床面や柱穴が検出できなかったため、屋外炉や祭祀に関連する配石遺構、焼土遺構としている遺構が数多く見られる。向様田Ｅ遺跡でも、晩期前葉の土器埋設遺構と中葉の土坑を検出し、細長い尾根状では焼土遺構も検出した。しかし、柱穴が検出されなかったことにより時代不明の焼土遺構として報告書では取り扱った。もしかしたら晩期の住居に伴う地床炉の可能性もあろうか。いかに分散化が進んだとはいえ、本流域に広がる晩期の遺跡を考えると、検出遺構と出土遺物に比べ、検出された竪穴住居の数が少なすぎる。本流域の調査はダム建設事業に伴うもので、面的に広がりを押さえて調査してきた。調査対象外であっても、遺構の分布が広がれば拡張して調査している。それにもかかわらず住居跡の検出が少ないのは、やはり住居の構造上の変化を考える必要もあろう。

４　終わりに

前稿から本稿において、縄文時代の竪穴住居跡について論じてきた。本稿では後期から晩期ついて

述べた。まとめとして、集落の移り変わりについて若干考察する。前期から中期にかけては、特別拠点になるようなところもなくそれぞれの集落で暮らしていたのだろう。中期後葉になると小又川左岸の標高が約160ｍの一段高い二重鳥地区に比較的大きな集落を営み、後期前葉になると、標高約130ｍの日廻岱Ｂ遺跡が集落の拠点となった。同時に漆下遺跡の東側には配石遺構を伴う大規模な墓域を形成した。これらの配石遺構は、日廻岱Ｂ遺跡や点在する周りの集落から集まってきた人が共同で作ったのだろう。日廻岱Ｂ遺跡の集落は長期間は続かず、後期中葉になると集落が営まれなくなる。他の遺跡でも中葉の住居跡の検出が極めて少なくなる。住居の拠点となるような集落なくなるが、漆下遺跡には配石遺構や土坑が構築され墓域が形成され続ける。後葉になると再び二重鳥Ｄ・Ｅ遺跡に集落が形成される。漆下遺跡は後葉においても引き続き墓域として利用される。晩期においては、住居跡の検出が少ないのは、構造上の変化も考えられると述べたが、中葉における住居の形態は前後の時期の住居を見ても構造上の変化は考えにくく、検出された竪穴住居跡が少ないのはどのような理由によるものなのか説明がつかない。

晩期になると向様田Ａ遺跡を中心とする、右岸の向様田地区が中心になる。晩期前葉から中葉にかけて向様田Ａ遺跡に大規模な共同の墓域を形成する。しかし拠点となるような集落は見あたらず、各地に点在する小集落から人々が集まってきたのだろう。後葉になるとこの墓域も忘れ去られてしまい、この後大規模な遺跡は形成されない。

このような集落の移り変わりはどのようなことに起因するのだろうか。一つは採集等による食料確保の問題が考えられる。人口の増加や気温の変化により食糧確保が困難になり分散化せざる得ないことも考えられよう。もう一つは小又川の氾濫に起因することも考えられる。縄文時代後期の小又川の水位がどの程度なのかはっきりしていないが、住居跡が比較的まとまって検出された遺跡を見てみると、二重鳥遺跡群・森吉家ノ前Ａ遺跡の高位段丘面（中期後葉）→日廻岱Ｂ遺跡・漆下遺跡の低位段丘面（後期前葉）→二重鳥遺跡群の高位段丘面・桐内Ａ遺跡の低位段丘面（後期後葉）→向様田遺跡群の低位段丘面（晩期）の移り変わりを見ることができる。後期後葉になると川の流れも落ち着いて低位段丘面も安定したのだろう。ちなみに晩期後葉以降の集落に関しては検出された住居跡も少なく、出土した遺物も前葉や中葉に比べて少ない。弥生時代の遺物は若干出土しているものの竪穴住居跡の検出に関しては皆無である。

平成７年度に森吉町教育委員会により発掘調査が始まり、平成９年度からは秋田県教育委員会と森吉町教育委員会により継続してきた発掘調査もいよいよ大詰めを迎えようとしている。今年度の調査でも地蔵岱遺跡で縄文時代前期の住居跡が検出され、新たな成果が得られた。今後の調査により、さらに本流域の解明が進むことを期待したい。

註１　河田弘幸　「小又川流域における縄文時代の竪穴住居跡について（１）」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第18号　2004（平成16）年
註２　文献に関しては前稿と同一であり、それ以外の文献のみ記す。文献番号については前稿の続き番号とする。
註３　検出された竪穴住居跡数、炉の形態等については、今年度の整理段階において変更になった遺跡もあるため、前稿の第２表とは若干相違が見られるが、本稿で訂正したこととする。
註４　日廻岱遺跡の報告書では、立石＋地床炉を立石炉、立石＋土器埋設炉を土器埋設立石炉と呼称している。
註５　文献10
註６　文献４
註７　文献15
註８　註３と同じ
註９　文献24
註10　文献25・26
註11　「小又川流域における縄文時代の竪穴住居跡について（１）」の註２
註12　註11と同じ

文献

24　秋田県教育委員会　『日廻岱Ｂ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書ⅩⅤ－』　秋田県文化財調査報告書　第394集　2005（平成17）年
25　秋田県教育委員会　『向様田Ｄ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書ⅩⅢ－』　秋田県文化財調査報告書　第393集　2005（平成17）年
26　秋田県教育委員会　『松木台Ⅲ遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅸ－』　秋田県文化財調査報告書　第326集　2001（平成13）年
27　秋田県教育委員会　『古館堤頭Ⅱ遺跡一般県道森岳鹿渡線地方道踏切除却工事に係る埋蔵文化財調査報告書－』　第338集　2002（平成14）年

秋田県埋蔵文化財センター研究紀要　目次（１）《第１号～第10号》

第１号　1986年３月刊行　Ｂ５版　77頁
「秋田城跡」についての一考察－８世紀の土器と施設の創建年代－〔船木義勝〕／秋田県内出土の墨書土器集成〔高橋 学〕／秋田県内の珠洲系陶器資料〔栗沢光男･熊谷太郎･高橋忠彦〕

第２号　1987年３月刊行　Ｂ５版　88頁
鹿角盆地に於ける古代土器群の様相〔櫻田 隆〕／男鹿市大倉遺跡出土の弥生時代遺物について〔児玉 準〕

第３号　1988年３月刊行　Ｂ５版　63頁
秋田県の古代製鉄炉〔熊谷太郎〕／古代国家の辺境地支配と柵･柵戸･郡について〔横山伸司〕／
内村遺跡出土土器と住居群の変遷〔小林 克〕

第４号　1989年８月刊行　Ｂ５版　56頁
秋田県の縄文時代後期の土器〔高橋忠彦〕／竪穴住居と掘立柱建物が併列して構築される遺構について－能代市福田遺跡･十二林遺跡を端緒として－〔高橋 学〕／大曲市蛭川遺跡より採集された遺物について〔能登谷宣康〕

第５号　1990年３月刊行　Ｂ５版　92頁
諏訪台Ｃ遺跡のⅠ･Ⅱ類土器群－土器の観察を通して－〔利部 修〕／七曲台における縄文時代の居住形態について－居住形態の変遷に関する一試論－〔谷地 薫〕／遺物管理プログラムの作成〔吉田 真〕／
狐岱遺跡について－1989年の範囲確認調査から－〔大野憲司〕

第６号　1991年３月刊行　Ｂ５版　56頁
竹原窯跡における坏蓋の変化〔利部 修〕／須恵器窯の側壁･天井架構材について〔櫻田 隆〕／大館市上ノ山Ⅰ遺跡出土の鋒形石器について〔大野憲司〕／湯沢市山田地区出土の縄文土器〔高橋 学〕

第７号　1992年３月刊行　Ｂ５版　111頁
本荘市上谷地遺跡について－由理柵推定地の調査－〔冨樫泰時･児玉 準〕／竹原窯跡の須恵器編年〔利部 修〕／峰浜村手前谷地尻遺跡出土の遺物について〔小林 克･高橋 学〕／八竜町館の上遺跡出土のナイフ形石器について〔小林恵美子〕／寒川Ⅱ、小出Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ、上猪岡、八木遺跡出土の黒曜石遺物の石材産地分析〔藁科哲男〕／
ストンサークルの謎〔水野正好〕

第８号　1993年３月刊行　Ｂ５版　97頁
家ノ後遺跡の晩期初頭土器－入組帯状文と入組三叉文－〔谷地 薫〕／下藤根遺跡出土土師器の再検討－東北地方北部における位置付けを中心に－〔利部 修〕／秋田県内における土製支脚について〔柴田陽一郎〕／大型遮光器土偶と環状注口土器－鷹巣町高森岱遺跡発見の遺物から－〔高橋忠彦〕／古代出羽の史的位置〔笹山晴生〕

第９号　1994年３月刊行　Ｂ５版　88頁
家ノ後遺跡の粘土採掘坑－粘土と出土土器の分析を中心に－〔石川隆司･及川良彦･谷地 薫･柴田陽一郎〕／払田柵跡の平瓦渦巻文考〔利部 修〕／秋田県内出土の古鏡集成〔庄内昭男〕／森吉町白坂遺跡で発見した縄文人の足跡－切り取りから保存処理まで－〔高橋 学〕／米代川流域の中世社会〔遠藤 巌〕

第10号　1995年３月刊行　Ｂ５版　89頁
秋田県内出土の墨書土器、篦書･刻書土器〔高橋 学〕／岳下遺跡検出の窯跡について〔小林 克〕／
砂底須恵器の一考察〔利部 修〕／大地湾遺跡について〔武藤祐浩〕／古墳周辺文化の研究展望〔阿部義平〕

雄物川町十三塚遺跡出土の弥生土器

島田祐悦*1・根岸　洋*2

Ⅰ　はじめに

雄物川町十三塚遺跡出土の土器2個体は『秋田県の考古学』（奈良・豊島1969）や『考古学ジャーナル』No.166（橘1979）などで紹介されていることから、古くから認知されている弥生土器である。この2個体は、現在雄物川町有形文化財として雄物川町郷土資料館に展示されているが、この他にも小ケース5個分の破片資料が収蔵庫に保管されていた。

今回の報告は、次に述べる一連の経緯による。平成16年2月に横手市史編纂予備調査のため、冨樫泰時氏が十三塚遺跡出土の弥生土器を調査した際に、この土器群の重要性と破片資料の復元の必要性を島田に提示した。平成16年度に入り、島田が資料館の展示資料の見直しを行った。小ケースの資料を選別し、破片資料の復元も行い、球胴甕など2点が新資料として確認され、この土器群を常設展示へ移動した。一方、根岸は何回か来館し、復元した甕や破片資料の全てを実測した。根岸はこの甕をはじめとする十三塚遺跡出土の弥生土器の重要性を鑑み、島田と協議し今回の報告を行うこととなった。(註1)

（島田）

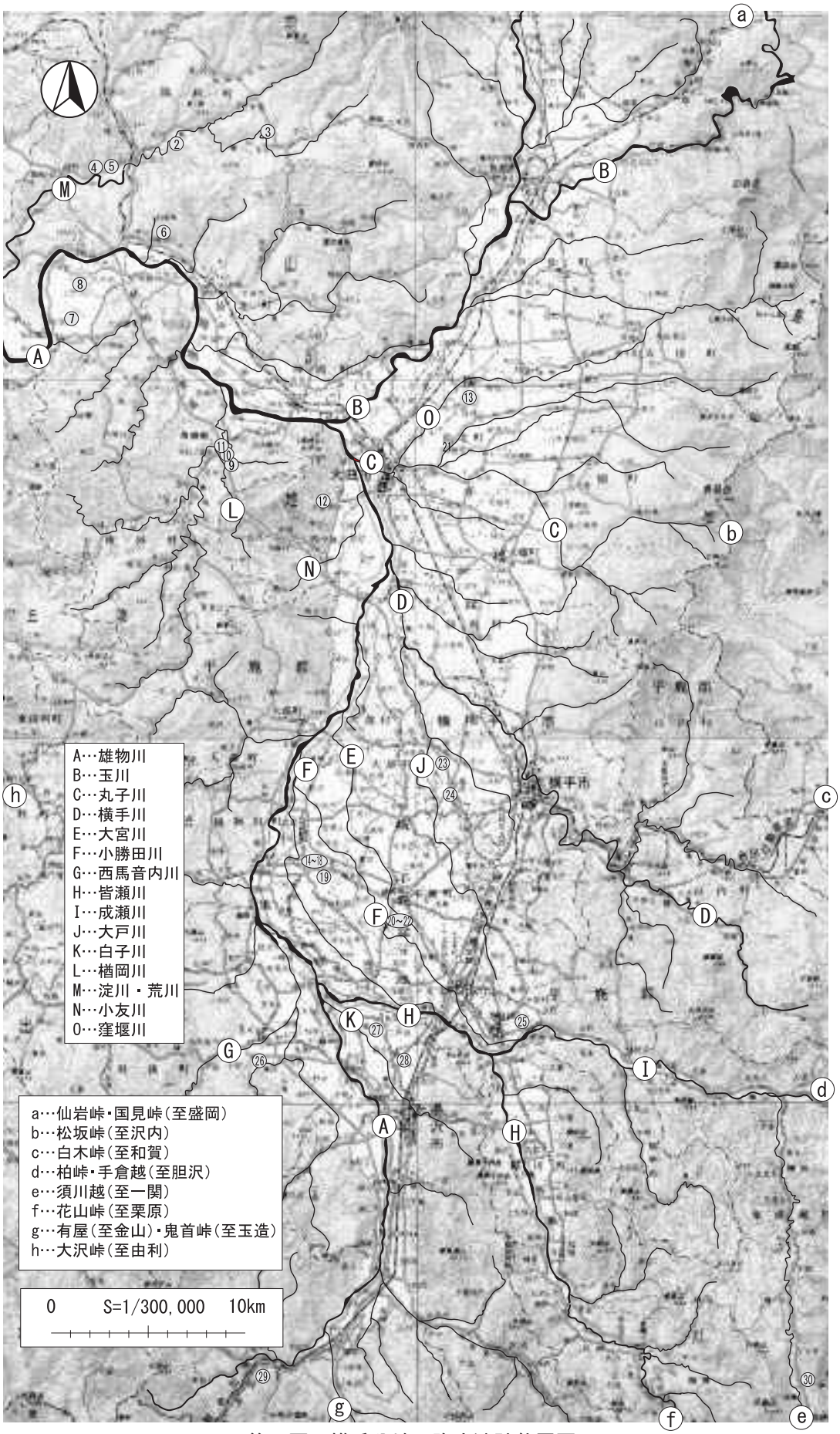
Ⅱ　横手盆地の弥生時代の遺跡概略

横手盆地で確認されている弥生時代の遺跡は、岩屋山・上野崎・番屋沢・五百刈田・和田・中沢（旧協和町・現大仙市）、上ノ台Ⅵ・上ノ台Ⅹ（旧西仙北町・現大仙市）、小出Ⅰ・小出Ⅱ・小出Ⅳ（旧南外村・現大仙市）、宇津ノ台（旧大曲市・現大仙市）、星宮（旧仙北町・現大仙市）、十三塚Ⅰ・十三塚Ⅱ・十三塚Ⅲ・廻館Ⅰ・廻館Ⅱ・柄内（雄物川町）、平沢Ⅱ・中都・鳥越森（平鹿町）、手取清水・上猪岡（横手市）、平鹿（増田町）、横枕Ⅰ（羽後町）、拾上・木津根崎Ⅰ（湯沢市）、岩井堂洞穴（旧雄勝町・現湯沢市）、野田（旧皆瀬村・現湯沢市）の30カ所に及ぶ（第1図・第1表）。

発掘調査が行われた遺跡は、大仙市の岩屋山（長山1969）・五百刈田（谷地1990）・和田（高橋学1991）・小出Ⅰ（高橋忠彦1991）・小出Ⅱ（同1991）・小出Ⅳ（同1991）・星宮（小西1999）、横手市の手取清水（大和久1974・船木1990）・上猪岡（武藤1991）、増田町の平鹿（児玉1983）、雄物川町の柄内（島田2005）、湯沢市の岩井堂洞穴（山下1969）などの12カ所で、さらに遺構内資料となると、和田遺跡SN07焼土遺構、小出Ⅰ遺跡SI04竪穴住居跡、上猪岡遺跡SI84竪穴住居跡・SR03土器埋設遺構、平鹿遺跡SK077土坑、手取清水SK133土坑などの6カ所に過ぎない。

次に遺跡立地を概略する。横手盆地では2地域にまとまる傾向があり、それは雄物川中・上流域の支流と横手盆地から秋田平野に抜ける雄物川流域筋とその支流である。雄物川中・上流域の状況は、雄物川支流の成瀬川から小勝田川に至る筋に平鹿遺跡（25）・中都遺跡群（20～22）・十三塚遺跡群（14～18.19）が、横手川支流の大戸川沿いには手取清水遺跡（23）・上猪岡遺跡（24）が、雄物川支流の白子川沿いに拾上遺跡（27）・木津根崎Ⅰ遺跡（28）がある。横手盆地から秋田平野に抜ける雄物川流域筋の状況は、雄物川支流の楢岡川沿いに小出遺跡群（9～11）、雄物川支流の淀川・荒川沿いには上

＊1 雄物川町郷土資料館学芸員（元：秋田県埋蔵文化財センター研修員）　＊2 東京大学大学院



第１図　横手盆地の弥生遺跡位置図

No.	遺跡名	市町村名	立　地	発掘調査	秋田県遺跡地図・市町村史・報告書の記載から
1	岩屋山	大仙市協和	丘陵地・洞穴	○	弥生土器片、石鏃（アメリカ型）図示は無し。
2	上野崎	大仙市協和	丘陵河岸段丘	×	弥生式土器。
3	番屋沢	大仙市協和	丘陵地	×	石鏃（アメリカ型を含む）。
4	五百刈田	大仙市協和	丘陵河岸段丘	○	弥生土器片（前期・後期）。
5	和田	大仙市協和	丘陵河岸段丘	○	焼土遺構1基。（広義の天王山式）。
6	中沢	大仙市協和	丘陵河岸段丘	×	弥生（天王山式類似）土器片、石鏃（アメリカ型含む）。
7	上ノ台Ⅵ	大仙市西仙北	盆地河岸段丘	×	弥生土器片（志藤沢併行）、石片。
8	上ノ台Ⅹ	大仙市西仙北	盆地河岸段丘	×	弥生土器片（志藤沢併行）。
9	小出Ⅰ	大仙市南外	丘陵河岸段丘	○	遺構無し。弥生前期。
10	小出Ⅱ	大仙市南外	丘陵河岸段丘	○	遺構無し。弥生中期。
11	小出Ⅳ	大仙市南外	丘陵河岸段丘	○	竪穴住居跡1軒。弥生前期。
12	宇津ノ台	大仙市大曲	丘陵地	×	弥生式土器
13	星宮	大仙市仙北	盆地河岸段丘	○	弥生土器。水田跡（時期不明）。
14	十三塚Ⅰ	雄物川町	盆地河岸段丘	×	弥生土器片（中期～後期）。
15	十三塚Ⅱ	雄物川町	盆地河岸段丘	×	弥生土器片。
16	十三塚Ⅲ	雄物川町	盆地河岸段丘	×	弥生土器片。
17	廻館Ⅰ	雄物川町	盆地河岸段丘	×	弥生土器（後期）完形2個体。
18	廻館Ⅱ	雄物川町	盆地河岸段丘	×	弥生土器片（前期）。
19	柄内	雄物川町	盆地河岸段丘	○	遺構無し。弥生中期。
20	平沢Ⅱ	平鹿町	盆地河岸段丘	×	弥生中期。
21	中都	平鹿町	盆地河岸段丘	×	弥生中期。牛頸遺跡と同遺跡。
22	鳥越森Ⅰ	平鹿町	盆地河岸段丘	×	弥生中期。
23	手取清水	横手市	盆地河岸段丘	○	弥生前期～後期。
24	上猪岡	横手市	丘陵地	○	竪穴住居跡1軒・土器埋設遺構1基。弥生前期。
25	平鹿	増田町	扇状地	○	土坑1基。弥生前期。
26	横枕Ⅰ	羽後町	扇状地	×	弥生土器片。
27	揃上	湯沢市	盆地河岸段丘	×	弥生土器片（志藤沢）、石器類。
28	木津根崎Ⅰ	湯沢市	盆地河岸段丘	×	弥生土器片（常盤式）、石鏃（アメリカ型）。
29	岩井堂洞穴	湯沢市雄勝	丘陵地・洞穴	○	弥生土器後期。
30	野田	湯沢市皆瀬	丘陵地	×	弥生土器片（田舎館古型式）。

第１表　横手盆地の弥生遺跡一覧表

第２図　十三塚遺跡群の位置図（ゼンリン住宅地図 1994）

野崎遺跡群（2～5.6）と今回図版上位置を載せられなかった岩屋山遺跡（1）、雄物川中流沿いに上ノ台遺跡群（7.8）などがある。その他では、宇津ノ台遺跡（12）が雄物川支流の小友川左岸約2㎞の丘陵地、星宮遺跡（13）は丸子川支流窪堰川沿い、岩井堂洞穴遺跡（29）は雄物川上流沿い、野田遺跡（30）は成瀬川上流沿いに位置する。

遺跡の時期変遷として現在までの報告を参考にすると前期～中期における遺跡は、やや標高の高い丘陵地内の河岸段丘上に多く見られる傾向がある。また中期～後期にかけては盆地内の河岸段丘上で小河川沿いに展開していることが認められる。いずれにせよ、遺跡の分布状況は横手盆地で確認できることから、断絶することなく継続的な弥生時代の変遷が想定される。

（島田）

Ⅲ　秋田県内の弥生土器編年について

東北地方の弥生土器編年について体系的にまとめたのは須藤隆氏である（須藤1998；第2表）。主に青森県・宮城県を中心に組まれた編年案であり、資料の不足している秋田県域は断片的な遺跡名があげられるに止まっている。また氏の3期区分案は近畿地方に合わせる広域編年を意識したものであったが、近年、東北地方における遠賀川系土器の年代的位置の検討によって、須藤氏の前期2（a・b）期を中期初頭に引き上げる広域編年の試み（石川2003・同編2004など；第3表）がある。石川氏は北陸との関連で宇津ノ台式を積極的に取り上げる論者の一人であるが、それ以外の資料群には触れられないままである。広域編年という意味では、秋田県内の資料が使用されたのは1970年代までであり（中村1976）、現在は他県域において資料の蓄積を基に各時期の細分が行われる段階に来ており、秋田県域の資料が寄与する所は少なくなっている。

その主たる要因は二つあると考えられる。まず一つには、男鹿半島～秋田市域周辺における日本海側地域と、十三塚遺跡の位置する雄物川中・上流域の内陸地域とが分断されてきたことである。北陸地方との比較を軸に据えてきた児玉準氏は日本海沿岸地域で段階区分を行っている（1988）が、資料不足からか県南部にはあまり触れない。結果として、いち早く資料提示されていた宇津ノ台（須藤1970b）・手取清水（大和久1974・船木1990）両遺跡において、遺跡内での土器分類案[註2]だけが知られるようになっているのが現状である。もう一つは、他地域の土器に類似する土器で段階設定を行う伝統である。個々の土器がどの型式に類似するかは分かっても、それらが在地の編年案のどれに相当するのかを明らかにする努力があまりされてこなかったと言える。岩手県内の土器型式である谷起島式を引き算して設定された志藤沢式（伊東1960）などはその典型であり、未だに谷起島式と伴うのはどの土器なのかが未だ明らかにされていない。結果として、県外の研究者にとっては「秋田県の弥生土器」のイメージが湧きにくく、広域編年を行う上で一つの障害になってきたことは否めない。

その一方、県南・県北の土器群を繋ぐ重要性を訴えてきたのは冨樫泰時氏である。地蔵田Ｂ遺跡の報告書刊行後には前期・中期・後期区分案（冨樫1987；第4表）、最近は砂沢式を最古段階のものとする早期案（同2003）の提示を行っている。また十三塚遺跡が立地する横手盆地で、各段階の弥生土器が出土している事をまとめている（同2004）。小地域内における土器編年作業の必要を訴えるものと受け止めるべきである。

現在まで蓄積されてきた資料をもとに、まず小地域内での編年から始めて県内を総じての検討を行い、在地の土器群の様相を明らかにしていく基礎的作業が求められているといえる。　（根岸）

Ⅳ　十三塚遺跡の位置と出土経緯

十三塚遺跡は雄物川町東里字十三塚及び廻館地内にあり、横手盆地南西部の雄物川中流域右岸の約3㎞の雄物川より高い段丘上に立地する（第2図）。遺跡は、ちょうど段丘の境界となっており、十三塚Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡が三段高い段丘上で標高は約52m、廻舘Ⅰ・Ⅱ遺跡が二段高い段丘上で標高は約51mである。北東部に小河川石持川が雄物川に向かい北流し、西側は石持川の名残である河跡湖と思われる池がある。十三塚の地名はその名の通りで、十三基塚があったと伝承されており大正末年までは3基残存していたが、いずれも開田のため現在消滅している(註3)。廻舘の地名の由来は廻舘が中世城館に比定されており、この地が南北150m、東西120mを測り、周囲を石持川の旧河川が廻っていたと思われる（山田1981）。この内側の地名を廻舘、外側を十三塚と呼んでいる。

十三塚遺跡は十三塚・廻舘十三塚・十三塚Ⅰ・十三塚Ⅱ・十三塚Ⅲ・廻館Ⅰ・廻舘Ⅱと東里十三塚地区に7カ所の遺跡が存在する。この中で弥生時代以外の遺跡は十三塚遺跡と廻舘十三塚で、古代の十三塚遺跡は確認調査のみで全体像が不明であるが、竪穴住居跡と平瓦と丸瓦の破片を確認している（島田2003）。廻舘十三塚遺跡は上記のとおり鎌倉時代以降の塚跡と思われる。

弥生時代の遺跡は、十三塚Ⅰ・十三塚Ⅱ・十三塚Ⅲ・廻館Ⅰ・廻舘Ⅱの5カ所である。これらの遺跡は第2図で示しているとおり、東西400m、南北240mの範囲内で、宅地造成の際に確認されたものを個別に登録しているが、立地から約96,000㎡の範囲が弥生時代の十三塚遺跡として判断して良いであろう。

『秋田県の考古学』・『考古学ジャーナル』No.166などに紹介されている弥生土器2個体（第5図22.23）は十三塚遺跡として広く周知されている。しかし『秋田県遺跡地図（県南版）』（1987）では廻館Ⅰ遺跡として、この時登録変更しており、その理由は字名が東里字廻館だったとしている。昭和35年、高山氏宅地内の水道管付設工事で、町道側の溝を掘った際に出土したという。隣接の畑地より土器片や石器類、また隣接地より須恵器甕も出土している。廻舘Ⅱ遺跡からは、弥生前期の土器片（第3図 1）が採取されている。字名は東里字十三塚地内である。旧名として内配蒔が残る地域で土器に注記されている(註4)。

十三塚Ⅱ遺跡と十三塚Ⅲ遺跡は宅地造成の際に弥生土器片が出土したと報告されるが現在散逸している（島田1980）。十三塚Ⅰ遺跡は今回紹介する新資料で、資料館に収蔵されていたほとんどがこの遺跡である（第3図2～第5図21）。出土経緯は昭和38年建築物の基礎工事の際に発見したところで、地下1mほどの間から弥生土器が出土したとする（島田1980）。さらに島田氏の記録と思われる記載が『秋田県遺跡カード』（雄物川町）1～96（1986）にあり、「老人憩いの家」建設につき、基礎盤の地堀りの際に多量の土器片と石造物が出土し、また地下に籾殻層があり、遺物洗浄の際に籾殻と見られるものを発見したとしている。また土層注記も記述され、表土から基盤面に向かい6層としている。1層が腐植土層、2層に上砂層（表面から約30㎝の深さの層）、3層に腐食土層、4層に下砂層（表面から約60㎝の薄い層）、5層に腐食土層、6層基盤面で、2層から4層の間で土器片が出土したとしている。

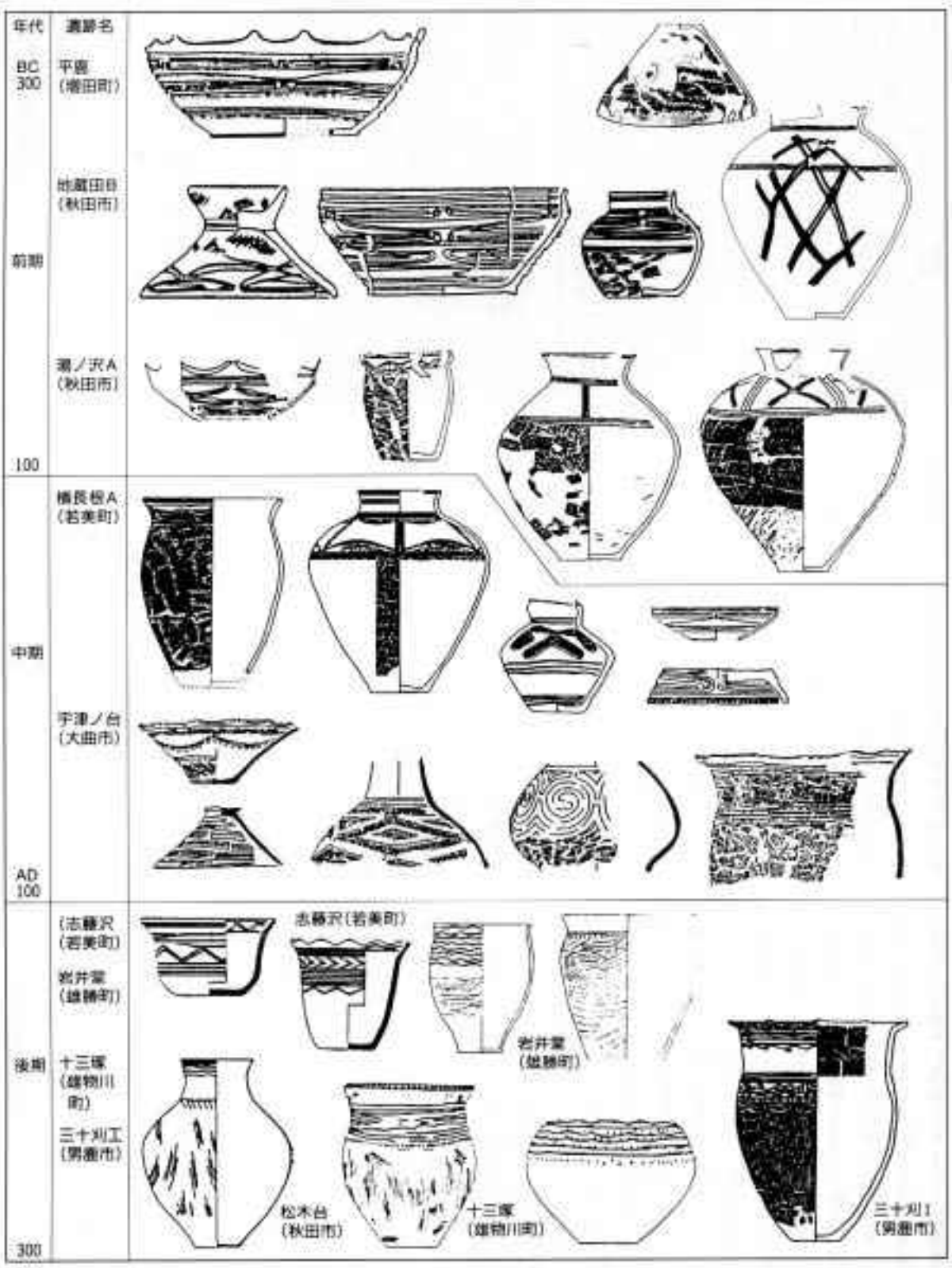
（島田）

時　期　区　分			Ⅰ阿武隈川流域	Ⅱ名取川流域	Ⅲ北上川下流域	Ⅳ北上川下流域
晩　期		6 期	鹿　野	大洞A'式	大洞A'式 (山王Ⅳ下層出土土器)	牧野Ⅱ
弥生時代	前期	1 期	＋	十三塚	山王Ⅳ上層式	砂　沢
		2　a	薬師堂	カラト塚	青木畑式	二枚橋
		2　b	＋		山王Ⅲ層式	＋
	中期	3 期	鱸沼式	船戸前・原	寺下囲式	宇鉄Ⅱ
		4　a	桝形囲式	桝形囲式	桝形囲式	
		4　b	円田式	＋	境ノ目A式	田舎館
		5 期	十三塚式	崎山囲式	崎山囲式	大石平
	後期	6 期	天王山式	天王山式	上の原式	鳥海山

第２表　編年表（須藤隆 1998）

河内 (寺沢・藤井89)	大和 (藤田・松本89.90)	加賀 (福島80・埴山82・谷内尾83)	濃尾 (石黒・宮腰95)	三河	駿河	南関東 (後期=安藤96)	北信	福島	宮城/岩手	青森	道南 (高橋84)	道央 (高橋84)	道東 (熊木87.00)
船橋			馬見塚						大洞A1古				
Ⅰ-1	Ⅰ-1		Ⅰ-1			[杉田]			大洞A1新				緑ヶ岡
2			2	樫王			氷Ⅰ		大洞A2				
3	2		3	水神平1					大洞A'				
4	Ⅱ-1a		4	2		堂山1	[針塚]	御代田	福浦島下層	砂沢		[油駒]	フシココタン下層
Ⅱ-1	1b												
2	2		Ⅱ-1	水神平3		2		[宮崎3次]					
3	3a	矢木ジワリ	(朝日)2	岩滑	丸子	平沢	[新諏訪町]	滝ノ森	原/山王Ⅲ	二枚橋	[下添山]		興津
	3b	八日市地方6	3 Ⅲ-1	[篠束]		遊ヶ崎	[松節M21]						
Ⅲ-1	Ⅲ-1	7	(貝田町)2	瓜郷下層	[有東16次]	中里	[松節M16]	竜門寺	桝形1/＋	田舎館1 2	アヨロ1 アヨロ2a	江別太7層 6層	
		8	3				栗林1	南鶴山2				5層	宇津内ⅡaⅠ
Ⅲ-2	Ⅲ-2		4	瓜郷中層	[長伏]	宮ノ台1	栗林2古	ニツ釜	桝形2/＋	3	アヨロ2b	江別太1(後北A古)	
			5										
Ⅳ-1	3	磯部運動公園	Ⅳ-1		[長伏六反田]	2前							
2	4												
3	Ⅳ-1	善光寺	(高蔵)2		[向原]	2後	栗林2新	河原町口	[境ノ目A]/橋本	[大石平]	アヨロ3a	江別太2(後北A中)	宇津内ⅡaⅡ
4	2	戸水B	3	長床		3	栗林3	御山村下			アヨロ3b		
					[瀬名13a]	4							
Ⅴ-0	Ⅴ-1												
1	2		Ⅴ-1	[東光寺SD11]		後期Ⅰ		和泉・能登	常盤		江別太3(後北A新)		
2	Ⅵ-1	猫橋	(山中)2		登呂1	Ⅱ	吉田	天王山			坊主山1(後北B古)		宇津内ⅡbⅠ
3	2		3	[東光寺SD10]		Ⅲ前					坊主山2(後北B新)		
Ⅵ-1	3	法仏1	4	[東光寺SD08]	2	Ⅲ後	箱清水1	屋敷	湯舟沢	[千歳13]	坊主山3(後北C1)		宇津内ⅡbⅡ
2		2	5				2						
庄内0	4	月影1	Ⅵ-1	欠山1	飯田1	Ⅳ							
1	庄内1	月影2	2	2					赤穴		坊主山4(後北C2.D)		
2	2	白江	3	3	2	Ⅴ	3						

第３表　編年表（石川日出志 2003）



第 4 表　秋田県の弥生土器編年表（冨樫泰時 1987）

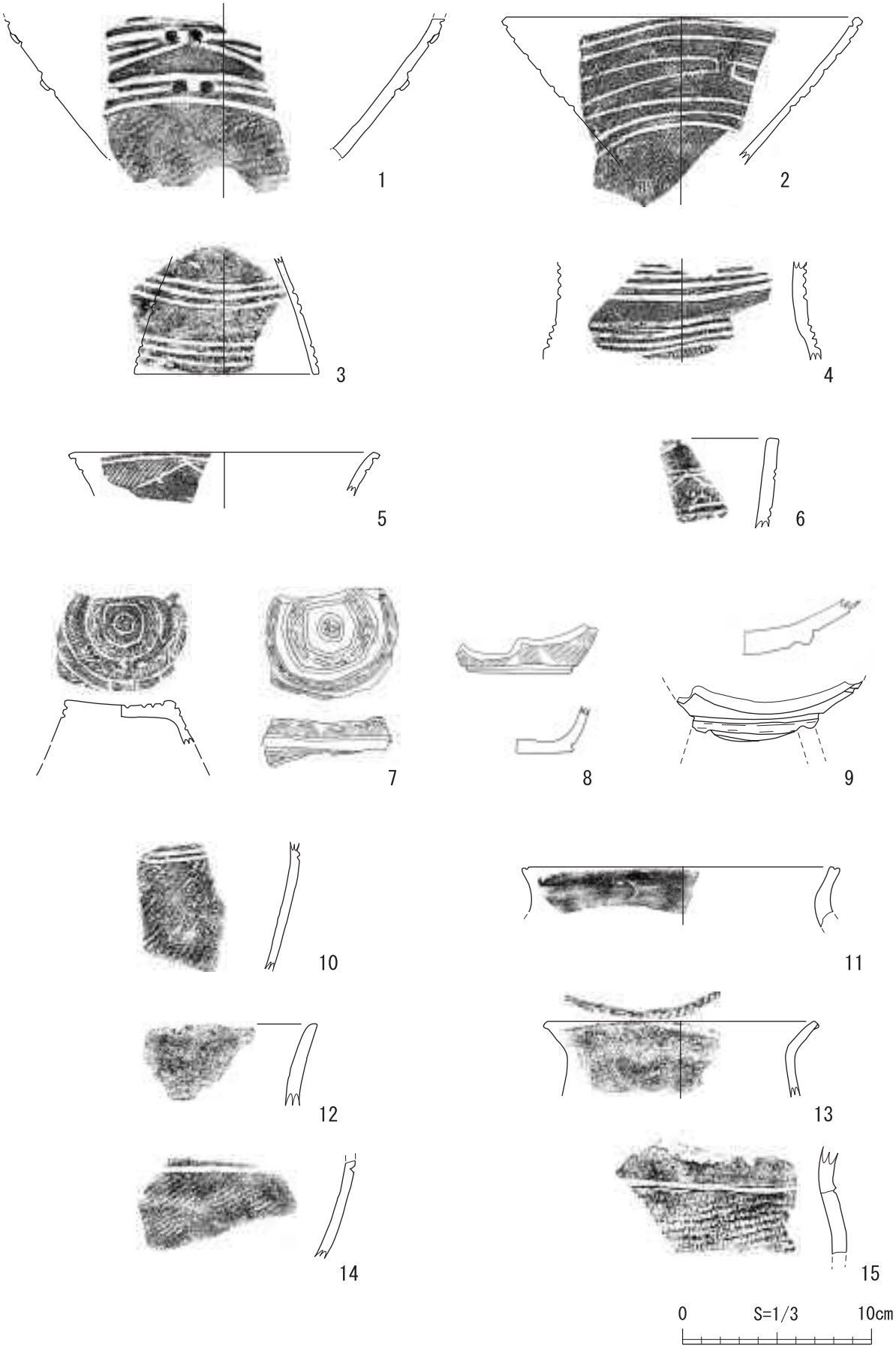
Ⅴ　十三塚遺跡の出土遺物の検討

従来知られている土器（第5図22.23；奈良・豊島1969）以外の大部分が破片資料であるが、一部器形を復元できるものがある。時期・器種とも一通り揃い、他遺跡との比較が可能である。以下、数字を付す場合は各図版に従い、第3図（1 ～ 15）・第4図（16）・第5図（17 ～ 23）の順序に記す。

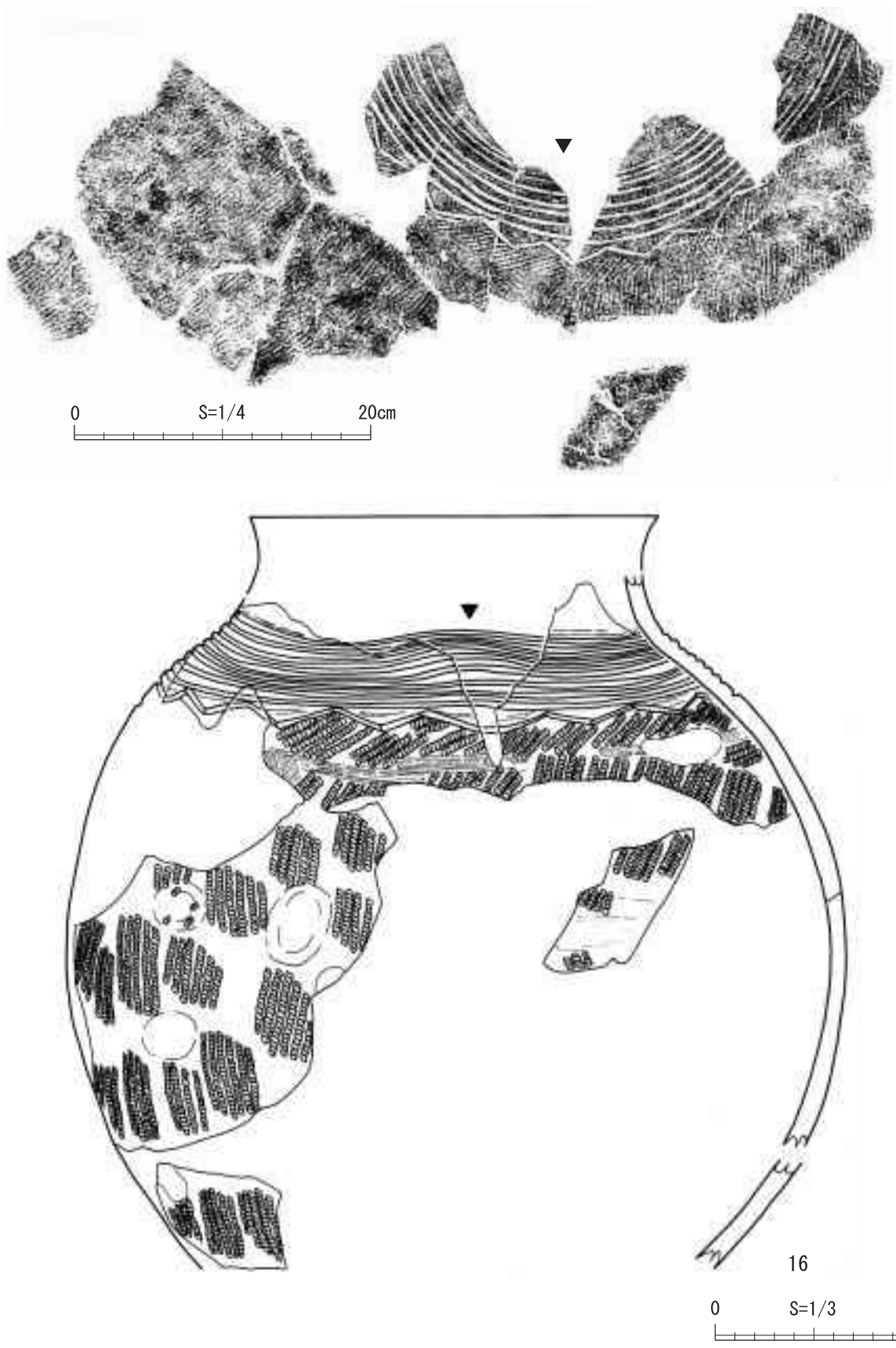
1は典型的な一段構成の変形工字文を有する浅鉢形土器で、おそらく平縁・すぼまる底部をもつ器形となろう。青森県のものに比較して胎土が粗く殆ど磨かれていない。2は「変形工字文Ｃ２型」（須藤1983）を有する台付鉢の鉢部である。工字文の三角形内部のみ縄文が残されるほかは磨消縄文手法が用いられているが、徹底されておらず一部残る。沈線は断面三角形であり1と比べて細く、LR縄文は撚りが強く粒が小さい。なお内面の口縁直下に籾圧痕が一つ確認される(註5)。3は平行沈線文が配される台付鉢の台（脚）である。器壁が薄い・金雲母が混和されるという特徴がある。4はやや小さい鉢形土器になると考えられ、多重沈線（4条）間に無文帯を作り出した筒形の頸部破片になろう。胴部以下には縦方向のRL縄文が施される。5.6は連続山形文を有する浅鉢形土器であり、磨消縄文手法を用いて山形文の下方はLR縄文を磨消す。7の蓋形土器にも磨消縄文手法が用いられ、LR縄文帯・無文帯の重畳を形作っており、各々の縄文帯には列点文を充填しベンガラ塗彩している。列点文は角形の工具による刻目であり、平行沈線も同一の工具によって施されている。8.10は浅鉢で、LR縄文を施す胴部に平行沈線を引いている。9は台付鉢の鉢部底であり太い沈線を2条引いている。底が円盤状であり角形の工具によって調整されている。胎土が精良で混和物も少ない。11 ～ 15はそれぞれ深鉢の口縁部・胴部であるが、形態には数種類ある。口唇に LR縄文による圧痕を施し、くの字外反する13が特徴的である。

16は口縁・底部を除いておよそ全体の1/3程度の破片が残る大形の甕である。口頸部は無文で外反するものと思われ、胴部の上半でやや膨らみ球胴形となる。直下には多重平行沈線（8条）とそれに沿う形で連続山形文が施され、また山形文の上方は磨消されている。山形文の直下にはLR斜縄文が施されるが、胴部下半には縦方向のLR縄文が施され、両者の間はヨコハケ・ヨコナデで調整されている。胴部には磨耗痕が目立ち胎土は粗製であり、沈線は丸形の断面をもち浅いのが特徴である。17は口縁・胴部破片から復元した壷である。外反する口頚部は無文であり器厚が一定に保たれ、口唇に平坦面を作り出しLR縄文を施す。以下の胴部にはLR縄文が施される。18.19は壺の口縁部であるが、肥厚の度合いなどからやや古手のものと考えられる。20.21は甕もしくは壺の底部であるが、20の内面に観察できる縦方向のハケメが特徴的である。

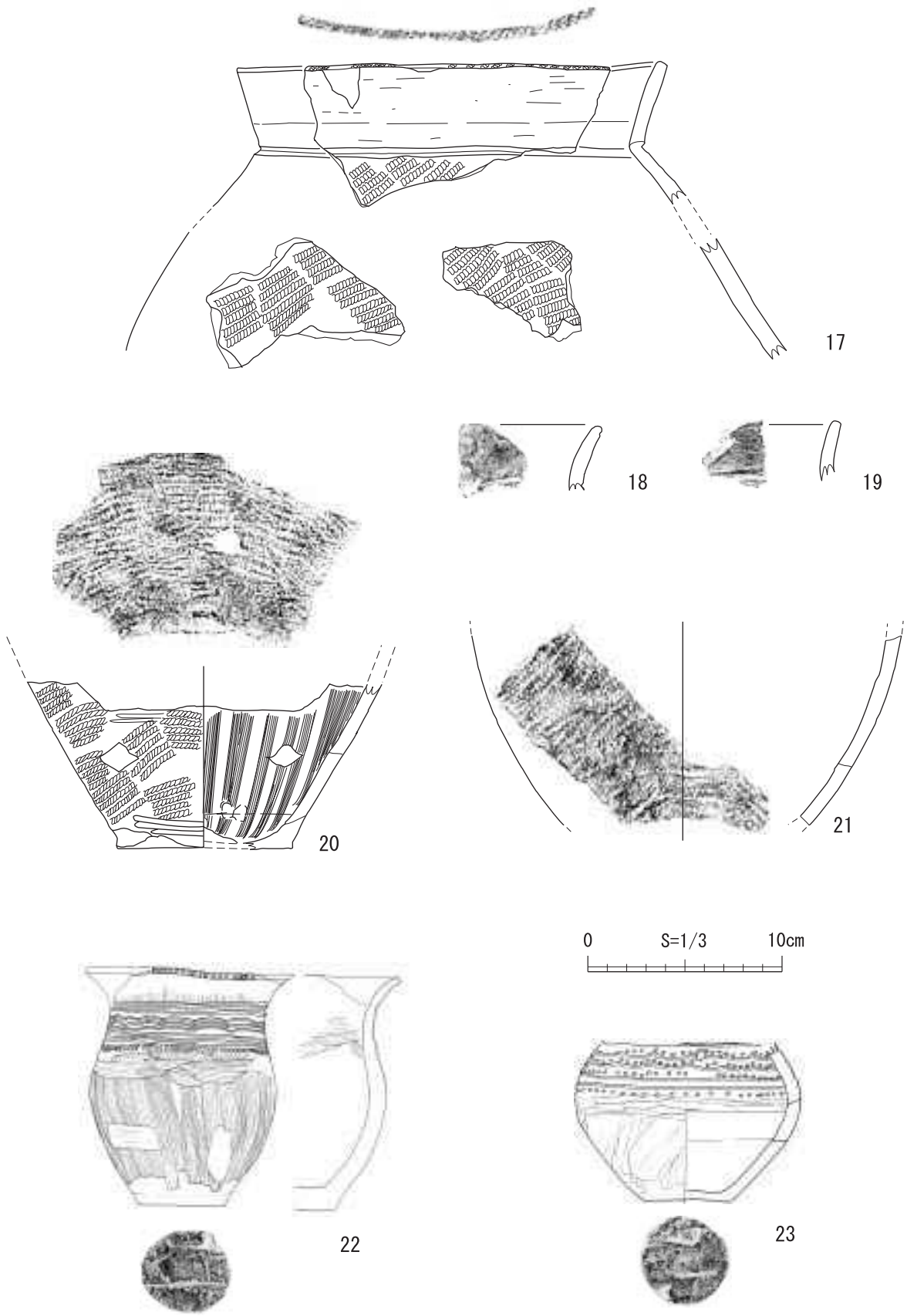
22は、口縁の1/3程度が欠失するほぼ完形の甕である。胴下半の厚みある作りに比べ、口縁部は器壁が薄い。口唇は面取りしLR縄目圧痕が施される。頸部の文様帯には3条単位の櫛により平行線文・弧文が左から右の方向で描かれるが、途切れや描き直しが観察できる箇所があり厳密な規則性は感じられない。2条ずつの施文単位であり、部分的に1条単位で描き足したと観察できる。直下には刺突（同一工具の櫛であろう）が巡る。調整との新旧関係は、①上から下という方向でハケメ→②櫛描文様→③左から右の方向でミガキ（ハケメを消す）である。特に櫛描文様直下のミガキは顕著である。23は口縁全体が水平に欠失する小形壺である。対面する両側上端に丸く穿孔されていることから、故意に打ち欠かれた所産とみて良いであろう。上部の文様帯には、2条ずつの平行沈線・弧文が左から右の方向で描かれるが、途切れ・単位のずれがあり同時施文とは考えにくい。内部には丸い刺突が充填さ



第３図　十三塚遺跡出土遺物（１）



第４図　十三塚遺跡出土遺物（２）



第５図　十三塚遺跡出土遺物（３）

No.	注記	器種	部位	色調	胎土	文様	調整	備考
1	S30	浅鉢	胴	黄灰褐色	雲母・炭化物粒を少量、金雲母を微量混和	変形工字文・LR縄文		注記は東里字内配蒔(石橋)とも記載。
2	S49.6.7	浅鉢	口縁	（外）黄褐色 （内）黒褐色	径1～2㎜前後の砂礫を少量混和	磨消縄文手法による変形工字文・LR縄文	内面ヨコナデ	黒斑・ベンガラ塗彩
3	S49.6	台付鉢	台	橙褐色	径1mm以下の砂粒を多量・金雲母を少量混和	平行沈線	表面ヨコナデ	
4	S49.6	鉢	胴	暗褐色	雲母・ローム粒を少量混和	多重平行沈線・RL縄文	内面ヨコナデ	段あり
5	S49.6.7	浅鉢	口縁	（外）明褐色 （内）暗褐色	ローム粒を少量混和	磨消縄文手法による山形文・LR縄文	内面ヨコナデ	
6	S49.6	鉢	口縁	黄褐色	径1mm以下の礫を多量に混和	平行沈線・山形文	内面ヨコナデ	ベンガラ
7	S49.6	蓋	底	（外）茶褐色 （内）暗褐色	径1～2㎜前後の砂・礫を少量混和	磨消縄文手法によるLR縄文帯の重畳・列点文の充填		縄文帯の部分にベンガラ
8	S49.6.7	浅鉢	底	暗褐色	径1～2㎜の礫を少量・雲母を多量に混和	LR縄文		ベンガラ
9	S49.6	台付鉢	胴・杯	灰褐色	混和物なし	LR縄文		円盤状の杯部・ベンガラ
10	S49.6	鉢	胴	暗褐色	径1mm以下の礫を多量・金雲母を少量混和	LR縄文	内面ヨコナデ・外面ヨコハケ	
11	S49.6.7	甕	口縁	黄褐色	径1mm以下の砂粒・海綿状骨針を多量に混和	口唇に沈線	内面ヨコナデ	
12	S49.6.7	甕	口縁	（外）暗褐色 （内）茶褐色	径1～3㎜の礫を多量に混和		内面ナデ	
13	S49.6.7	甕	口縁	（外）黒褐色 （内）暗褐色	径1mm以下の礫・雲母・ローム粒を少量混和	口唇にＬＲ縄文圧痕	内面ヨコナデ	
14	S49.6	甕	胴	暗黄褐色	径1mm以下の砂粒・金雲母を多量に混和	平行沈線	内面ナデ	
15	S49.6	甕	胴	（外）明褐色 （内）暗褐色	径1～2㎜の礫を多量・石英を少量混和	平行沈線	内面ヨコナデ	
16	S49.6.7	甕	胴	黄褐色	径1～2㎜の礫・炭化物粒・酸化鉄粒を多量に混和	多重平行沈線・山形文、胴部にLR縄文	ヨコナデ・一部ヨコハケ	
17	S49.6	壷	口縁 胴	暗黄褐色	径1～2㎜の礫・雲母を多量に混和	口唇・胴部にLR縄文	ヨコナデ	
18	S49.6.7	壷	口縁	（外）暗褐色 （内）茶褐色	径1mm以下の礫・雲母・を少量混和	平行沈線	内面ヨコナデ	
19	S49.6.7	壷	口縁	（外）暗褐色 （内）茶褐色	径1mm以下の礫・ローム粒を多量に混和	平行沈線		
20	S49.6		底	（外）暗褐色 （内）黒褐色	径1mm以下の砂粒・ローム粒を多量に混和	LR縄文	内面　タテハケ	
21	S49.6		底	黄褐色	海綿状骨針を多量・雲母を少量混和	LR縄文	内面ヨコナデ	
22		甕	口縁一部欠	暗褐色	径１㎜以下の砂粒混和	櫛歯による平行線・３条の弧文、直下には刺突文	（外）タテハケ→ミガキ、（内）ヨコハケ→ナデ	
23		壺	口縁欠	黒褐色	径１㎜以下の砂粒混和	平行沈線（２条）・連弧文（２条）、間を刺突で充填	（外）縦のケズリ→縦のミガキ、（内）ケズリ→ヨコナデ	文様部分には朱彩

第５表　十三塚遺跡土器観察表

れ、一部沈線を切る箇所があるが不規則である。内外面ともケズリで成形し、ナデ・ミガキで調整を加えている。22.23とも精製された胎土で光沢があり、特に23は黒色化が著しく文様部分は赤彩されている。また両者とも底面に沈線による図形が描かれている。いずれ小形土器であり、煮沸など日常の用途に使用されたとは考えにくい精製土器と言える。

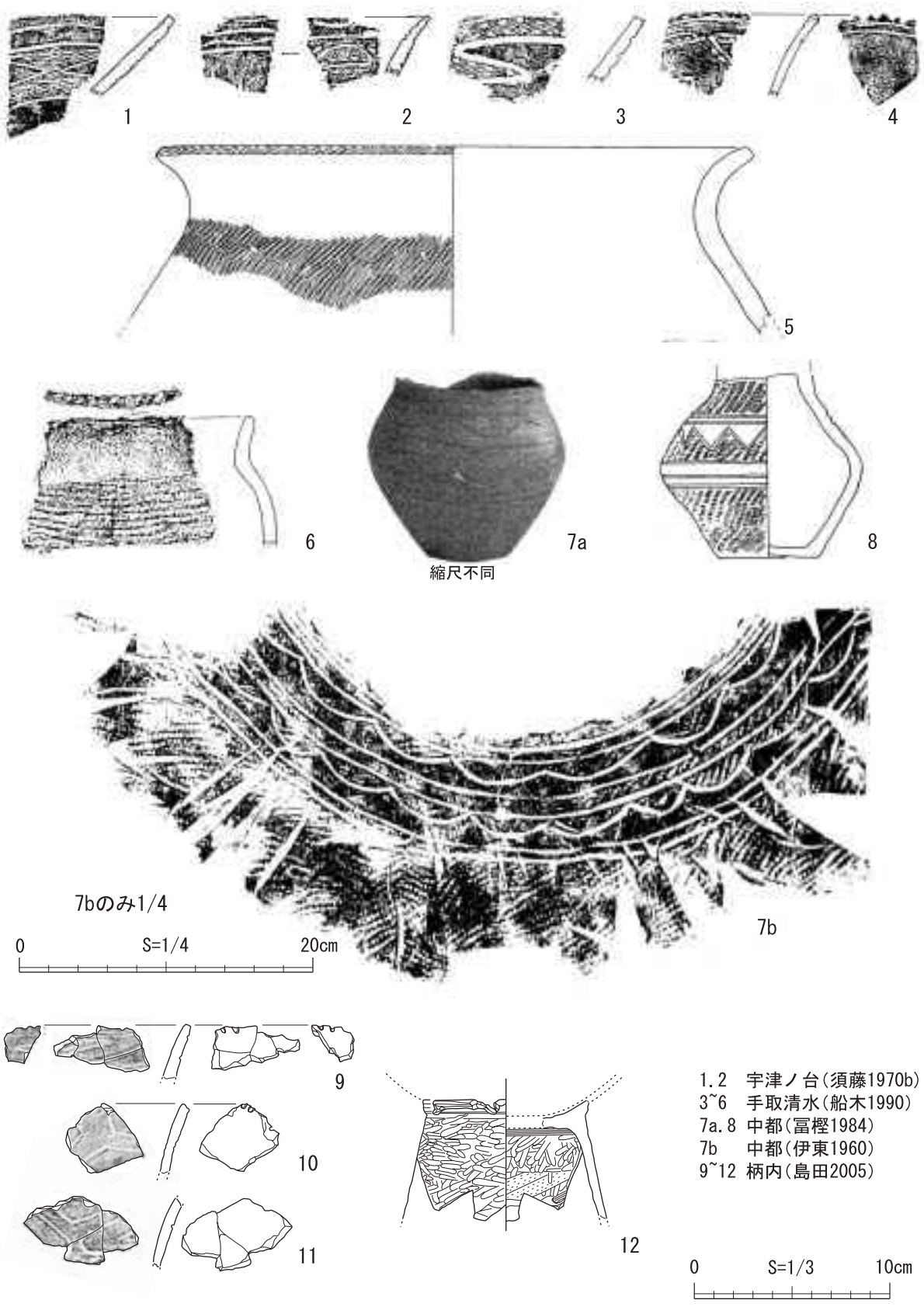
（根岸）

Ⅵ　編年的考察

結論から先に述べると、1が砂沢式で弥生前期に比定されるほか、2～21が弥生中期、22.23がそれ以後（中期末～後期初頭）に帰属する資料であると考えられる。1が廻舘Ⅱ遺跡、2～21が十三塚Ⅰ遺跡、22.23が廻館Ⅰ遺跡出土であるから、ほぼ同一の遺跡群の異なる地点で弥生前・中期・後期の破片が採集されていたことになる。以下、周辺の他遺跡と比較することで各土器のおおよその時期的位置を定めていくが、特に東北地方北部における弥生中期の編年は未だ定まっていない状態であり、ここで新たに在地の型式名の設定を試みるものではない事を明記しておく。なお以下で使用する時期区分は広域編年の視点（石川前掲）に立っており、須藤隆氏の設定した前期後半を中期前葉とするものである。

2.3は宮城県における山王Ⅲ層式（須藤1983）・或いは岩手県における谷起島式（鳥畑1955）に類似する中期前葉の資料である。2は磨消縄文手法の存在から横手市手取清水2群（船木1990）よりも新しいとも考えられ、或いは中葉に食い込むかもしれない。3は波状文がなく平行沈線のみで構成される点が岩手・宮城のものと異なる。4に類似する資料は志藤沢遺跡など主に日本海側に少数出土しており、二枚橋式（須藤1970a）の深鉢と比較することができる。5.6は連続山形文の存在から手取清水4群と比較できる。7のような文様構成・器形の、蓋の類例は県内・県外とも少ない。ただし縄文帯に列点文を充填する手法は、日本海沿岸地域で横長根A・志藤沢遺跡、近くでは大仙市宇津ノ台遺跡Ⅰ群（第6図1.2；須藤1970b）、手取清水遺跡4群（第6図3.4：船木1990）、県外では北上川流域（例えば火行塚遺跡；高橋1981）にも見られる。円形の刺突の場合も含めると広い分布範囲を示すようであり、およそ中期中葉～後葉の幅で捉えられる資料であろうと考える。11～13.17は無文・ナデ整形の長めの口縁部から手取清水遺跡の甕（第6図5.6）と比較できる。16は宇津ノ台・手取清水両遺跡に比較できる適例がなく、多重沈線と連続山形文からなる文様構成は、むしろ平鹿町中都（伊東1960・冨樫1984；第6図7.8）、湯沢市木津根崎・弁天野尻（山下・茂木1965）など狭い地域に存在するようであり、在地土器の特徴を表したものと見てよいであろう。かつては宮城県の桝形式や青森県の田舎館式との類似を説かれた土器群であり、文様帯の幅・連続山形文の存在から見て中期後葉のものと捉えたい。ちなみに雄物川町柄内遺跡（島田2005）では磨消縄文手法を用いた菱形文を有する精製鉢（第6図9～11）が出土しており、同じく中期後葉に相当するものと考える[(註6)]。横手盆地に一般的な文様構成であり、志藤沢式とも比較できる。

16から22.23への文様構成の変化は、間に数段階を挟むとしても、連続山形文から櫛歯による弧文への変化・沈線を描く工具の変化（細線化）という文脈で辿る事ができると考える。22.23とも2条施文を単位としており、雄物川最上流域の岩井堂洞穴遺跡（奈良ほか1963）出土の竹管状工具で連弧文を描く例と類似する。残念ながら、秋田県内ではほかに類例を求める事ができない。22.23の土器は従



第６図　横手盆地内の弥生土器

来、小坂町周辺の交互刺突文系土器群に並行するとされ（橘1979）、弥生後期の範疇に入れられてきた（冨樫1987）。しかし宮城県において中期後半の土器型式とされる（石川2003）崎山囲式（伊東・伊藤1965）と文様表出技法が類似することを考慮すると、中期末葉に帰属する可能性も排除すべきでない[註7]。いずれにせよ十三塚遺跡を含む横手盆地において、弥生中期の土器群を検討してこそ明らかにされるべき問題である。ここではこれらの土器群が、天王山式を生む母胎となった宇津ノ台式系統とは異なる系統上に位置づけられるものということを、重ねて強調しておきたい。

以上まとめると、十三塚遺跡では弥生前期～中期末（後期初頭）に渡る土器が出土していることを示した。資料数が少ないが、十三塚Ⅰ遺跡は主に中期の土器群がまとまることが分かる。しかも従来の宇津ノ台・手取清水両遺跡とも様相が異なるようであり、当該地域在地の土器型式の一端を示しているようだ。Ⅱで触れたように、弥生時代の横手盆地には幾つかの遺跡群が分散して存在しており、土器群の内容から見てもそれぞれが若干内容を違えている。各時期を画するメルクマールを、よその地域の土器ではなく在地の土器の中に求める努力が、今後必要となってこよう。

（根岸）

Ⅶ　まとめ

従来、秋田県内の弥生土器研究においては、幾つかの別型式土器の要素が混在する様相が強調されるあまり、在来の伝統から生まれる土器のイメージが掴みにくかったように思う。日本海沿岸地域の例で言えば、地蔵田Ｂ遺跡に特徴的な弥生前期の遠賀川系土器（壺・甕）が、どのような変化によって中期・後期の土器へと繋がるのか、説明がされてこなかったのが一つの現れである。

しかし近年、日本海沿岸東北自動車道建設に伴い、弥生前期～中期の良好な資料が幾つか見つかってきており（高橋ほか2001・村上2003など）、また筆者が資料報告する志藤沢遺跡の内容が公表される[註8]ため、日本海側における弥生時代前期～中期の様相はかなり明確になってくることが期待される。県南部はまだまだ資料不足の観が否めないが、本稿において後期の標識遺跡でもある十三塚遺跡が弥生前期～後期に渡る時期幅をもつことを示した意義は小さくないと考える。今後、小地域内で土器編年作業を積み重ねることで、在地の土器型式の内容を明らかにしていく必要がある。宇津ノ台式を新潟方面の土器型式（山草荷式）と同一視する見方（石川2004）もあり、それとは異なる様相をもつ十三塚遺跡出土土器が示唆する内容は、今後大きくなってくるであろう。

（根岸）

Ⅷ　あとがき

今回の報告の契機となった冨樫泰時氏及び高橋学氏、有益なご教示を頂いた村上義直・利部修・石川日出志・品川欣也氏に感謝申し上げたい。

（島田・根岸）

註

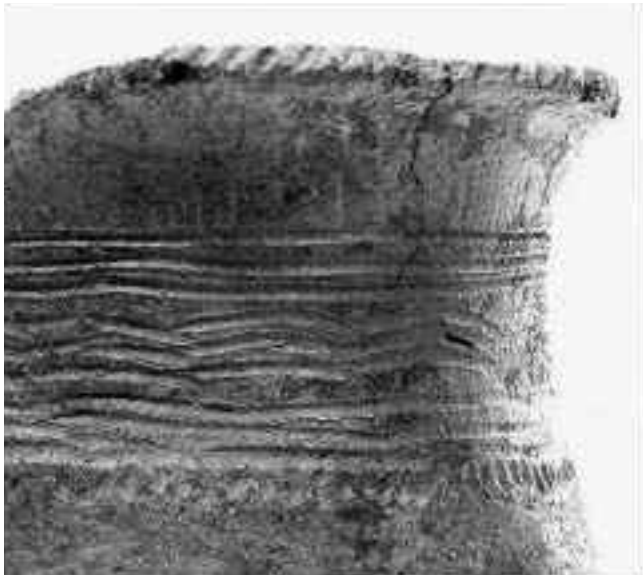
1. 今回報告する十三遺跡の実測図・拓本は根岸が行った。図版は島田と根岸がAdobe社Illustrator10.0及びPhotoshop7.0を利用し作成した。これらの編集を島田が行った。
2. 以下で用いる弥生中期の区分は、およそ須藤1998の編年観に拠っている。ただし広域編年上、筆者は須藤氏の弥生前期後半（2a・b）を中期前葉とする立場に立っている。なお手取清水遺跡の報文において、2群が山王Ⅲ式、3群が寺下囲式、4群が宇津ノ台Ⅰ群、5群が宇津ノ台Ⅱ群と比較できるとされている。主に磨消縄文手法・文様構成を根拠にした分類であるが、弥生中期前葉・中葉の土器型式が横手盆地にないことも如実に示している。
3. 宮崎進「秋田の十三塚考」『出羽路15号』秋田県文化財保護協会1962。神奈川大学日本常民文化研究所『神奈川大学日本常民文化研究所調査報告 第10集 十三塚』平凡社1985。十三塚という地名は、ここのみならず全国的に見られ、宮城県には同じ弥生遺跡である十三塚がある。十三塚そのものについては、『秋田県の考古学』で羽後町十三本塚の調査の記録がある。10号塚の出土遺物は、宋銭13枚、人骨細片、経石477個であったことから鎌倉時代の火葬墓と推察している。昭和37年頃に発掘した結果、祝部土器が出土したとする（島田1980）。
4. 十三塚遺跡の弥生土器片は、元雄物川郷土資料館長島田亮三氏採集のもので、全てに出土地・年月（日）・島亮の注記が書かれている。
5. 採集当時のものとして、「高坏台部（小）の中に残されている土中より、籾殻と思われるものが発見された」という記述がある（島田1980）。
6. なお柄内遺跡では、9～11と異質な胎土・焼成の台付鉢が出土している（12）。明褐灰色の胎土で橙褐色の火色が付着し器壁が薄く土師質に近いが、沈線が引かれる点が特徴的である。十三塚遺跡含め周辺遺跡には類例がなく、弥生時代でもかなり新しい時期に入ってくる事が予想される。類例の増加を待ちたい。
7. 須藤（1998）は岩井堂洞穴例を中期後半に位置づけている。
8. 『秋田考古学』第49号　秋田考古学協会（2005年10月刊行予定）に掲載予定である。

参考・引用文献

秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（県南版）』1987
石川日出志「関東・東北地方の土器」『考古資料大観』第1巻　2003
石川日出志編「関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年」『科研費報告会基盤研究（B）（2）』
地底の森ミュージアム2004
石川日出志「弥生後期天王山式土器成立期における地域間関係」『駿台史学』2004
伊東信雄「東北北部の弥生式土器」『文化』1960
伊東信雄・伊藤玄三「崎山囲洞穴調査概報」『宮城県文化財調査報告書』8　1965
大和久震平・奈良修介『秋田県史 考古編』秋田県1960
大和久震平『手取清水遺跡発掘調査報告書』横手市教育委員会1974
雄物川町教育委員会『秋田県遺跡カード』（雄物川町）1986
児玉準『平鹿遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第101集 秋田県教育委員会1983
児玉準「秋田県における弥生式土器の編年研究の現状と課題」『東北地方の弥生式土器の編年について』1988
小西秀典『星宮遺跡』仙北町文化財調査報告書第3集　仙北町教育委員会1999
島田祐悦『水尻遺跡・柄内遺跡』雄物川町文化財調査報告書第8集 雄物川町教育委員会2005
島田祐悦「十三塚遺跡」『遺跡詳細分布調査報告書』雄物川町文化財調査報告書第4集 雄物川町教育委員会2003
島田亮三「1章 原始の生活 3節 弥生時代」『雄物川町郷土史』雄物川町役場1980
須藤隆「青森県大畑町二枚橋遺跡出土の土器・石器について」『考古学雑誌』1970a
須藤隆「秋田県大曲市宇津ノ台遺跡の弥生式土器について」『文化』1970b
須藤隆「東北地方の初期弥生土器－山王Ⅲ層式土器－」『考古学雑誌』1983
須藤隆「第9章 東北地方における弥生時代農耕社会の成立と展開」『東北日本先史時代 文化変容・社会変動の研究』1998

高橋義介「火行塚遺跡」『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第23集 岩手県埋蔵文化財センター1981
高橋忠彦他「小出Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅷ』秋田県文化財調査報告書第206集　秋田県教育委員会1991
高橋学『和田遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第212集　秋田県教育委員会1991
高橋学他『井戸尻台Ⅰ遺跡』秋田県文化財調査報告書第313集 秋田県教育委員会2001
橘善光「弥生土器－東北 北東北3-」『月刊考古学ジャーナル』№166　ニュー・サイエンス社1979
冨樫泰時「第2章 弥生時代の遺跡」『平鹿町史』平鹿町1984
冨樫泰時他『図説　秋田県の歴史』河出書房新社1987
冨樫泰時「第1章 原始古代 第4節 弥生時代と南外村」『南外村史』南外村2003
冨樫泰時「横手盆地の遺跡が語るもの　弥生時代・古墳時代の遺跡」『横手の遺跡と考古学』横手市史編さん連続談話会レジュメ2004
冨樫泰時「第3章 稲の伝播と秋田」『秋田市史第1巻 先史・古代通史編』秋田市2004
鳥畑寿夫「岩手県西磐井郡谷起島遺跡出土土器について」『上代文化』25 1955
中村五郎「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』東北考古学会編1976
長山幹丸「協和町船岡字庄内岩屋山洞穴遺跡発掘について」1969
奈良修介・山下孫継・冨樫泰時「雄勝郡雄勝町岩井堂洞穴遺跡発掘調査略報」『考古学雑誌』1963
奈良修介・豊島昂『秋田県の考古学』吉川弘文館1969
船木義勝他「手取清水遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅴ』秋田県文化財調査報告書第190集 秋田県教育委員会1990
武藤祐浩「上猪岡遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅹ』秋田県文化財調査報告書第208集 秋田県教育委員会1991
村上義直『越雄遺跡』秋田県文化財調査報告書第357集 秋田県教育委員会2003
谷地薫『五百刈田遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第194集　秋田県教育委員会1990
山下孫継『岩井堂岩陰遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第16集 秋田県教育委員会・雄勝町教育委員会1969
山田貞吉他『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集 秋田県教育委員会1981

16：文様帯接写



22：文様帯接写

23：文様帯接写

（番号は挿図番号に対応、縮尺不同）

写真１　十三塚遺跡出土の弥生土器

鷹巣町胡桃館遺跡出土の木簡

山本　崇*1・高橋　学*2

はじめに

秋田県北秋田郡鷹巣町(1)に所在する胡桃館遺跡は、古代の埋没建物跡等がシラス層下から検出されたことで知られる。遺跡は、1961年に町立鷹巣中学校敷地内で進められていた運動場造成工事の際に遺物（須恵器・土師器）が出土したことを発見の端緒とし、その後、1963・65年には掘立柱列〔Ａ１柱列〕、柵列〔Ａ２柵列〕や建物〔Ｃ建物〕の一部である土居材が検出され(2)、1967年から３カ年に亘って発掘調査が実施された(3)。

シラス層下で検出された建物内及び周辺部からは、多くの遺物が出土し(4)、その中には、『第３次報告書』によると２点の木簡が報告されている。これらは、木簡研究黎明期の出土事例であり、長らく日本最北の古代木簡でもあった(5)。ただ、報告書に木簡の釈文が掲載されなかったため、木簡出土遺跡としての胡桃館遺跡は、埋没建物跡に比べてさほど知られていた訳ではなかった(6)。

小稿は今回、下記のような経緯を経て、出土木簡を実見・観察する機会を与えられたことから、２点の木簡の釈文と観察知見を紹介するものである(7)。

１　遺跡の概要

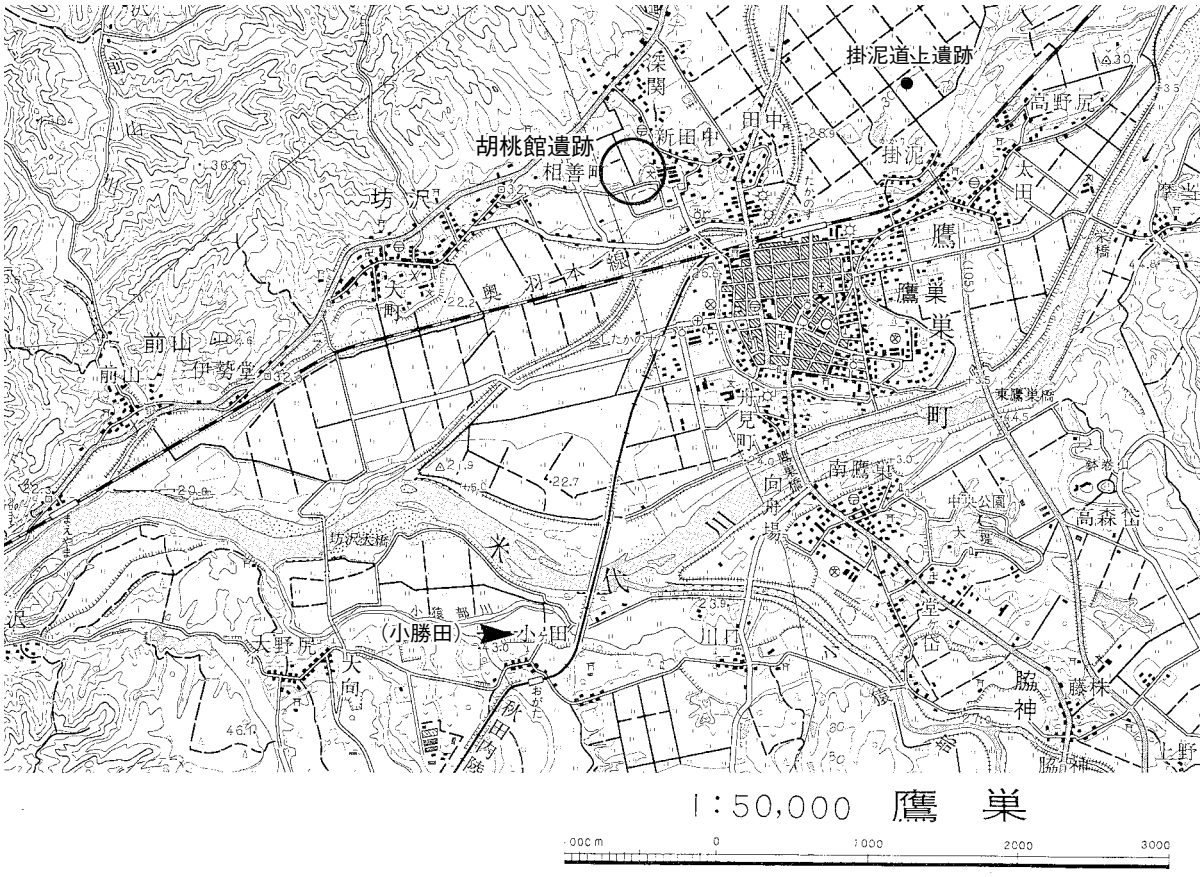
遺跡は、ＪＲ奥羽本線鷹ノ巣駅の西北西約１㎞、鷹巣町綴子（つづれこ）字胡桃館、坊沢字上野に所在し、西流する米代川の北約２Km、標高28ｍ前後の沖積地に立地する（第１図）。

発掘調査の結果、弧状をなす柵列〔Ａ２柵列〕の内側（北）から建物跡が４棟検出された（第２図）。４棟〔Ｃ・Ｂ１・Ｂ２・Ｂ３建物〕は、いずれもシラス層下にある同一の黒色土面に建てられていることから、同時存在である(8)。建物部材はいずれも南東の方向にやや傾いてることから、北西方向から押し寄せたシラスにより埋没したことを物語る。堆積したシラスの厚さは２ｍにも達する。

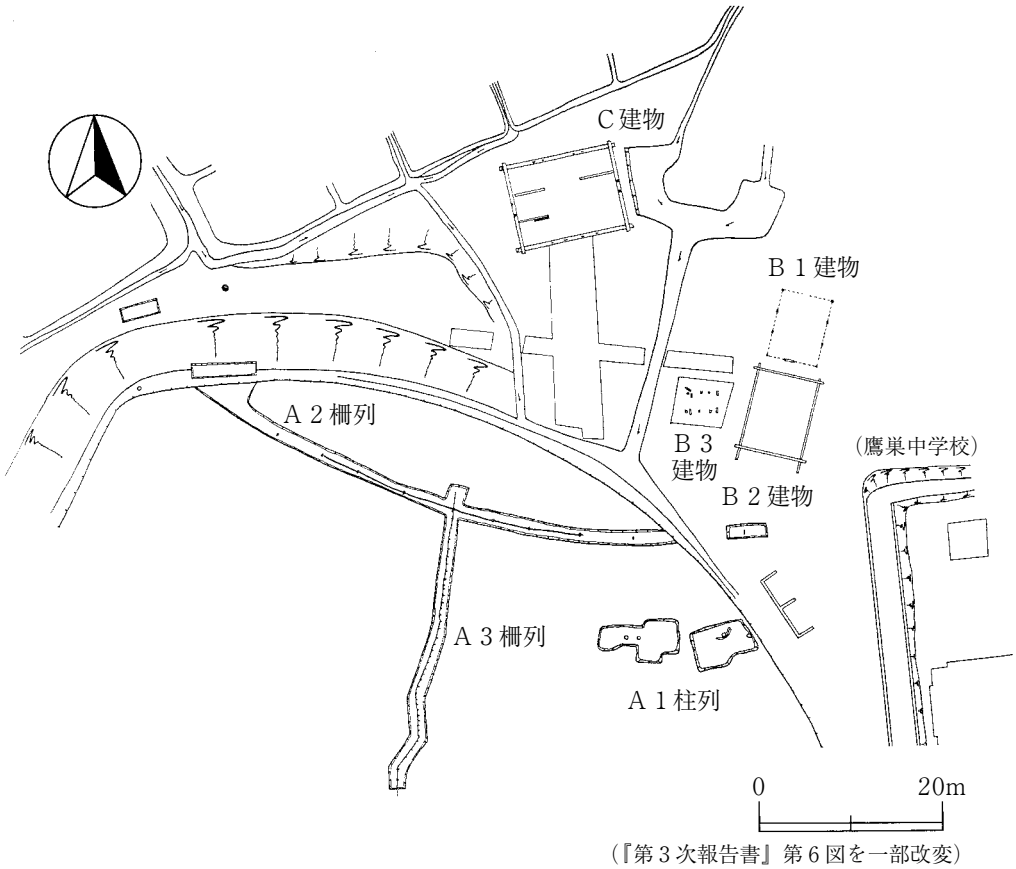
ところで建物等を覆っていたシラス層とは、近年の研究により、西暦915年に発生した十和田火山噴火(9)に伴う毛馬内（けまない）火砕流堆積物(10)を母材とするラハール堆積層（火山泥流や火山洪水など火山噴火による二次堆積物の総称）である、と地形・地質学的には解析されている(11)。

同堆積層により埋没したと推測される家屋は、米代川中～上流域で散見される。それは江戸時代以来報告が認められ、胡桃館例を含め８遺跡が知られる(12)（第３図）。このうち、胡桃館から見て南南西約３㎞の米代川を隔てた小勝田（おがた）（鷹巣町脇神字小ケ田）では、1817年（文化14年）に埋没家屋が現れ、菅江真澄(13)、平田篤胤(14)らが図絵を残している（第５図）。真澄の写実的な図絵は、実見して描いたものではないが、ここでは胡桃館とは異なる竪穴式の建物であることに着目しておきたい(15)。

＊1 奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部史料調査室研究員　＊2 秋田県教育庁払田柵跡調査事務所学芸主事兼調査班長

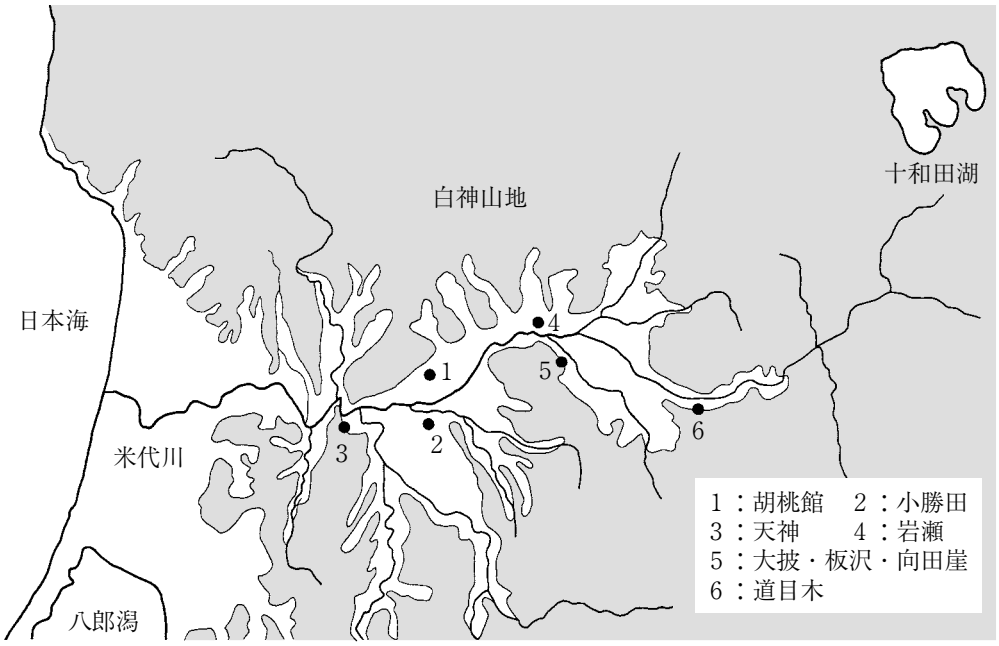


第１図　遺跡の位置

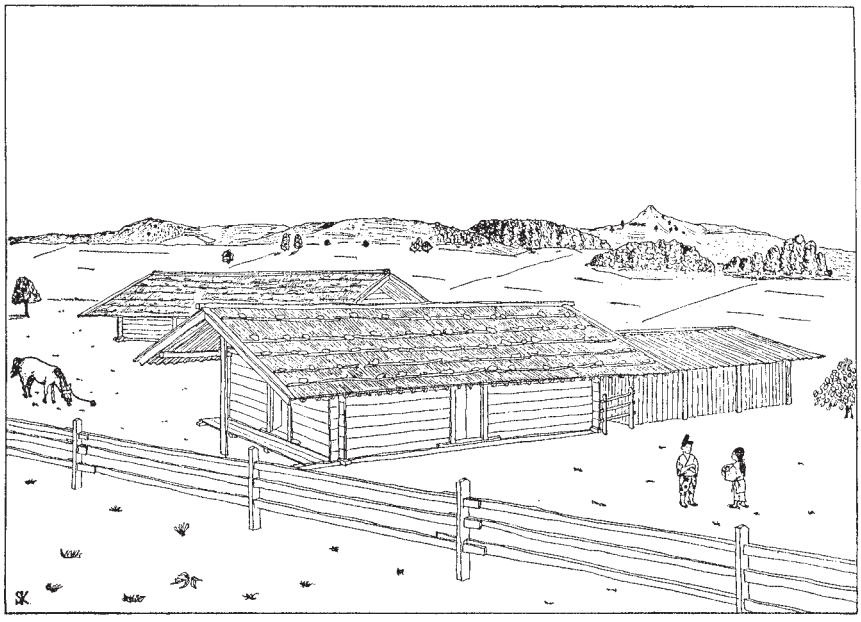


(『第３次報告書』第６図を一部改変)

第２図　遺跡遺構配置図

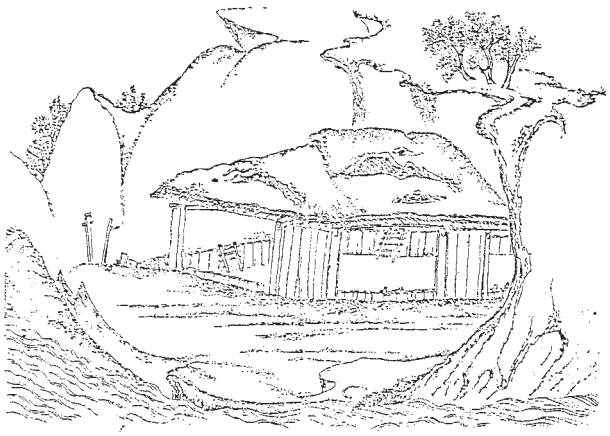


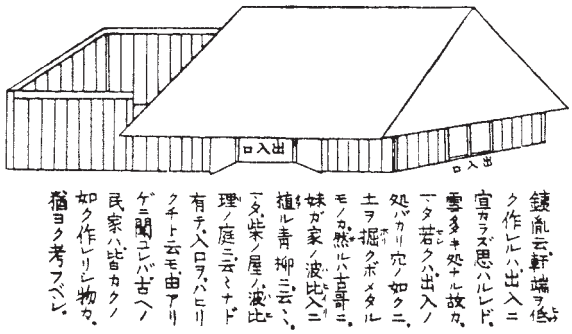
第３図　米代川流域の埋没家屋遺跡



復元図は遺跡を南東方向から鳥瞰したもの。柵（Ａ２）越しに２棟並ぶのがＢ１・Ｂ２建物、奥に見えるのがＣ建物。（奈良国立文化財研究所　細見啓三氏が第２次調査終了後に描いた図。『第３次報告書』表紙より）

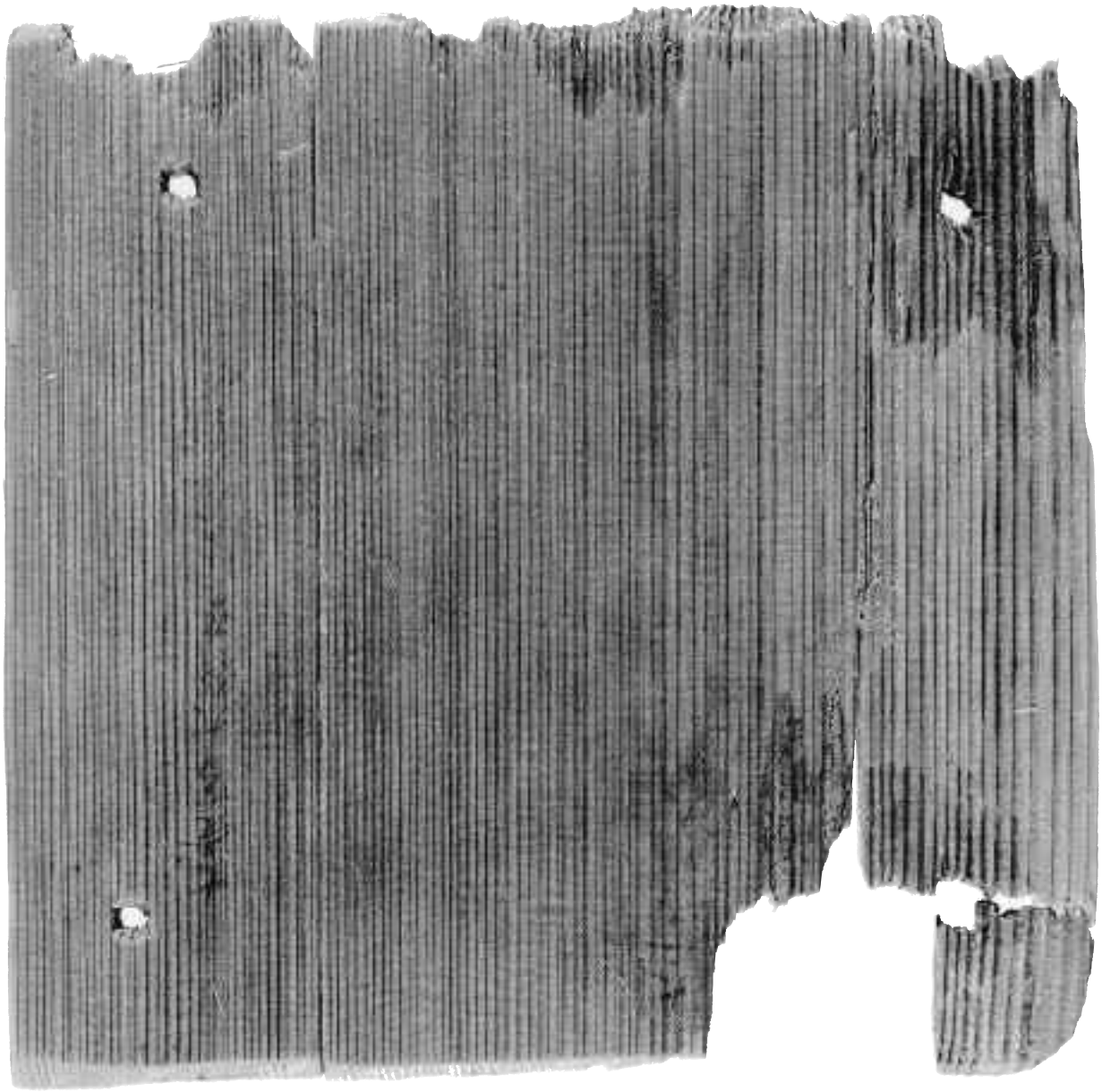
第４図　胡桃館遺跡の建物復元想定図





左：菅江真澄が描いた埋没家屋図
右：平田篤胤が岡見知康の実見録を基に描いた埋没家屋図

第５図　小勝田の埋没家屋



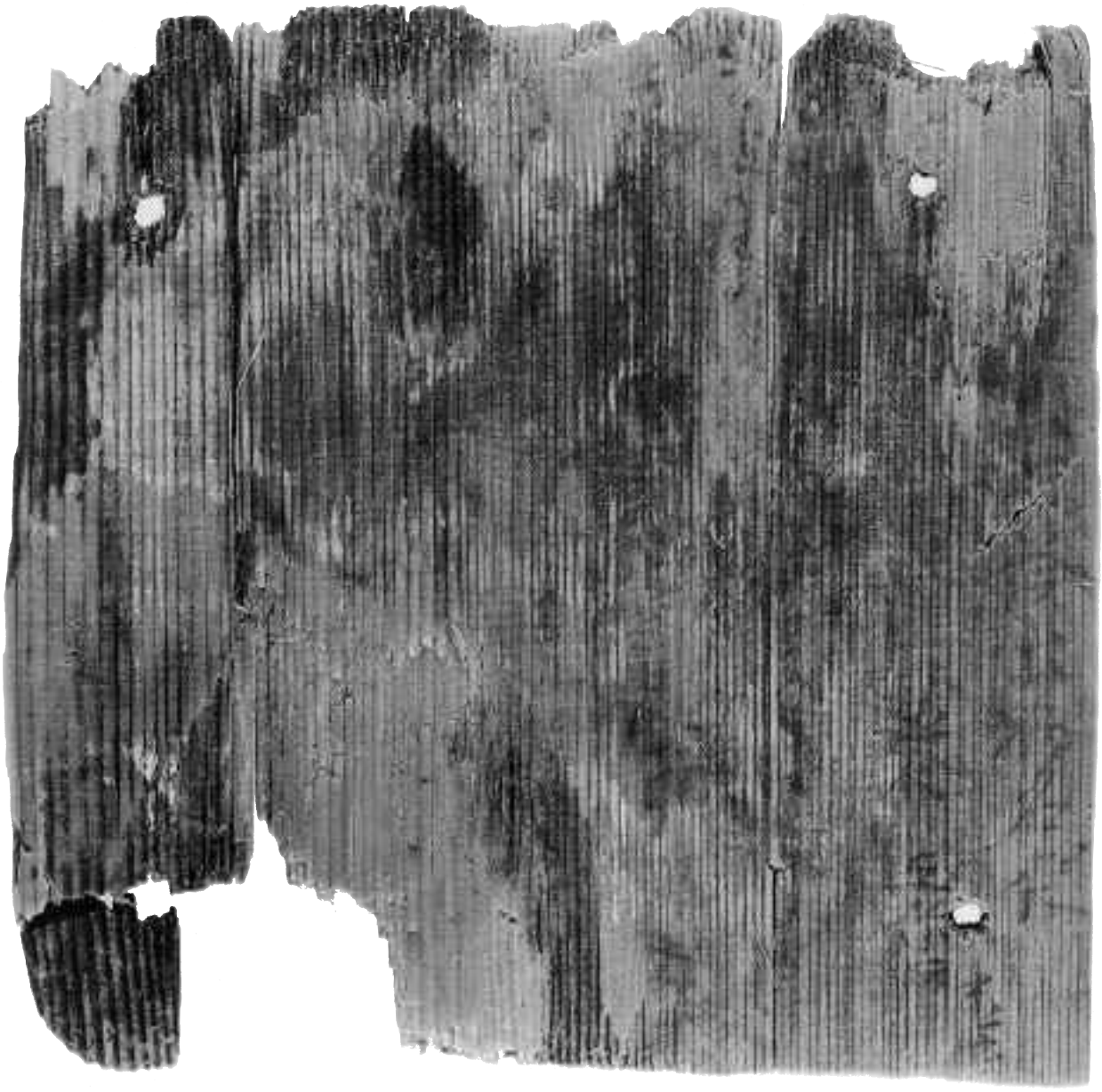
第６図　木簡１（1968年撮影）裏面／同表面

２　木簡の釈文と内容

（１）釈読に至る経緯

胡桃館遺跡から出土した木簡は、現在までに３点確認されている。今回報告する木簡は、そのうちの２点で、ともに調査後に刊行された報告書に報じられているものである(16)。まず、木簡にかかわるこれまでの知見を、整理確認しておく。

木簡１は、1967年の第１次調査Ｃ地区建物から出土した木札である（第６図～第８図）。『第１次概報』によると、墨書はあるものの「字型ならびに内容は不明」とされ、実測図のほか、「墨書のある木器」として、墨痕が顕著に認められた部分について、表裏両面の赤外線写真が掲載されている(17)。掲載された写真をみれば墨書があることは容易に確認できるが、写真が木札のどの部分にあたるのかは



釈文

(1)

・「

×月□□〔料給カ〕出物名張

o 〔玉作カ〕□□□□〔米カ〕□□五合 玉作麻呂 o 米一升

□□□□□□□□□□□□本□

□升□□〔建マカ〕礼主米□合十□〔三カ〕□□□□

□□米一升□□□□

□□

o o 」

・「

o o

□□□□□□□□□□大

o 〔大カ〕□□□□□□□□□

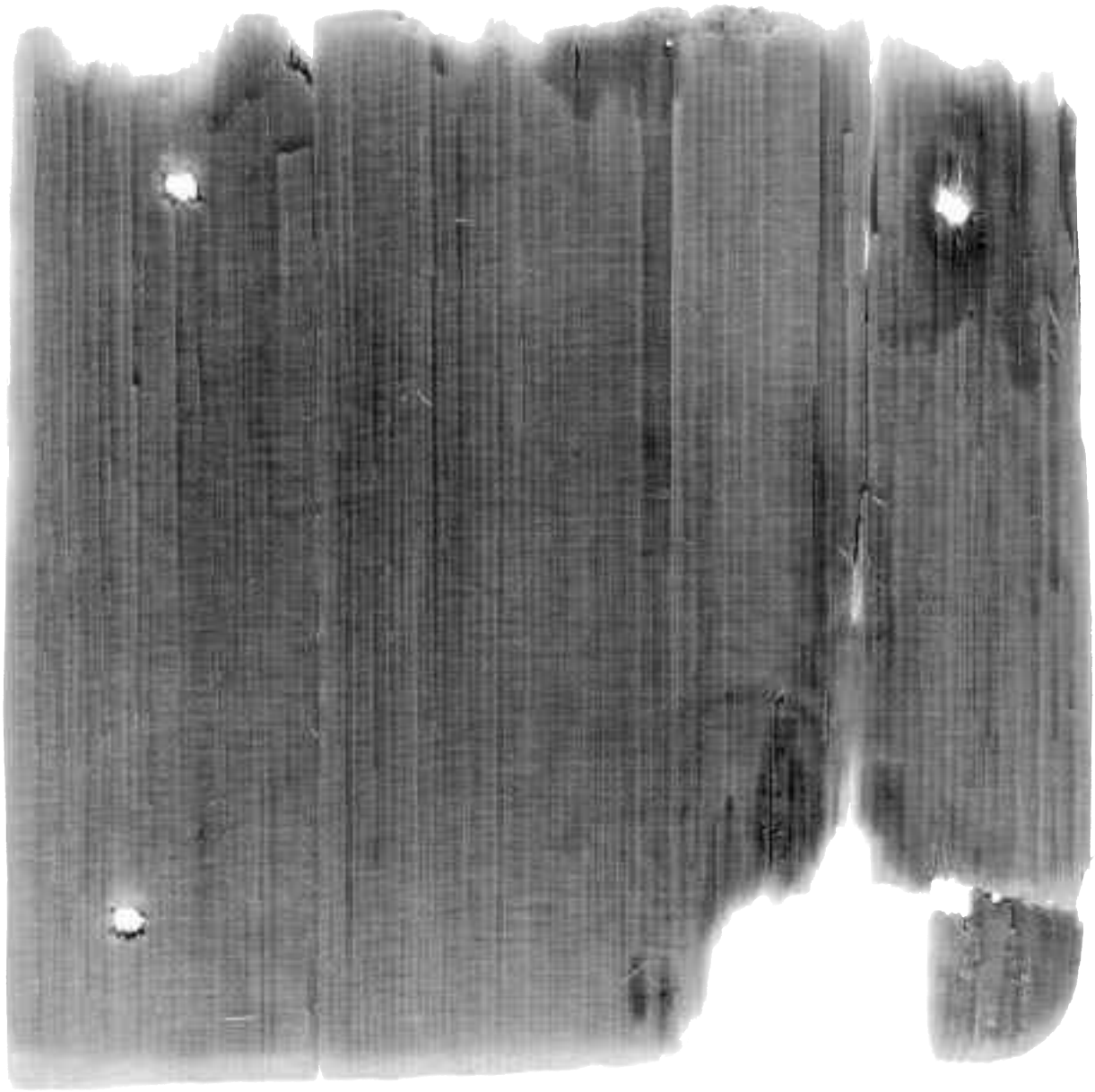
o 」

224×226×11 065

(2)

「建□〔建カ〕□

(247)×(17)×5 081

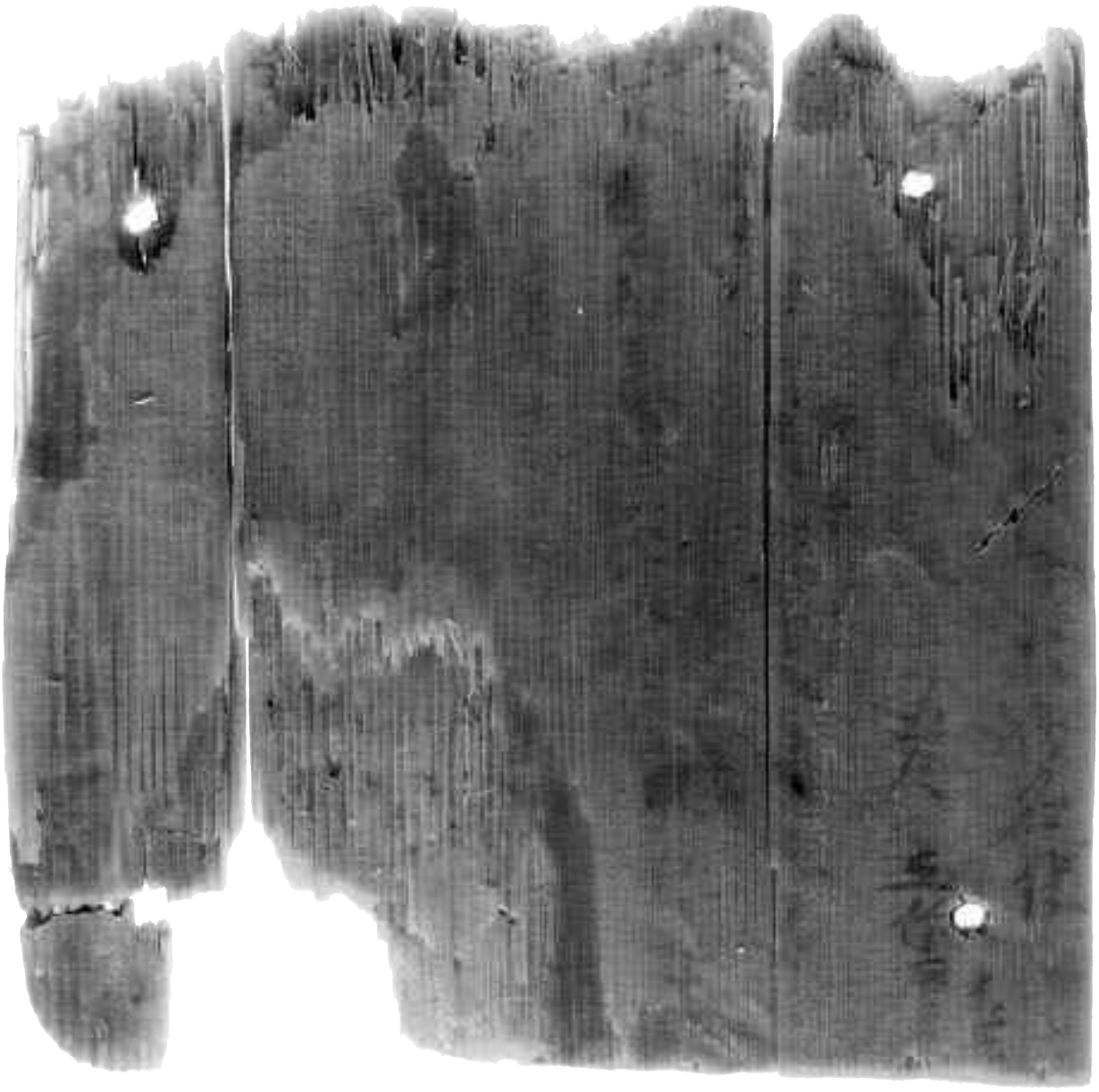


第７図　木簡１赤外線デジタル写真（2004 年撮影）裏面／同表面

判然とせず、文字の釈読も困難である。木簡２は、第２次調査Ｃ建物内から出土した木製品であるが（第９図）、『第２次概報』には墨書にかかわる記述は認められない。「Ｃ建物内出土木製品」として掲載されている写真を注意深くみれば、墨書は明瞭で文字も読めそうだが、予見なくこれが木簡だと気付くことはこれまた困難と思われる(18)。『第３次報告書』では、遺跡の発見以降３次に及ぶ発掘調査の総括として遺物の性格が検討される中で、「木簡」としての木札の形態的な特異性が、当時知られていた全国出土木簡との比較から論じられている(19)。

報告書刊行後の成果としては、冨樫泰時氏が木簡２の釈読案を提示されているほか(20)、1994年に行なわれた秋田県立博物館の企画展に際して、船木義勝氏がＢ２建物西面南扉の墨書を新たに確認され、経典読誦にかかわると推測される釈文を公表された(21)。後述するように、この木簡（扉板）の記載内容が、胡桃館遺跡の性格を考える手がかりとして注目されることとなった。

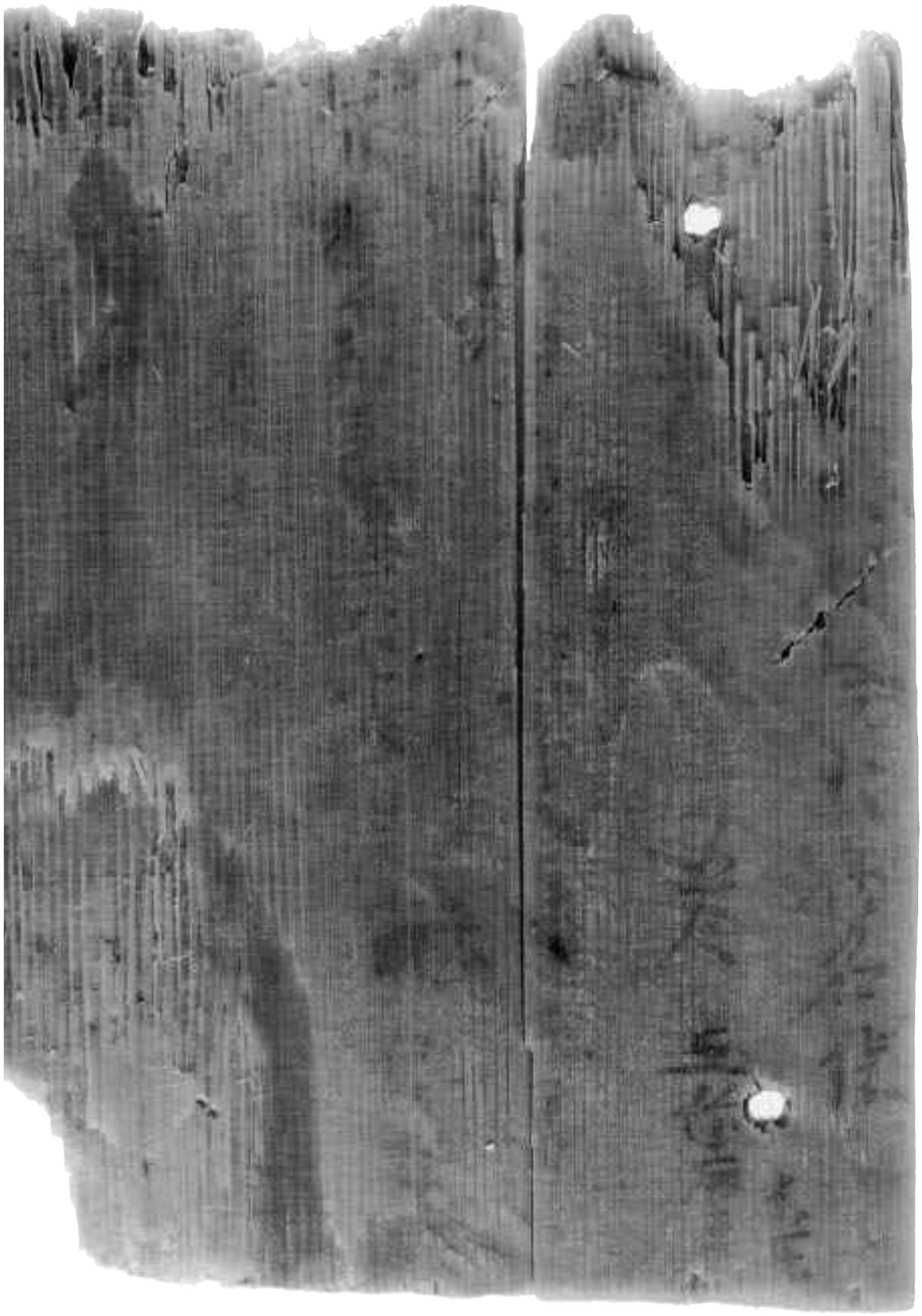
胡桃館遺跡から木簡が出土している事実は、2002年に着手した、過去100年間に及ぶ全国の木簡出



土情報を蒐集整理する作業の中で知るところとなった(22)。この途上、墨書扉板が鷹巣町で展示されているとの情報が、吉川真司氏から寄せられていた。そこで、釈文の検討を主たる目的とした出土遺物の熟覧調査を、2003年秋、鷹巣町教育委員会のご協力のもと実施することができた(23)。

この段階には、山本は木簡の所在に気づいていなかったが、翌2004年の夏、出土後まもない1968年に撮影された胡桃館遺跡出土遺物の写真台紙とガラス乾板が所蔵されていることを知り、長らく奈文研に保管されていた胡桃館遺跡出土木簡を再調査する機会を得た。その結果、釈読可能な文字が多数遺されていることを確認したのである。

以上のような経緯により、胡桃館木簡は、出土から37年をへだてて釈読された。釈読が今可能となった要因は、赤外線テレビカメラ装置や赤外線デジタル撮影など、木簡の釈読に用いる機器が進歩したこととともに、より根本的な理由として、比較検討を行なう素材としての木簡の類例が格段に増えたことが指摘できる。1960年代末の段階には、胡桃館木簡のような特異な形状をもつ木簡は、ほとんど



第８図　木簡１赤外線デジタル写真（原寸・表面部分）

知られていなかった。2004年末現在で、全国出土木簡の総数は32万点以上、古代木簡に限っても23万点を超え、その出土点数は当時の10倍以上に及んでいる(24)。木簡の出土点数が飛躍的に増加した現在では、文書や荷札に限られない、豊かな木簡利用の実態が明らかにされつつあり、胡桃館遺跡出土木簡の理解も、これらを基礎に進めることができたのである。今回の成果は、数十年に及ぶ調査研究の蓄積と木簡釈読技術の進歩に支えられたものであると概括することができる。

（2）釈文と内容

木簡の釈文は別掲の通りである。以下、現段階で判明する、木簡の内容と観察知見を紹介する(25)。

【木簡1（木札）】

木簡1（木札）は、表裏両面に文字が記される。調査段階に指摘された通り傷みが著しく、肉眼で墨痕を確認することは困難である。現状では比較的大きな4断片に分かれているが、4断片は接続し概ね原形を復元することができる(26)。どちらの面を一次利用とすべきか判然としないので、仮に、釈読できた文字の多い面を表面として紹介する。

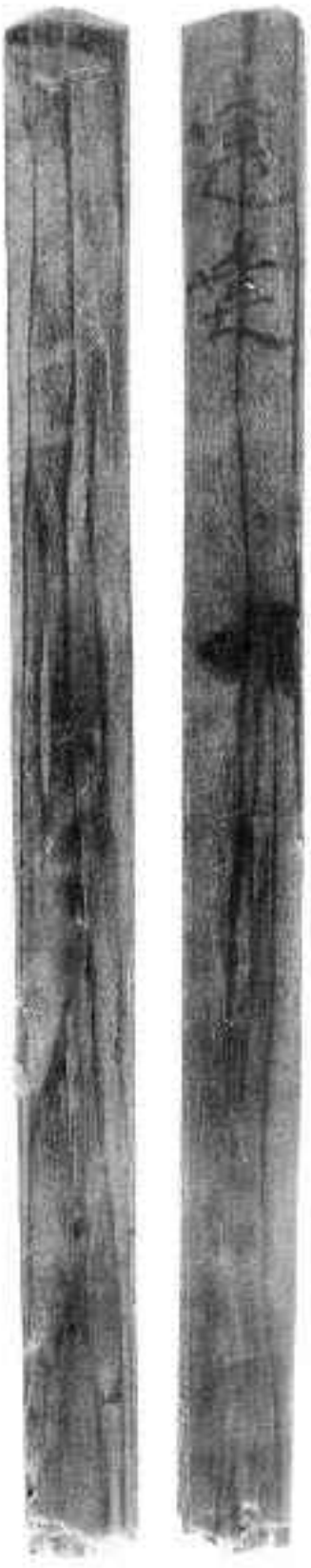
表面は、「某年某月料米支給帳」と称さるべき帳簿と推測される。1行目は「月□□〔料給ヵ〕出物名張（帳）」と釈読できるが、現状では米以外の物品名は認められない。記載内容は、某月に「米」を支給した際の米の量と被支給者を記したもので、人名＋「米」＋米の量の記載が、1行あたり2～3人分以上、少なくとも5行以上記されている。

確認できた人名は、「玉作麻呂」、「玉作□□」、「□□〔建マヵ〕礼主」。このうち、「玉作」姓の人物は、9世紀後半頃の出羽国にかかわるものとして、「俘魁玉作宇奈麿」「玉作正月麿」が知られ、出土木簡からも同姓が確認された点は注目される。後者の「正月麿（正月丸）」は、元慶の乱に際して俘囚を率いて賊を夜襲し、その功により外従五位下に叙せられた人物として知られる(27)。

確認される米の支給量は、「□〔三ヵ〕合」、「五合（以上）」、「一升」である。一カ月の支給料とするならば、一人あたりの量はやや少ないとの感も否めない。未釈読部分に日付などの記載があるとするならば、これらの数量は、日ごとの支給量かもしれない。なお、1行目の「料」の字体は異体字の「斜」で、「張」は「帳」と通用する。

裏面の文字は、表面と天地逆向きに記されている。墨の遺りは悪く、赤外線テレビカメラ装置などを用いてもほとんどみえない。1968年の写真から文字数を推測した。1行目1文字目は「大」の可能性が高く、4文字目もあるいは同じ文字である可能性がある。

木簡1の形状は、一部欠損するものの、四隅に穿孔をもつ1辺約220㎜のほぼ正方形を呈している。下端部及び左右の両側面は削りが明瞭である。文字との関係からみても、表面1行目の墨書は帳簿の最初の行として矛盾はなく、右側面は原形を保つと判断される。2行目の「玉作麻呂米一升」は、「玉作麻呂」まで書いた後、余白が乏しいため行を右下に寄せ、さらに孔を避けてやや下方に「米一升」を記したようにみえる。この理解が正しいとするならば、下端部は原形を保っており、表裏面のいずれが一次利用されたものかは不詳ながらも、少なくとも表とした面の墨書以前に孔が穿たれていたと判断される。一方、表面の上部と左下部では剥離により墨痕が確認できないため、上端部と左側面の原形は不詳とせざるを得ない。ただ、右側面と左側面の整形は酷似すること、一部に削り痕跡が残存する上端部と下端部の整形もこれまた非常に似ていること、ほぼ正方形で四隅の孔の位置も似通ってい



第９図　木簡２
裏面／表面
（1968 年撮影）

ることなどは、欠損箇所はあるものの四周がともに原形を保つ可能性を示唆するものといえる(28)。

なお、木簡１は年輪年代法による年代測定を実施しており、得られた年輪年代は西暦 853 年である。ただし、試料は心材型で、辺材部（白太）は遺っていないため、この年代は伐採年代を示すものではない(29)。

【木簡２】

木簡２の形状は、上端部削り、下端部折れ、左右側面は割れである。木簡１に比べて状態はよく、肉眼でも明瞭に墨書を確認することができる。２文字目は一見「違」に似るが、「違」では筆画が足りない。冨樫泰時氏が指摘される通り、２文字とも「建」字が記されている可能性は高いと判断する。３文字目は、文字か否か不詳。真ん中部分は木目に沿って墨が消えている。裏面の上端には墨塗りが認められる。木簡の用途は不詳である。習書の可能性は残る。

３　まとめ

従来の研究では、胡桃館遺跡の性格は不詳とされてきた。その要因は、半世紀余り降った10世紀後半以降には、米代川流域以北には高地性・防御性集落の展開が確認されるのに対して、９世紀後半から10世紀初頭頃の胡桃館遺跡の時代には、概して同時代の集落遺跡に乏しく、比較検討の素材に恵まれなかったことにある(30)。かつて遺跡発見当初には豪族居館説も提唱されたが(31)、報告書が指摘する胡桃館遺跡＝官衙関連施設説は、今なお最も蓋然性の高い理解として評価される。一方で、船木氏が紹介された経典読誦にかかわる木簡（扉板）や「寺」と記した墨書土器によるならば、遺跡＝寺院関連施設説も一つの候補となろう。ただ、遺跡の範囲が確定していない現段階においては、官衙か寺院かという二者択一の議論はさほど生産的ではあるまい(32)。限られた情報のもとで推測を重ねるのではなく、遺跡の性格解明は、今後の調査に委ねたいと思う(33)。

翻って鑑みるに、胡桃館遺跡は、古代埋没建物の希有な事例として、全国的に注目を集めてきた遺跡である。この点とかかわり、木簡１（木板）が建物の何処に打ち付けられ、どのように用いられたものかは興味深い問題といえる。しかれば、何よりも優先さるべき課題は、現在収蔵庫に保管されている出土部材の悉皆調査であろうし、それにもとづく建物構造の再検討は、遺跡の性格解明や古代建

築研究の上でも、資するところは計り知れないと思われる。加えて、米代川流域の自然環境や地形、歴史的性格の検討も欠かせない。これらの巨視的・総合的な調査研究の進展と相俟って、木簡の理解は深化していくものと予想される。いずれも今後の課題とせざるを得ないが、今回の木簡の釈読を契機として、胡桃館遺跡があらためて注目を集め、様々な分野の研究が進展することを切に願っている。

執筆にあたっては、木簡釈読にかんする事項を山本が、その他については高橋が整理し、両者で協議・討論の上、「はじめに」及び「1　遺跡の概要」を高橋が、「2　木簡の釈文の内容」以下を山本が、分担して執筆したものである。

なお、小稿がなるにあたり、胡桃館遺跡の調査を担当された冨樫泰時氏と県文化財保護室の船木義勝氏には、幾度となくご指導をいただいた。また、鷹巣町教育委員会及び同文化・遺跡係の榎本剛治氏には資料調査でお世話になり、京都大学大学院文学研究科の吉川真司氏、青森県文化観光部文化振興課県史編さんグループの古川淳一氏をはじめ、奈良文化財研究所の市大樹・井上和人・岡村道雄・島田敏男・神野恵・竹内亮・次山淳・豊島直博・中村一郎・馬場基・光谷拓実・渡辺晃宏の各氏からは、貴重なご助言をいただいた。末筆ながら、篤くお礼を申し上げる次第である。

註

（1）　鷹巣町は2005年3月22日、北秋田郡内の合川町、森吉町、阿仁町と合併し、「北秋田市」として発足した。

（2）　豊島　昂1963「北秋田郡鷹巣町立鷹巣中学校グランド発見遺跡」『秋田考古学』第23号　秋田考古学協会

（3）　①秋田県教育委員会1968『胡桃館埋没建物発掘調査概報』、②秋田県教育委員会1969『胡桃館埋没建物遺跡第2次発掘調査概報』、③秋田県教育委員会1970『胡桃館埋没建物遺跡第3次発掘調査報告書』、以下本文では①を『第1次概報』、②を『第2次概報』、③を『第3次報告書』と称する。

なお遺跡の概要は、細見啓三1969「胡桃館埋没建物の調査」『奈良国立文化財研究所年報1969』にも略述されている。

（4）　本遺跡出土の遺物は、1980年12月11日付けで「胡桃館遺跡建築遺材及び出土遺物」として秋田県指定有形文化財（考古資料）に登録された。

（5）　2003年に青森県新田（1）遺跡で古代木簡が出土したため、現在は「最北の古代木簡」ではない。

木村淳一2004「青森・新田（1）遺跡」『木簡研究』第26号　参照。

（6）　全国の木簡出土遺跡の一覧を記した、奈良国立文化財研究所1976『第1回木簡研究集会記録』、寺崎保広1988「木簡出土遺跡一覧」『木簡研究』第10号や、1970年代までの東北地方出土木簡を整理した平川南1979「東北地方出土の木簡」『木簡研究』創刊号でも、胡桃館遺跡はその対象とされていない。

（7）　胡桃館遺跡出土木簡再調査の概要は、榎本剛治・山本　崇2005「特集『胡桃館遺跡』37年目の大発見！」『広報たかのす』平成17年弥生（通巻1028号）で公表するとともに、2005年3月1日、鷹巣町教育委員会により「鷹巣町胡桃館遺跡出土木簡の解読について」として記者発表が行なわれた。

（8）　4棟の建物跡の概要は、次のとおり。

C建物は、桁行11.8ｍ×梁行9ｍの東西棟の礎石建物跡。礎石（玉石）の上に土居が乗せられ、床は板張り。壁は板校倉で組み上げられ、扉は南面に3口、北面に2口、東西面に各1口の計7口あり、全て外に開く観音扉である。扉の寸法などから南面中央が正面出入口と考えられる。

B1建物は、桁行7.3ｍ×梁行5.5ｍの南北棟の掘立柱建物跡。柱間は桁行3間（8尺等間）、梁行2間（9尺等間）で、四隅の柱は径17㎝程の多面取りの丸柱である。柱間には幅20㎝、厚さ2㎝の板を立て並べ、地面に突き刺す（突きつけ）構造を採っていた。南面中央には両開きの戸が設けられる。床面には板張りの痕跡はなく、全て土間と考えられる。土間の南東隅近くには小角材を馬蹄形に立て巡らせた炉跡が見られる。また焼土や炭の分布も確認され、北東隅部では籾殻が1.5㎝の厚さで堆積していた。

Ｂ２建物は、Ｂ１建物と近接し、同一軸線をとる桁行8.8ｍ×梁行6.7ｍの南北棟の井篭板壁（平地式）建物跡。地面に土居を据え、その上に幅25cm（厚さ５cm）の板を井篭状に組み上げて板壁（校倉）としている。北面を除く３面には内開きの戸がある。1994年に至り、このうち西面南扉の内側に墨書が遺されていたことが判明した（船木義勝1994「板扉の墨書文字」『秋田県立博物館　博物館ニュース』第97号）。床は板張りのようだが、南西部の一角のみ土間とし、ここにＢ１建物と同類の炉が作られる。Ｂ１・Ｂ２建物とも遺存状態がよく、最高で地表から1.6ｍの高さで部材が残り、Ｂ２建物は板壁が４段分残っていた。

Ｂ３建物は、Ｂ２建物の西に位置し、桁行3.1ｍ×梁行1.9ｍの東西棟の高床式建物跡。北西の隅柱に接して長さ1.3ｍ（幅13cm）、足掛りの段を２段残す梯子も検出された。

（９）　早川由紀夫1997「十和田湖の成り立ちと平安時代に起こった大噴火」『日本の自然　地域編２　東北』岩波書店。十和田火山が915年に噴火したとする文献史料上の根拠は『扶桑略記』延喜15年７月13日条（ユリウス暦に変換すると915年８月26日）の降灰記録、「出羽國言上、雨灰高二寸、諸郷農桑枯損之由」による。

また近年の年輪年代測定により、胡桃館遺跡と同様に埋没した大館市道目木遺跡（第３図６）で検出された建物を構成する部材のうち、表皮の残存するスギ材の年輪年代測定を行った結果、伐採年代が西暦912年と判明した。板橋範芳2000「道目木遺跡埋没家屋調査概報」『大館郷土博物館研究紀要　火内』創刊号、赤石和幸・光谷拓実・板橋範芳2000「十和田火山最新噴火に伴う泥流災害－埋没家屋の発見とその樹木年輪年代－」『地球惑星科学関連学会2000年合同大会資料』

（10）　町田　洋・新井房夫2003『新編　火山灰アトラス〔日本列島とその周辺〕』東京大学出版会

（11）　栗山知士1999「鷹巣盆地、伊勢堂岱遺跡の立地に関わる地形」『伊勢堂岱遺跡』秋田県文化財調査報告書第293集、田中倫久2004「掛泥道上遺跡の地質学的分析」『平成15年度町内遺跡詳細分布調査報告書』鷹巣町埋蔵文化財調査報告書第11集

（12）　奈良修介1968「秋田県における建物埋没遺跡」『胡桃館埋没建物発掘調査概報』（註３①文献）、冨樫泰時1987「菅江真澄と埋没家屋」『図説秋田県の歴史』河出書房新社、高橋　学2002「十和田火山とシラス洪水がもたらしたもの」『十和田湖が語る古代北奥の謎シンポジウム資料』十和田湖が語る古代北奥の謎シンポジウム実行委員会（秋田県小坂町）

（13）　内田武志・宮本常一（編）1973「埋没家屋（仮題）」『菅江真澄全集』第９巻未来社

（14）　平田篤胤『皇国度制考』（天保年間刊、秋田県立図書館蔵本）

（15）　鷹巣町では、胡桃館の西北西約２kmの掛泥道上遺跡のラハール堆積層中より、建築部材の一部（木製品）が採集されている。鷹巣町教育委員会2004「谷地川河川改修事業（掛泥道上遺跡）」『平成15年度町内遺跡詳細分布調査報告書』鷹巣町埋蔵文化財調査報告書第11集

（16）　『第１次概報』『第２次概報』『第３次報告書』（註３文献）

（17）　『第１次概報』pp.29－30、p.45図版７－１・２

（18）　『第２次概報』p.57第57図・第58図

（19）　鍋倉勝夫1968「考古学上よりみた本遺跡出土遺物」『第３次報告書』（註３③文献）

（20）　木簡２の釈文は、管見の限りでは、冨樫泰時1985『日本の古代遺跡24　秋田』保育社、に紹介されたものが早い事例である。その後、1997年に鷹巣町において行なわれた県文化財保護協会総会講演会にて、木簡２の見取り図と、それを「建建」とする釈読案が示された（冨樫泰時1997「鷹巣町における埋蔵文化財について」『出羽路』第121号）。この釈読案は、高橋　学1998『東北地方の古代集落　第２分冊（米代川流域・秋田平野・横手盆地・庄内平野）』第24回古代城柵官衙遺跡検討会シンポジウム「城柵と地域社会の変容」資料集にも継承されている。

（21）　秋田県立博物館企画展「発掘が語る古代の秋田」（1994年）。船木義勝1994「板扉の墨書文字」（註８文献）

（22）　この調査成果は、奈良文化財研究所2004『埋蔵文化財ニュース第114号　全国木簡出土遺跡・報告書綜覧』（山本　崇と寺崎保広氏の共編。以下、『綜覧』と称する）として公表した。なお、『綜覧』の「胡桃館遺跡（１次）（２次）」の項（p.19）は、刊行段階に釈読されていた２点を採録する。

（23）　2003年の熟覧調査の参加者は、古川淳一氏・吉川真司氏と山本で、収蔵庫の出土部材のほか、墨書扉板及び「寺」「不」と記された墨書土器３点を実見した。

（24）　木簡出土点数の概数は、『綜覧』掲載の事例を基礎として、2004年末までの公表分を加えたものである。

（25）　釈読は、2004年９月21日に開催した胡桃館遺跡出土木簡釈読検討会の成果である。参加者は、古川氏・吉

川氏・渡辺氏と山本の4名。なお、木簡の再調査に際して、中村氏に依頼して、写真撮影により現状を記録した。表面の傷みが著しいため、釈読は、赤外線テレビカメラ装置のほか、1968年撮影のガラス乾板写真（第6図）、2004年新撮影の赤外線デジタル写真（第7図、第8図）を併用して行なった。

(26)　1968年に撮影された写真でも、大きく4断片に分かれた様はみてとれる（第6図）。『第1次概報』p.45図版7－2は、4断片のうちの最も文字の多く認められる1断片の表面全体、同図版7－1は、同一個体裏面の部分を写した赤外線写真で、同書の注記によると、秋田県警鑑識課が撮影されたものである。

(27)　『日本三代実録』元慶2年（878）6月7日条、同7月10日条、元慶3年（879）正月13日条

(28)　胡桃館遺跡からは、1辺10㎝程度の正方形で、四隅に木釘の残存する木札が出土しており（『第2次概報』p.55第53図・第54図）、木簡1の原形及び機能を考える上で参考となる。これによると、木簡1の孔は何処かに打ち付けるために穿たれたと推測される。

ただ、これまでの出土事例で知られる限り、木簡1と同様の機能をもつと推測される帳簿木簡は、いずれも縦長であり、正方形に近いものは寡聞にして知らない（滋賀県鴨遺跡出土木簡〈滋賀県教育委員会1980『鴨遺跡』高島町歴史民俗叢書2〉。藤原宮跡第36次調査出土木簡－1・2〈奈良国立文化財研究所1983『飛鳥藤原宮発掘調査出土木簡概報』7〉など。村井康彦1985「宮所荘の構造―宮都と国衙の間」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8号。原秀三郎1986「倉札・札家考」『木簡研究』第8号。平川　南2003「倉札」『古代地方木簡の研究』吉川弘文館などを参照）。してみれば、木簡1の原形を少なくとも現存の2倍程度の長さを有する縦長のものである可能性も否定できない。この場合、上端は、帳簿の機能を終えた後、二次的に切断されたことになる。木簡の原形については、今後の検討に俟ちたい。

なお、四隅に穿孔があり、比較的幅の広い帳簿様木簡の類例として、伊場遺跡出土第52号木簡（浜松市教育委員会1976『伊場木簡』〈伊場遺跡発掘調査報告書1〉）をあげる。

(29)　年代測定は、光谷拓実氏（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター古環境研究室長）により行なわれた。測定値の公表をご快諾いただいたことに謝意を表したい。なお、木簡1のほかに、胡桃館遺跡出土の部材3点の年輪年代法による測定が行なわれており、うち1点（机板）の最外年輪形成年は、902年と報告されている（奈良国立文化財研究所1990『年輪に歴史を読む―日本における古年輪学の成立』奈良国立文化財研究所学報第48冊）。

(30)　高橋　学1995「秋田県における平安時代の防御性集落」『考古学ジャーナル』第387号、小口雅史2005「古代北日本の『防御性集落』」『歴史評論』第657号などを参照。

(31)　奈良修介1967「くるみ館の発掘―秋田県北秋田郡の古代建物調査」『月刊文化財』1967年11月号

(32)　地方官衙の隣接地から官衙に付属する寺院が検出される事例は、枚挙に暇がない。最近の郡衙周辺寺院にかんする総括的な研究は、古代官衙・集落研究会2004『地方官衙と寺院―郡衙周辺寺院を中心として―　研究報告資料』奈良文化財研究所、所収の諸論考をご参照いただきたい。また、国庁における仏事は、鬼藤清明1989「国府・国庁と仏教」『国立歴史民俗博物館研究報告』第20号、に詳しい。

胡桃館遺跡の出土遺物は、確かに仏事法会を示唆する可能性が極めて高い。近年の検討によると、宇田川浩一氏は胡桃館遺跡の性格を寺院と推測されるが（宇田川浩一2005「『元慶の乱』前後の集落と生業－米代川流域と旧八郎湖東北岸の違い－」『第31回古代城柵官衙遺跡検討会資料』）、山本は、遺物の出土状況のみから寺院と論断するには慎重であるべきと考える。その理由は、官衙における法会の執行形態を考えるとき、法会の舗設は臨時に設けられることも多く、「寺」の機能に特化される「堂」などの建物空間は、必ずしも仏事法会を執行するための必要条件とはいえないと理解するからである。なお、官衙ではないが、宮中の正月御斎会は、奈良時代後半から平安時代末に平安宮大極殿の再建が途絶えるまで、大極殿儀とされた仏事であり、法会の期間中、宮の中枢に位置する八省院は仏事空間としてのみ機能していた（山本　崇2004「御斎会とその舗設―大極殿院仏事考」『奈良文化財研究所紀要2004』参照）。

(33)　木簡は、保存処理によって釈読が進展する場合があり、確定した釈文は別途報告したい。

秋田県埋蔵文化財センター研究紀要　目次（２）《第11号～第18号》

第11号　1996年３月刊行　Ｂ５版　101頁
竹原窯跡出土須恵器の胎土分析〔三辻利一･利部 修〕／秋田県出土の銭貨資料集成〔高橋 学〕／
秋田県のヒスイ遺跡〔栗澤光男〕／漆紙文書が語る古代史〔平川 南〕

第12号　1997年３月刊行　Ａ４版　99頁
出羽国の丸底長胴甕をめぐって〔利部 修〕／秋田県出土の珠洲系陶器資料集成(上)〔栗澤光男〕／男鹿市祓川Ⅰ遺跡の中世陶器－特に越前･珠洲系陶器について〔磯村 亨〕／近世蔵骨器の一例－大森町本郷家墓地の事例〔高橋 学〕／発掘された遺構の再堆積の様子〔伊藤 攻〕／縄文から弥生へ－習俗からみた－〔春成秀爾〕

第13号　1998年３月刊行　Ａ４版　78頁
米代川流域の旧石器時代資料－能代･山本地方を中心として－〔工藤直子・高橋 学〕／東北以北の双耳坏と環状凸帯付長頸瓶〔利部 修〕／秋田県出土の珠洲系陶器資料集成（下）〔栗澤光男〕／
結髪形土偶－男鹿市上鮪川Ⅰ遺跡で発見された遺物から－〔磯村 亨〕

第14号　1999年３月刊行　Ａ４版　64頁
縄文ランドスケープ〔小林達雄〕／本当に縄文時代観は変わったのか？〔岡村道雄〕／世界と日本の文化財〔田中 琢〕／二ツ井町富根字駒形不動沢地内のアスファルト滲出地について〔小笠原正明･櫻田 隆･能登谷宣康〕／秋田県考古学関係文献抄録（１）－須恵器・瓦－〔利部 修〕

第15号　2000年３月刊行　Ａ４版　76頁
古代末の奥羽〔岡田茂弘〕／米代川流域の遺跡（縄文）が語るもの〔冨樫泰時〕／鷹巣町採集の大型遮光器土偶と大洞式土器〔宇田川浩一〕／考古資料を用いた授業（１）〔泉田 健・石澤宏基・吉川 孝〕／
秋田県考古学関係文献抄録（２）－文化財の保護・行政・教育①－〔利部 修〕

第16号　2002年３月刊行　Ａ４版　82頁
古代末から中世の住居建築〔宮本長二郎〕／上部旧石器時代遺跡の研究－遺跡構造論とその周辺－〔吉川耕太郎〕／百聞不如一見－伊勢堂岱遺跡の遺構（１）－〔五十嵐一治〕／
井川町洲崎遺跡とは何か－洲崎遺跡に見る中世出羽北半の一様相－〔高橋 学〕

第17号　2003年３月刊行　Ａ４版　89頁
縄文時代の食文化－植物食を中心として－〔渡辺 誠〕／地形の判読〔小林 克〕／個体別資料分析の再検討－琴丘町小林遺跡における縄文時代中期後半の石器群－〔吉川耕太郎〕／百聞不如一見－伊勢堂岱遺跡の遺構（２）－〔五十嵐一治〕／滑石製石鍋と山茶碗－雄勝町館堀城跡出土の事例から－〔高橋 学〕／
秋田県考古学関係文献抄録（３）－石造物（塔・神仏など）－〔利部 修〕

第18号　2004年３月刊行　Ａ４版　102頁
縄文土器づくり－生涯学習における土器製作体験の在り方－〔戸村正己〕／秋田県における大形住居の集成〔海道澄子〕／小又川流域における縄文時代の竪穴住居跡について（１）〔河田弘幸〕／百聞不如一見－伊勢堂岱遺跡の遺物－〔五十嵐一治〕／大曲市和合出土の墨書土器－使用痕跡にも着目して－〔高橋 学〕／秋田県考古学関係文献抄録（４）－城館・防御性集落・城柵（秋田城跡・払田柵跡を除く）－〔利部 修〕

大曲市内小友の礫石経塚

今野沙貴子*

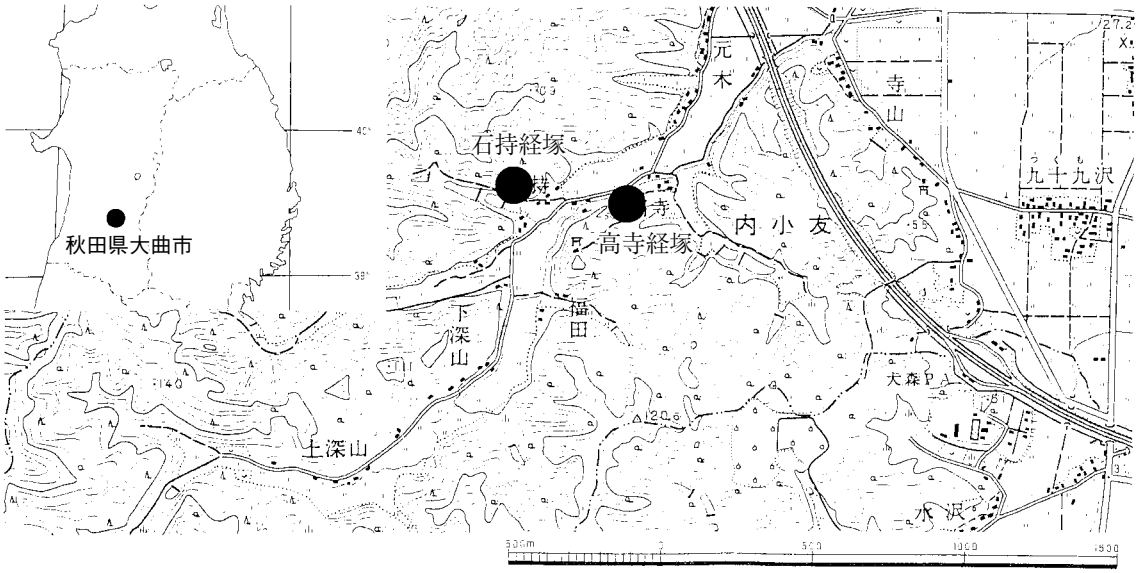
1、はじめに

秋田県内における礫石経塚(1)に関する研究は、菅江真澄と真崎勇助によって始められた。菅江はその著作の中で、県南を中心に4ヶ所の礫石経出土地を記録している(2)。真崎もまた、県南の礫石経出土地を3ヶ所記録に残している(3)。これらの中には、現在では遺物・出土地点共に確認できない事例も含まれており、遺跡の存在を後世に伝える資料として重要である。

昭和期には、武藤鉄城が仙北郡西明寺村（現西木村）・八津経塚の調査成果を報告している(4)。これは、秋田県内における礫石経塚の初の調査例として注目されるものである。もう一つ昭和期の代表的な研究として挙げられるのは、奈良修介の報告である。奈良は、「戦後の新例」のみを扱うと断りながらも、礫石経出土の経塚を9ヶ所掲げている(5)。これは、県内全域を対象とした初めての集成的報告である。

以上が秋田県内での礫石経塚に関する研究の概観であるが、奈良の研究以降は個々の遺跡について簡単な報告が出されているにすぎない。現在、県内では礫石経塚（参考地も含む）が131ヶ所確認されているが(6)、それらの大部分は正式な発掘調査を経ていない。わずかに鳥海町、神岡町で礫石経塚の発掘調査例があるが(7)、詳細は未報告である。

礫石経の埋納目的は多様であり、すべての礫石経塚を、同じ性質のものとして一様に捉えることはできない。個々の遺跡がどのような性格を持つかを分析することが、研究の第一歩である。そのことを踏まえて、本稿では大曲市内小友所在の高寺経塚、石持経塚を取りあげる。両経塚の発掘時の状況を記録し、その情報を基に若干の考察を加えることとしたい。



第1図　高寺経塚・石持経塚の位置

＊ 秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査・研究員

２、高寺経塚の概要

①遺跡の環境

高寺経塚は、大曲市内小友字高寺に所在する礫石経塚である。大曲市は秋田県の南東部、横手盆地のほぼ中央西側に位置する。内小友地区は市域の南西部にあたり、東は雄物川に、西は出羽丘陵に接している。高寺集落は内小友地区の南西端、高寺川が出羽丘陵に作り出した沢地形の底に立地する。経塚は高寺山北麓の整地された丘上に築かれており、礫石経埋納部分の上部には現在、「多宝如来堂」と呼ばれるお堂が東を向いた状態で鎮座している。

菅江真澄の記録によると、高寺山には福王寺があったとされ、それは養老３年（719）の開基であったと伝えられる(8)。高寺山頂は高寺山城跡にあたり、現在でも遺構を確認することができる。高寺山城には、「天正の頃（1573 ～ 1591）、あるいは豊臣家没落後に難波平治満友が築城し、家臣 200 人ばかりと共に住みついた」という伝承が残っている。また、現在内小友字館前にある満友寺は難波平治満友によって創建されたものと言われ、元々は高寺山にあったとされている(9)。経塚のある丘の西側には、近世の僧の庵跡であると言われる閑居屋敷跡が隣接している。

②遺跡の現況

高寺経塚では、多宝如来堂の下に礫石経がむき出しの状態で埋められている。お堂の下には多くの川原石が確認できるが、表採できるものに関しては、墨書の確認できるものは少ない。

堂内部には、向かって右側に石仏が１体、左側に無縫塔が１基安置されている。かつては石仏がもう１体あったらしいが、今は頭部の一部が伝わるのみである。堂の管理者の話によると、石仏はかつて皮膚病の神様として知られ、少なくとも大正末から昭和の初め頃までは、田沢湖町からも参拝客が来るほど信仰を集めていたという。現在は参拝客も少なくなったということであるが、年に一度の祭典は継続して行われている。祭典は旧暦４月８日に行われ、近辺の４～５軒が参加する。

③発掘前の経塚

経塚は昭和55年頃の多宝如来堂改築の際、管理者の伊藤福右衛門氏により発掘されているが、発掘前の遺跡の状態を伝えるものに、榊田凌次郎の報告がある(10)。以下にその概要を記す。

（イ）昭和39年５月５日、高寺・観音山（＝高寺山）の麓にある多宝如来堂の下から、経石（＝礫石経）を拾う。堂の下に手を入れると、多くの経石をかき集めることができる。その経石は一字一石経で、「随」「変」「蝦」「薬」「由」「足」「吉」「衆」「穏」「相」「天」「薩」「己」「摩」「問」「讃」などの文字を確認する。

（ロ）多宝如来堂の中には、左に70㎝位の石仏、右に墓碑（＝無縫塔）が祭られている。墓碑には、「円寂典参禅心沙弥　天明六年十一月八日」の銘がある。この「禅心」という人物は、内小友満友寺の過去帳にある「即翁禅心沙弥　板井田第助之父」であると考えられる(11)。

（ハ）石仏の台座正面には「石経　佛　供養」の銘が、その左側には「享保七　年寅□　九月十八日」の銘がある(12)。それにより、享保７年（1722）に経塚が発見され、それを供養する意味において石仏がたてられたと解釈できる。享保７年には、経塚の伝承が忘れられていたとすると、少なくともそれより百年前、江戸初期か室町末に経塚が構築されたと見るのが妥当である。

④経塚発掘時の状況

発掘者である伊藤氏の証言を基にして、経塚発掘時の状況についてまとめる。

（イ）伊藤氏は多宝如来堂を経塚上から動かし、発掘に差障りのない状況にした。氏は、まず地表面に

盛り上がっている礫石経[13]をスコップで取り除き、礫石経埋納部分を地表と同じ高さに合わせた。そこから先は、全て手作業で礫石経の取り上げを行った。埋まっている礫石経の半分ほどを取り上げた時点で作業を終了し、礫石経を元の状態に埋め戻した。

（ロ）礫石経は多宝如来堂の真下、畳半分くらいの範囲に埋められていた。礫石経の取り上げを行ったのは、お堂に向かって右半分の範囲であった。礫石経には扁平な川原石が用いられており、取り上げた総数は、一輪車２台分であった。遺物は礫石経のみで、形態は一字一石経であった[14]。

（ハ）礫石経が出なくなる深さまで掘ったが、その時の深さは地表より50cmほど下であった。礫石経は「放り込んだような」状態で納められていた。特に石室などは作っておらず、土坑にそのまま礫石経を納めたものと思われる[15]。

⑤出土遺物について

今までに高寺経塚から確認されている遺物は礫石経のみである。発掘時にも副納品は確認されておらず、現在でも経塚周辺に副納品らしいものは見られない。

礫石経の大部分は多宝如来堂の下に埋まっている状態であるので、今回見ることができたのは、地表上に盛り上がっていた一部の礫石経である。堂の手前にせり出している礫石経のほとんどには、墨書が認められない。堂下の奥の方に手を伸ばして表採したものの中に、幾つか文字の確認できるものが含まれていた。発掘調査された礫石経塚の中には、経塚造営当初から墨書はなかったと考えられる礫石経を多く含む事例がある[16]。高寺経塚における墨書のない礫石経に関して、ただ単に墨書が消えてしまっただけなのか、それとも何か意味のあるものなのかという問題が生じるが、それは今後の課題となろう。

今回表採した礫石経24点（墨書が確認できるもの）においては、川原石の長径に3､1cm～8､3cmと開きがあるが、ほとんどが扁平である。文字の書きやすい石を、選んで持ってきている様子が窺える。経塚のすぐ北側には高寺川が流れ、北東１kmの地点で高寺川と合流する小友川もあることから、川原石は手軽に採集できたものと思われる。

表採した礫石経の中で判別できた文字は､「者」「遊」「品」「此」「書」「無」「可」「七」「合」「憂」である。また、ある程度文字が推測できるものとしては､「量」「區」「誰」がある。「可」の文字のあるものが２点あり、これらに関しては同一人物の筆跡であると思われるが、今回の表採資料では書写に関わった人数にまで言及することはできない。

⑥考察

現状において礫石経埋納に関係すると思われるのは､「石経　佛　供養」銘を持った石仏である。この石仏には「享保七年」の紀年銘があるが、県内の紀年銘礫石経塚の分布を見ると、県南部（横手盆地内）における礫石経埋納の事例は元禄～享保年間にピークを迎えると考えられる（表１）。また、石仏を経碑[17]とする礫石経塚は、管見によると全国的にも何例か確認されている[18]。このような状況を考慮すると、高寺経塚においては石仏が経碑であり、享保７年（1722）に礫石経が埋納されたと想定される。

礫石経の「埋納方法」には、（Ⅰ）「塚状に土盛りした中に一石経を納める」、（Ⅱ）「一石経そのものを積み上げる」、（Ⅲ）「地中に土坑を設けて一石経を納め、その上に経碑を立てる」、（Ⅳ）「建物の床下などに一石経を納める」などの事例が確認されている[19]。高寺経塚においては、土坑中に礫石経を納め、それを埋め戻すことなく、そのまま直上にお堂が建てられたような状態が保たれており、一見（Ⅳ）の

事例に当てはまるように見える。だが、築造当時から経塚がその形態であったかどうかに関しては、疑問を覚える。

この石仏を観察すると、隣の無縫塔に比べて表面の磨耗が激しいのが確認できる。もちろん、無縫塔の方が石仏の造営年代よりも新しいのであるが、造営後200年以上経っているのにもかかわらず、無縫塔は良好な保存状態を保っている。このことは、無縫塔が造営後まもなくお堂に入れられたことを示すものと考える。そして石仏の磨耗が激しいことは、石仏が元々は野ざらしの状態であったことを想定させる。経碑は、一般的には礫石経を土中に埋納した上に置かれるものである(20)。高寺経塚においても、礫石経が地表に盛り上がった現状を考慮すると、元々はいくらか塚状の高まりが形成されていたものと思われる。その上に、経碑である石仏が置かれていたのであろう。その遺構の状態は、次に取りあげる石持経塚と共通する。

３、石持経塚の概要

石持経塚の存在は平成16年11月23日、鎌田龍公氏に御教示頂いたものである。榊田もかつて本経塚を訪れているらしいが、詳しい報告はされていない。この度、本経塚を実見する機会を得たので、ここに紹介したい。また、本経塚は未登録の遺跡であるため、ここでは仮に「石持経塚」という呼称を使うこととする。

①遺跡の環境

石持経塚は大曲市内小友字石持に所在する。石持集落は高寺経塚の位置する高寺集落に隣接しており、石持経塚は高寺経塚の沢を挟んだ西側の山麓に位置している。経塚は山肌を削った整地面に、西側を向いた状態で造られている。周辺の地形が改変されているため、経塚への参道が元々どのような状況であったかは不明である。

②遺跡の現況

石持経塚も高寺経塚と同じく既に発掘されている。塚状の遺構があったとされるが、現在では正確な規模・形状をつかむことはできない。また、礫石経も埋め戻されているので、実見することはできない。現在観察できるのは、経碑のみである。

経碑は安山岩製で、高さ80cm、幅15cm、厚さ11cmであり、頭部山形の形状を呈する。経碑台座は31cm×32cmのほぼ正方形で、土に埋まっているので正確な数字は出せないが、高さは9､5cm以上である。

経碑正面には「奉石書法華一部供養□」の文字が、向かって左側面には「･･･享二･･･」の文字が確認できる(21)。磨耗が激しく、側面ではっきり判読出来るのは上記２文字のみであるが、文字の残存部分から、延享２年（1745）に造られた経碑であることが分かる。経碑正面の銘から、礫石経に書写されたのは法華経である。

③経塚発掘時の状況

石持経塚は昭和44年頃、管理者の加藤多一郎・忠士両氏によって発掘されている。加藤忠士氏の証言を基に、経塚発掘時の状況について書き記す。

（イ）経塚上の経碑の管理は、ずっと加藤家で行っていた。だが、経碑の下に何かが埋まっているという伝承はなかった。毎年盆と正月には、経碑にお供え物をするなどしている。

（ロ）発掘前は、若干塚状に盛り上がった遺構の上に経碑が立っている状態であった。作業に入る前に、経碑を塚上から移動した。発掘にはスコップが使われたが、礫石経の出土を確認した時点で、手による礫石経の取り上げに入った。礫石経は、塚を50cmほど掘り下げた時点で確認した。

（ハ）礫石経は全て取り上げたが、「カマス２つ分」の量があった。多字一石経で、径10cmほどの扁平な川原石が使用され、石の両面にびっしりと文字が墨書されてあった。礫石経以外の遺物はなかった。

（二）礫石経を確認した深さから、もう礫石経が出土しなくなる深さまでは、１ｍ以上あった。礫石経を納めていた土坑の大きさは、高寺経塚（畳半分くらい）ほど大きなものではなかった。ただ、経碑の台座（31cm×32cm）よりは大きな土坑であった。

（ホ）発掘後は、礫石経を埋め戻し、塚状遺構も経碑も元のような状態に戻した。

④考察―高寺経塚と比較して

上述のように石持経塚と高寺経塚は、近接した位置関係にある。このことを踏まえた上で、両経塚の共通点、相違点を整理してみたい。

遺物について述べると、礫石経に扁平な川原石を使っている点、副納品を伴わない点は共通するが、礫石経の形態は高寺経塚が一字一石経、石持経塚が多字一石経と異なっている。

遺構については山の麓の整地面に立地する点、経碑を設けている点、塚上の高まりの上に経碑を置いたと推定される点、土坑に直接礫石経を埋納している点は共通するが、経碑の形態、土坑の規模に違いが認められる。

両経塚の共通点のうち、礫石経に扁平な川原石を用いている点、副納品を伴わない点、土坑に直接礫石経を埋納している点は、礫石経塚に見られる全国的な傾向である(22)。両経塚の位置・造営年代の近接関係を考慮すると、礫石経・経碑の形態、土坑の規模が大きく異なることは注目すべき事実であろう。それぞれの経塚に、違う造営者が想定される。山麓に立地する点、塚状の低い高まりを持つ点は、この地域の特色といえよう。

４、おわりに

高寺経塚・石持経塚は共に経碑を伴う礫石経塚であるが、具体的な経塚の造営目的を経碑から読み取るのは、現在では困難な状況になっている。だが両経塚の位置関係や特徴から、近世の高寺村・石持村の住人による作善業の遺跡であることが想定できる。享保８年（1723）の「仙乏郡郡境本村支村御高共調帳」によると、高寺村は７軒、石持村は５軒の家数であったらしい(23)。礫石経塚においては、川原石に書かれた文字の筆跡から書写に関わった人数を推定することが行われているが(24)、それはできる限り多数の礫石経を分析してこそ信憑性のあるものである。本稿で扱った２遺跡に関しては観察できた礫石経が少ないため、書写に関わった人数を推定できる段階には至っていない。経塚の造営が村の住人全員の手によるのものなのか、それとも一部の住人の手にとどまるものなのかについては、今後の課題である。

また、高寺経塚においては満友寺との関係も問題になろう。菅江真澄が満友寺について、「･･･五倫台と今いふ観音山の片岨に在りしが、夜盗入り来て財宝をむさぼる事再三に及びしかば、今いふ寺山と字る処に遷し、また館前にうつせりといふ」と書いている(25)。満友寺が館前に移転したのは明和３年

(1766) とされているが[26]、寺山にいつ、どのくらいの期間位置していたのかは不明である。高寺経塚造営時に満友寺が高寺山に位置していたとしたら、やはり経塚に何らかの影響を及ぼしていたと考えられよう[27]。

礫石経塚の中には、十分な調査をされないまま工事などによって消滅してしまう事例が少なくないが[28]、高寺経塚、石持経塚は、近世における民間信仰の様子を現代に伝えてくれているばかりでなく、今なお信仰の対象となって人々の心に安らぎを与えてくれている。貴重な文化財が住民の手により末永く伝えられることを祈り、文章の結びとしたい。

謝辞

本稿を執筆するに当たっては、下記の方々のご協力を頂きました。末筆ではありますが、感謝致します。

伊藤福右衛門・慶子夫妻（高寺経塚の管理者）・鎌田龍公氏（満友寺前住職）・加藤忠士・秀子夫妻（石持経塚の管理者）・枝川 元氏（大曲市教育委員会）・加藤加一氏（内小友の昔を語る会）・高橋 学氏（払田柵跡調査事務所）

註

(1)「経塚」という用語は、経典を主体として埋納している遺跡に対して使われるべきであると考えているが、礫石経が埋納されている遺跡の中には、必ずしも経典が主体とはならない事例が少なからず見られる。本来「礫石経が埋納の主体とならない遺構」に関しては「経塚」という用語を使うべきではないが、混乱を避けるため、本稿では「礫石経が出土する遺跡」を全て「礫石経塚」と呼ぶことにする。

(2)内田武志・宮本常一 「雪の出羽路　平鹿郡一」『菅江真澄全集』第6巻　未来社　1976（昭和51）年　P388 ※明沢経塚（平鹿郡平鹿町）についての記述がある。
内田武志・宮本常一 「月の出羽路　仙北郡一七・二三」『菅江真澄全集』第8巻　未来社　1979（昭和54）年　P25・207　※みのり塚（仙北郡美郷町（旧仙南村））、法華経塚（仙北郡中仙町）についての記述がある。
内田武志・宮本常一 「おがらのたき」『菅江真澄遊覧記』4　平凡社　2000（平成12）年　P221～222　※立石経塚（山本郡八森町）についての記述がある。
※菅江真澄（1754？～1829）は江戸時代の紀行家として知られる人物で、多くの著作を残している。

(3)真崎勇助 『雲根録』 1874～1906（明治7～39）年　※増田多吉屋敷遺跡（平鹿郡増田町）、梨木塚経塚（同地）、上深井経塚（仙北郡美郷町（旧仙南村））についての記述がある。
※真崎勇助（1841～1917）は古文書・考古資料の収集や古記録の筆写に力を注いだ人物であり、彼の残した収集品は「真崎コレクション」と呼ばれている。

(4)武藤鉄城 「八津の環状石籬墳群」『考古学雑誌』第37巻第4号　1935（昭和10）年

(5)奈良修介 「秋田の経塚」『考古学雑誌』第42巻第4号　1940（昭和15）年　※奈良は後に経塚30ヶ所を集成している（奈良修介 「経塚地名表」『秋田考古学』第12号　1959（昭和34）年）。また礫石経出土地に関しては、1940年報告分以外の2遺跡について比較的詳細な報告を行っている（奈良修介 「経塚」『秋田県史』考古編　1977（昭和52）年）。

(6)県内の礫石経出土地については、平成15年度に制作された集成を基本資料とさせて頂いた。この集成は、国立歴史民俗博物館が実施する『経塚データベース』のためにまとめられたものである。それによると県内には経塚（参考地含む）が175ヶ所存在し、礫石経埋納が考えられる地点はそのうちの131ヶ所になる。131ヶ所のうち、礫石経出土が確認されている事例は68ヶ所であり、残り63ヶ所は、経碑のみ確認の事例、文献の記録に残るのみの事例である。石造物を地上標識にする事例は、一般的に近世の礫石経塚に多いため（ⅰ）、礫石経塚参考地として数えた。だが、地上標識のみ確認の事例中、5つに「六十六部」「廻（回）国」といった

銘が見られる。これらについては、中世の六十六部聖の廻国納経に関わる経塚にも石碑を伴う事例が見られるという点（ii）、六十六部聖が関わった可能性のある礫石経塚も確認されている点（iii）を明示しておきたい。

（ｉ）関秀夫 『経塚の諸相とその展開』 雄山閣出版　1990（平成２）年　P635

（ii）山形県朝日町に「弘治二年今月　奉納経廻国供養　念佛弐百万遍供養」の銘のある石碑がある。朝日町・平布施家の記録によると、この石碑の下より「奉納大乗妙典六十六部」とある経筒が発見されたとされる。

関秀夫 『経塚』 ニュー・サイエンス社　1985（昭和 60）年　P51

（iii）具体的な事例としては、新潟県北魚沼郡川口町・六十六部の供養塔が挙げられる。 川口町史編さん委員会 『川口町史』1986（昭和 61）年　P623

（７）鳥海町の調査事例･･･長坂経塚は由利郡鳥海町上川内字長坂に所在し、鳥海村郷土調査会により昭和 39 年に発掘調査された。 鳥海町史編纂委員会･鳥海町企画課 「文化伝承編　民間信仰」『鳥海町史』 1985（昭和 60）年　P1503

神岡町の調査事例･･･三本杉経塚（登録遺跡名。別名・船戸経塚）は仙北郡神岡町北楢岡字船戸 348 に所在し、神岡町教育委員会によって発掘調査された。現在、経塚があった場所の近くに標柱が建っており、「船戸経塚は～水田にあったが、圃場整備事業により平成８年に発掘された。川原石に一文字ずつ経文が書かれた礫石経塚であるが、営造の時期や経典は明らかでない。」と記されている。

（８）内田武志・宮本常一 「月の出羽路　仙北郡八」『菅江真澄全集』第７巻　1978（昭和 53）年　 P276

（９）榊田凌次郎 「内小友高寺の経塚について」『大曲市郷土史資料』６号　1965（昭和 40）年

※菅江真澄は、難波平治満友を天養・久安（1144 ～ 1150）の頃の人としている。この菅江の記録を踏まえ、大坂高昭が「満友」について考察をしている。 註８文献（内田・宮本） P283　大坂高昭 『秋田県曹洞宗編年史』 無明舎出版　1999（平成 11）年　P124

(10) 註９文献（榊田）

(11) 榊田は「即翁禅心沙弥　板井田弟助之父」と報告しているが、正しくは「即翁禅心沙弥　板井田第助之父」である。内小友満友寺の鎌田龍公氏よりご教示頂いた。また、この人物は高寺経塚西側の閑居屋敷跡に住んでいた僧であるという。

(12) 榊田は台座正面の銘を「石経　仏　供養」、左側の銘を「享保七　年寅　九月七日」と報告しているが、今回は現地で確認した内容を本文中に記した。

(13) 礫石経塚の中には、当初から墨書のされていない川原石が礫石経と一緒に埋納されている事例がある。高寺経塚に埋納されている全ての川原石に、経塚造営当初から墨書があったのかどうかは不明であるが、本稿では「墨書のない川原石」と「礫石経の材料としての川原石」との混同を避けるため、経塚に埋納されてある川原石はすべて「礫石経」と呼ぶことにする。

(14) 伊藤氏によると、扁平な川原石の両面に文字を書写してあるものがあったかについては不明であるという。

(15) 伊藤氏によると、礫石経が埋納されていた部分は「四角い形」をしていたそうである。

(16) 註６（ｉ）文献（ 関） P646

財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 「萩原城跡」『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅴ）』 2003（平成 15）年　P68

(17) 礫石経塚の地上標識については、関秀夫氏の以下の一文に従って「経碑」の用語を用いることとする。「一石経の経塚の標識としては、石碑や石塔などを建立するものもあり、これらを経碑と呼ぶのが一般的である。」

註６（ｉ）文献（関） P635

(18) 山形県米沢市龍雲院境内経塚（ｉ）、福島県河沼郡湯川村常法寺経塚（ii）、静岡県富士宮市二股村石経塚（iii）、山梨県南巨摩郡南部町（旧富沢町）玉泉寺経塚（iv）、大分県宇佐市仁聖寺の地蔵（ｖ）などの事例がある。

（ｉ）山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 『埋められた経　こめられた願いーやまがたの経塚ー』 2004（平成 16）年　P41

（ii）磐梯町教育委員会・磐梯山慧日寺資料館 『石に込められた祈りー礫石経の世界ー』 2002（平成 14）年　Ｐ６～７・13

（iii）松原典明 「礫石経研究序説」『考古学論究』第３号　1994（平成６）年　P8

（iv）山梨県埋蔵文化財センター（田代孝）『民間信仰遺跡分布調査報告書―近世の経塚―』 2001（平成

13）年　P13・図版14

（ｖ）註６（ｉ）文献（関）　P637～638

(19)註18文献（田代）　P32　※上記文献の「埋納方法」の分類は、山梨県内の事例を分析した結果出されたものであるが、全国的な傾向にも当てはまると考えられるので引用した。ちなみに松原典明は、田代の遺構の分類よりも更に詳細な分類を行っている。ただし松原の分類では、礫石経を土中に埋納した事例が中心となっている。　註18文献（松原）　Ｐ４～24

(20)註18文献（田代）　P32　※ただし、全ての経碑の下部に礫石経が埋納されているとは限らない。関秀夫によると、一見経碑に見えるものの中には、「別の形で行なった経典の書写供養などの記念のために残されたもの」もあるという。また経碑の場合、後世に元々の位置から動かされてしまって、礫石経埋納部分と分離されている場合もある。　註６（ｉ）文献（関）　P635

(21)経碑表面は全体的に磨耗が激しく、文字は拓本をとってようやく判読できるような状態である。

(22)三宅敏之　「経塚の遺物」『新版仏教考古学講座』第６巻　1984（昭和59）年　P95

註６（ｉ）文献（関）　P646　　註18文献（田代）　P32

(23)下中邦彦　「大曲市」『秋田県の地名』　平凡社　1980（昭和55）年　P323

(24)管見によるが、代表的なものとして次の３遺跡を挙げる。

坂本洋一　「八戸市笹ノ沢頭所在の経塚について」『考古学ジャーナル』220　1983（昭和58）年　Ｐ７　※礫石経の書き手が２人以上いたことを指摘している。

山形県教育委員会　『郡之神遺跡　第２次発掘調査報告書』　1993（平成５）年　P29　※礫石経の書き手が複数存在した可能性を指摘している。

米沢市教育委員会　『覚範寺廃寺跡　第Ⅰ次・第Ⅱ次発掘調査報告書』　1989（平成元）年　P103　※礫石経の書き手を、20～30人位と想定している。

柏崎市教育委員会　「庚申塚の経塚」『横山東遺跡群Ⅰ』　2000（平成12）年　P84　※礫石経の書き手が複数存在したことを指摘している。

(25)註８文献（内田・宮本）　P283

(26)駒澤大学内禅学大辞典編纂所　『禅学大辞典』下巻　大修館書店　1978（昭和53）年　P1180

註９文献（大坂）　P411　　※現在の満友寺旧山門の棟札に「明和二年建立」(1765）とあり、この頃までに館前に伽藍が整備されたものと思われる。　秋田魁新報社出版部　「県南部　大曲・仙北地区」『心のふる里　秋田のお寺』　秋田魁新報社　1997（平成９）年　P269

(27)高寺経塚が造営された享保７年には、満友寺は既に曹洞宗寺院として成立していたと考えられている。

註９文献（大坂）　P148

(28)註６（ｉ）文献（関）　P577

表１　秋田県における紀年銘礫石経塚の分布

	県 北	中 央	県 南	合 計
近世以前	1		1	2
元禄年間(1668～1703)			3	3
宝永年間(1704～1710)		1	1	2
正徳年間(1711～1715)	1			1
享保年間(1716～1735)		5	2	7
元文年間(1736～1740)	1	1		2
寛保年間(1741～1743)				0
延享年間(1744～1747)		2		2
寛延年間(1748～1750)				0
宝暦年間(1751～1763)	5	5		10
明和年間(1764～1771)	5	3	1	9
安永年間(1772～1780)		1	1	2
天明年間(1781～1788)		2		2
寛政年間(1789～1800)				0
享和年間(1801～1803)				0
文化年間(1804～1817)		1		1
文政年間(1818～1829)		1		1
天保年間(1830～1843)	2			2
弘化年間(1844～1847)		1		1
嘉永年間(1848～1853)				0
安政年間(1854～1859)			1	1
明治以降(1868～)	1		1	2
合計	16	23	11	50

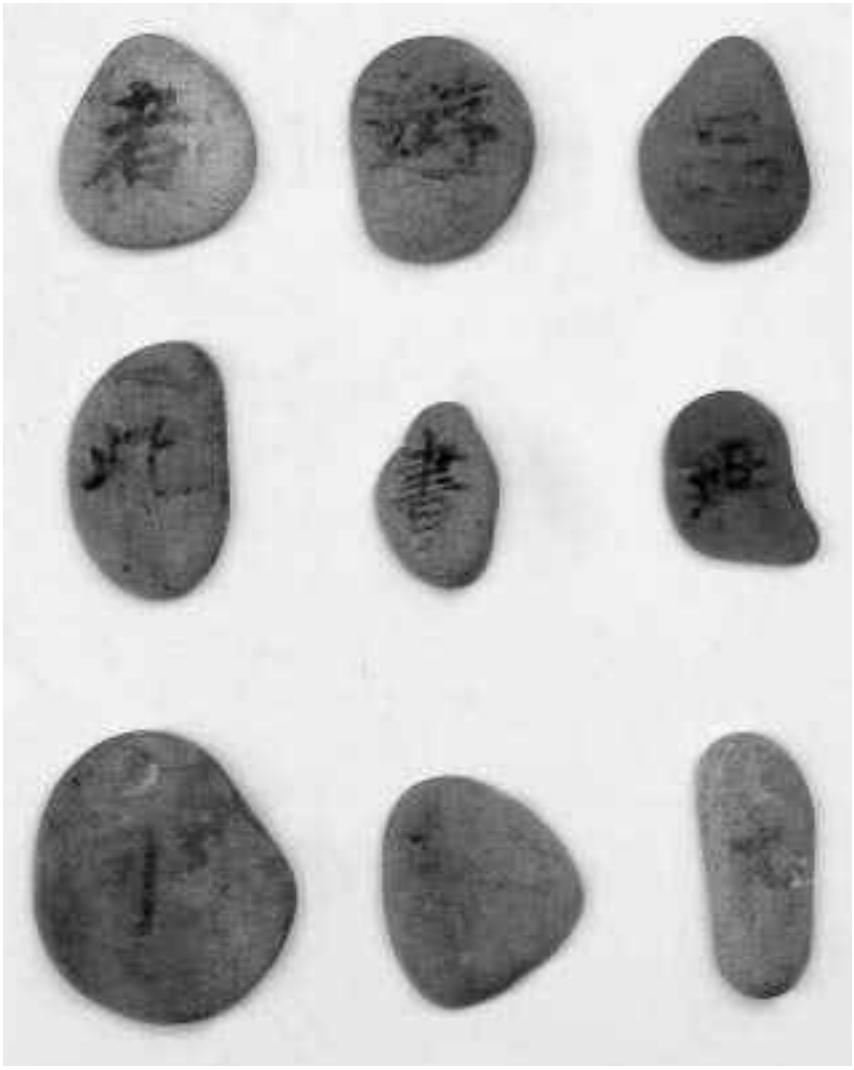
（高寺・石持経塚を除く）

図版１　高寺経塚（多宝如来堂）近景

（上）図版２　高寺経塚現況①　堂正面から撮影。
←堂下に礫石経がむき出しになっているのが
見える。

（下）図版３　高寺経塚現況②　堂右側からも
礫石経がせり出している。

図版４　高寺経塚経碑



表採した24点（墨書が確認できるもの）中、文字の残存状態が良好だったもの9点。ちなみに、左上の「者」は4.6×4.3㎝。
左から右へ、
上段「者」「遊」「品」
中段「此」「書」「無」
下段「可」「可」「七」。

図版5　高寺経塚出土の礫石経

図版6　石持経塚近景

図版7　石持経塚経碑

兵どもが夢の跡　－東根小屋町遺跡の発掘調査－

高橋　学*1・五十嵐一治*2

秋田県教育委員会は、秋田市街地の中心部中通地区に整備される秋田県教育・福祉複合施設の中核として、「秋田明徳館高等学校」を平成17年４月に開設する。この施設は、近世秋田藩主の居城、久保田城の外堀（大手門の堀）から50ｍほど南に位置し、参勤交代路（東根小屋町通）に面することから、その敷地内には高禄の上級武士邸宅跡の存在が予想された。そのため秋田県教育委員会では、平成14・15年に２期にわたる発掘調査を実施し、旧秋田保健所等の建物基礎（地中梁）内外に遺存した、1,000基を超える遺構群を検出した。出土遺物は中国産輸入磁器や桃山茶陶、および国内生産が開始されたばかりの初期伊万里をはじめ、日本海運を通じてもたらされたさまざまな陶磁器類のほか、多くの木製品類が多量に出土した[1)]。

東根小屋町遺跡における主要な遺構は母屋や附属屋を構成した柱穴である。また井戸跡や便所跡、およびゴミ捨て穴などの生活に密着した遺構も多く検出した。一部の遺物出土状況からは、これらの遺構内外において様々な祭祀行為が執り行われていたことを垣間見ることができ、その形態は意外にも古代以来の形式を保っていたことが確認できた。近世遺跡における祭祀の様相を示す類例としては、久保田城外堀に取り付く中土橋のたもとで、鳥形と灯火具が一括出土した事例がある[2)]。これらは武家社会において様々な場面で執り行われたであろう祭祀行為が、古代祭祀の形態を（形式的ではあろうが）損なうことなく伝世されてきたものであったことを示している。

前記したように、調査では900基を超える柱穴を始め、1,000基以上の遺構群を検出した。井戸跡では、様々な祭祀行為を確認し、ＳＥ122井戸跡（図１）には、使用時に繰り返しヒョウタンが容れられ（写真５・６）、古代以来の湧水点祭祀がそのまま再現されている。またヒョウタンと同時に、木彫仏像（写真４）の一部が容れられる段階もあり、より良質の水を得ようとした祭祀行為の一端がうかがわれる。この地区は水質が悪く、ＳＥ122井戸跡においても５段・2.4ｍの深さまでの井戸の掘り下げを確認した。この井戸跡では礫の投げ込みを含む閉塞時の祭祀行為も確認し、井戸開削から使用時、閉塞にいたるまで（作業安全上から井戸最下部は確認できなかった）、様々な場面において祭祀が執り行われたと考えられる。隣接するＳＥ152井戸跡では、閉塞の際に息抜きのために節を抜いた竹が差し込まれていた（報告書図版20参照）。掘立柱建物跡を構成する柱穴は、建物重量を支えきれずに、軟弱地盤に柱アタリ部分が沈下した状況が全域で確認された。それらの多くは礎板をあてて復旧されていたが、２重３重に礎板を入れたり、根石と組み合わせた事例も多く確認した。その礎板の直下、柱穴底面に柱材がめり込んだ面に、陶器皿が埋置された事例（写真７）を複数確認した。元来が湿地帯を埋め立てて造成した宅地であるため、合口（写真８）も含め、宅地造成そのものが幾度にも渡り繰り返され、その際に一時的な建物解体と再建築を繰り返した際に執り行われた祭祀のひとつであろう。溝跡でもＳＤ2214溝跡に、周囲を打ち欠いた擂鉢が納置されていた事例（写真９）を確認した。宅地内でも最も低い位置にある溝跡で、宅地割り境界の悪水路に排水する宅地内排水の要ともなる部分のため、祭祀対象となった部分であろうか。

＊1 秋田県教育庁払田柵跡調査事務所学芸主事兼調査班長　＊2 秋田県埋蔵文化財センター南調査課学芸主事

このように個々の祭祀行為の内容は、古代以来の水辺祭祀の系譜を引くものと理解できる。しかしその内容としては、それぞれの場を「神聖視」することよりも、「維持」する意図をはっきりと読み取ることができ、祭祀行為の形式は伝世されてはいるものの、実利にかなった目的意識を確認できる様相を呈している。これは近世武家社会における祭祀行為の在り方としてではなく、古代律令祭祀が中世以降、目的を具現化させるために汎日常的な「まじない」として形骸化していく過程を示しているが、それら祭祀行為を介在する道具は極めて保守的な形態を保ち続けていたことを示しているのではないだろうか。

1）　秋田県教育委員会『東根小屋町遺跡』秋田県文化財調査報告書第387集　2005（平成17）年
2）　秋田県埋蔵文化財センター『久保田城跡発掘調査資料』2004（平成16）年

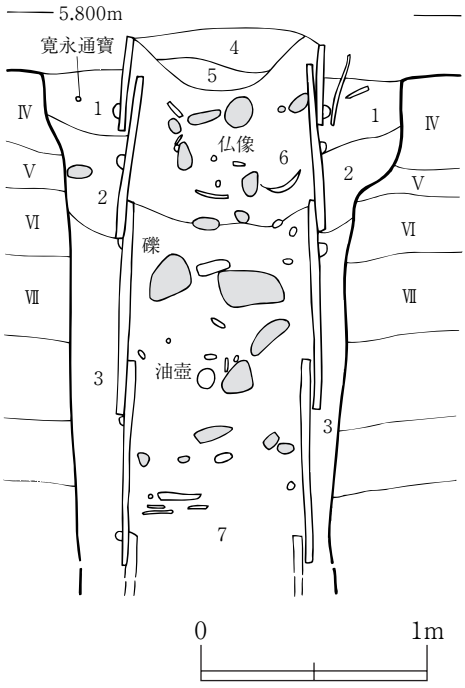


図1　ＳＥ122井戸跡土層図

写真1
ＳＥ122井戸跡確認状況

写真2
同上　半截状況
礫、木製品・部材が投げ込まれている
下段の井戸側（桶）は、３段目上端部

写真3
同上　半截状況
下段の井戸側（桶）は、５段目上端部

写真４
ＳＥ 122 井戸跡出土遺物
６層中位
（２段目の井戸側内）
左上：仏像（高さ 11.6 ㎝、第 94 図９）
右下：磁器（染付灰落としか）

写真５
同上　７層中
（４段目の井戸側内上部）
上：ヒョウタン
左：油壺（肥前産、c18後半～c19初、第68図1）

写真６
同上　７層中
（５段目の井戸側内上部）
ヒョウタンが石で割られた状態で出土

写真７
Ｕ地区３・ＳＫＰ 1114
柱抜き取り後に皿を埋納
陶器溝縁皿（砂目、灯明皿
に転用、全面に漆塗付、
1600～1630年、第13図１）

写真８
陶器出土状況・Ｋ地区
皿を合口状にして埋置
（唐津産、
胎土目　1590～1610年）
上：第15図７（口径11.1㎝）
下：第15図４（口径11.8㎝）

写真９
ＳＨＡ地区３・ＳＤ2214溝跡
右：周囲を打ち欠いた擂鉢
（内部に円礫、堺産か、
c16末～c17初、第18図１）
中央上：漆器椀
左：下駄（足駄）

秋田県考古学関係文献抄録（５）―陶磁器・焼き物とその窯跡―

利部　修*

秋田県には数多くの城館が存在する。城館に関する発掘調査では、中近世の陶磁器や土製品などが出土しており、報告書の中には少なからずそれらの記述がみられるし、詳しく取りあげてあるものもある。筆者は先に秋田県考古学関係文献抄録（４）において、城館・防御性集落・城柵を取りあげそれらの報告書を集成してある。本文ではその重複を避けている。また県・市・町・村史や、同文化財に関する書籍に単発的見られる記述も割愛している。

〈1926（昭和元）年～ 2005（平成 17）年〉

1926．7.　山東庵「八橋人形」『秋田考古会々誌』第一巻第四号　秋田考古会
1953．8.　秋田県教育委員会「経壺外二点」『教育秋田』第 49 号
1954．12.　秋田県教育委員会「秋田県の文化財―白岩焼角皿」『教育秋田』第 65 号
1955．6.　秋田県教育委員会「秋田県の文化財―黄瀬戸小皿」『教育秋田』第 71 号
1956.　小野正人「陶土考その他」『秋田考古学』第四号　秋田考古学協会
1956.　小野正人「寺内焼・八橋焼など」『秋田考古学』第五号　秋田考古学協会
1956．11.　小野正人「秋田県の文化財―緑園作秋田万古蓮急須　緑園作秋田万古緑釉蓮湯ざまし」『教育秋田』第 88 号　秋田県教育委員会
1957．1.　小野正人「窯器記銘の変遷」『秋田考古学』第六号　秋田考古学協会
1957．5.　嵯峨勘左衛門「心像の運七窯について」『秋田考古学』第七号　秋田考古学協会
1957．5.　小野正人「羽後の出土陶片考（一）」『秋田考古学』第七号　秋田考古学協会
1957．9.　小野正人「羽後の出土陶片考（二）」『秋田考古学』第８号　秋田考古学協会
1958．2.　嵯峨勘左衛門「楢岡焼について」『秋田考古学』第９号　秋田考古学協会
1958．2.　小野正人「羽後出土の陶片考（三）」『秋田考古学』第９号　秋田考古学協会
1958．4.　武茂信雄「阿仁水無窯について」『出羽路』第２号　秋田県文化財保護協会
1958．7.　石田吉四郎「鳥海山麓の上代壺―日本窯芸の特質と信楽陶―」『出羽路』第３号　秋田県文化財保護協会
1958．9.　小野「秋田県の文化財―染付壺　道三作　一箇」『教育秋田』第 110 号　秋田県教育委員会
1959．3.　秋田県教育委員会「秋田県の文化財―民芸“水注”（五城目瀬戸座製）一箇」『教育秋田』第 116 号
1959．4.　嵯峨勘左衛門「松本運七心像来住の経緯と心像試焼窯跡第四号と遺品の発見」『秋田考古学』秋田考古学協会
1959．4.　小野正人「館址出土の陶片について―羽後出土の陶片考（承前）―」『秋田考古学』第 12 号　秋田考古学協会
1959．12.　加藤高士「一出土品に因る豊島館址考」『秋田考古学』第 13 号　秋田考古学協会
1960．7.　小野正人「羽後出土の陶片考（承前）」『秋田考古学』第 15 号　秋田考古学協会

＊ 秋田県埋蔵文化財センター南調査課主任学芸主事兼調査班長

1961．6.　小野「秋田県の文化財―白岩焼」『教育秋田』第143号　秋田県教育委員会
1961．12.　小野「秋田県の文化財―染付磁器荒川尻焼大皿」『教育秋田』第149号　秋田県教育委員会
1962．3.　小野正人「秋田県の文化財―史跡　心像市道の窯址」『教育秋田』第152号　秋田県教育委員会
1963．7.　秋田県教育委員会「秋田県の文化財―考古資料　灰釉牡丹文瓶子　一ヶ」『教育秋田』第168号
1963．11.　秋田県教育委員会「秋田県の文化財―道三作　上絵五彩水注　一箇」『教育秋田』第172号
1963．12.　伊藤郷人「「館」私考・出土陶土器による館の性格と構造と集落の研究（第一）」『秋田考古学』第23号　秋田考古学協会
1964．2.　秋田県文化財保護協会「表紙解説　灰釉牡丹文瓶子」『出羽路』第22号
1964．2.　古宇田景一「亀田織、楢岡焼、稲庭和紙を見て」『出羽路』第22号　秋田県文化財保護協会
1964．7.　嵯峨勘左衛門「心像に於ける運七窯跡発見について」『秋田考古学』第24号　秋田考古学協会
1964．7.　小野正人「陶片と城館」『秋田考古学』第24号　秋田考古学協会
1965．5.　小野正人「船越水道の陶片」『秋田考古学』第25号　秋田考古学協会
1965．11.　小野正人「鉱山と陶窯」『出羽路』第28号　秋田県文化財保護協会
1966．5.　秋田県教育委員会「秋田県の文化財（工芸品）―緑園作秋田万古蓮急須―」『教育秋田』第202号
1966．8.　秋田県教育委員会「秋田県の文化財（工芸編）―黄瀬戸小皿　二個」『教育秋田』第205号
1967．5.　小野正人「修験道と埋壺」『秋田考古学』第26号　秋田考古学協会
1967．5.　小野正人「五城目焼のこと―中世産業への仮説―」『出羽路』第33号　秋田県文化財保護協会
1967．5.　野添憲治「檜山焼きの歴史」『出羽路』第33号　秋田県文化財保護協会
1970．6.　石田吉四郎「新発見の古九谷皿」『出羽路』第42号　秋田県文化財保護協会
1971．3.　竹村昌雄「“白岩焼”見たり聞いたりの記（一）」『宇母連木』第1号　仙北村史談会
1971．3.　秋田県教育委員会「秋田県の史跡―史跡　心像市道の窯跡―」『教育秋田』第206号
1972．2.　小野正人「土崎湊陶片ものがたり」『出羽路』第46号　秋田県文化財保護協会
1972．2.　工藤由四郎「異人館・水無焼・阿仁浦田焼」『出羽路』第46号　秋田県文化財保護協会
1972．5.　小野正人「表紙解説―青磁竹型懸花入」『鶴舞』第24号　本荘市文化財保護協会
1972．5.　小野正人「秋田陶芸の落穂」『鶴舞』第24号　本荘市文化財保護協会
1972．8.　太田桃介「白岩焼―その歴史と作品―①」『「里」かくのだて』Ｎｏ．１　桂の里社
1972．11.　竹村昌雄「白岩焼　見たり聞いたりの記（その二）」『宇母連木』第2号　仙北村史談会
1973．2.　佐藤宇一「小天狗　楽焼きとともに」『教育秋田』第283号　秋田県教育委員会
1973．3.　小野正人「加賀と出羽のあいだ―日本海の陶磁の道・序説―」『秋田考古学』第31号　秋田考古学協会
1973．3.　太田桃介「白岩焼―その歴史と作品―②」『「里」かくのだて』Ｎｏ．２　桂の里社

1973. 7. 太田桃介「白岩焼―その歴史と作品―③」『「里」かくのだて』Ｎｏ．３　桂の里社
1973. 7. 佐々木順三「七宝焼きとオブジェ」『教育秋田』第288号　秋田県教育委員会
1974. 2. デビッド・ヘイル「３現代の東北の窯場　（２）秋田県」　雄山閣出版株式会社
1974. 3. 太田桃介「白岩焼―その歴史と作品―④」『「里」かくのだて』Ｎｏ．４　桂の里社
1974. 8. 太田桃介「白岩焼―その歴史と作品―⑤」『「里」かくのだて』Ｎｏ．５　桂の里社
1975. 3. 小野正人「陶片より見たる秋田中世史（中）―考古学と経済史の接点―」『出羽路』第55号　秋田県文化財保護協会
1975. 4. 太田桃介「白岩焼―栗沢窯と大神成窯―⑥」『「里」かくのだて』Ｎｏ．６　桂の里社
1975. 7. 小野正人「陶片より見たる秋田中世史（下）―考古学と経済史の接点―」『出羽路』第56号　秋田県文化財保護協会
1975. 8. 太田桃介「白岩焼―白岩焼系の諸窯―⑦」『「里」かくのだて』Ｎｏ．７　桂の里社
1976. 3. 中谷雅昭「歴史探訪⑪　近世の史跡―院内銀山跡・心像市道窯跡・白岩焼窯跡―」『教育秋田』第320号　秋田県教育委員会
1976. 4. 秋田県教育委員会「秋田県立博物館収蔵資料（陶磁器）　白岩焼・浮彫文壺」『教育秋田』第321号
1976. 4. 太田桃介「白岩焼―かめの造形―⑧」『「里」かくのだて』Ｎｏ．８　桂の里社
1976. 5. 秋田県教育委員会「秋田県立博物館収蔵資料（陶磁器）道三作・赤絵楽焼茶碗」『教育秋田』第322号
1976. 6. 小野正人「秋田出土の青磁と緑釉瓷器」『陶説』279号　日本陶磁協会
1976. 8. 長谷川秀樹「雄和町白根館の出土品について」『秋田考古学』第33号　秋田考古学協会
1976. 8. 太田桃介「白岩焼―陶工の系譜―⑨」『「里」かくのだて』Ｎｏ．９　桂の里社
1976. 10. 磯村朝次郎「男鹿半島における二つの民窯」『男鹿半島研究』第６号　男鹿地域研究会
1977. 1. 高野喜代一「藩営六郷窯―白磁染付の本荘焼いづこに？―」『鶴舞』第33号　本荘市文化財保護協会
1977. 4. 太田桃介「白岩焼―陶工の系譜―⑩」『「里」かくのだて』Ｎｏ.10　桂の里社
1978. 1. 小野正人「菅江真澄翁と陶磁」『秋田考古学』第34・35合併号　秋田考古学協会
1978. 3. 小野正人「陶工史」『秋田県史　民俗・工芸編』　秋田県
1979. 3. 藤原茂「仙北の栗沢窯と大神成窯」『秋田県立博物館研究報告』第４号　秋田県立博物館
1979. 3. 秋田県立博物館『秋田県立博物館収蔵資料目録―美術・工芸』
1979. 3. 秋田県教育委員会「秋田県立博物館収蔵資料（考古）　佐竹氏の瓦」『教育秋田』第356号
1979. 7. 渡辺為吉『白岩瀬戸山（復刻版）』　翠楊社
1979. 11. 小野正人『秋田陶芸夜話』　加賀谷書店
1980. 6. 三田富子「雪炎に咲く北国のやきもの　秋田県」『探訪日本の陶芸』12　株式会社小学館
1981. 7. 南外村教育委員会『大畑窯跡発掘調査報告書』
1981. 11. 秋田県教育委員会「秋田県立博物館収蔵資料（陶磁器）　増田焼・染付山水文水指」『教育秋田』第388号
1982. 3. 庄内昭男「秋田市飯島穀丁出土の中世遺物について」『秋田県立博物館研究報告』第７号

秋田県立博物館
1982.　4.　秋田県教育委員会「秋田県立博物館収蔵資料（陶器）　楢岡焼・すず」『教育秋田』第393号
1982.　4.　武田孝義「能代地方における中世陶磁と茂谷沢窯の諸問題」『能代山本地方史研究』創刊号　能代山本地方史研究
1982.　8.　庄内昭男「中山焼の窯跡調査」『博物館ニュース』Ｎｏ.35　秋田県立博物館
1983. 11.　木崎和広「八橋人形」『秋田の民芸』　秋田魁新報社
1983. 11.　相川栄三郎「中山人形」『秋田の民芸』　秋田魁新報社
1983. 11.　佐藤正「秋田焼」『秋田の民芸』　秋田魁新報社
1983. 11.　佐藤正「楢岡焼」『秋田の民芸』　秋田魁新報社
1983. 11.　鈴木実「白岩焼」『秋田の民芸』　秋田魁新報社
1983. 11.　雄物川町総務課「郷土資料館から展示物紹介⑦―深井焼―」『広報　雄物川』Ｎｏ.333号
1984.　1.　秋田県教育委員会「秋田県立博物館収蔵資料（考古）　秋田市飯島穀丁から出土した陶磁器」『教育秋田』第414号
1984.　3.　日野久「平鹿郡大森町劔花、鹿島神社出土の珠洲系陶器」『秋田考古学』第38号　秋田考古学協会
1984.　9.　庄内昭男「秋田市穀丁出土の中世遺物」『開館10周年記念　秋田県立博物館10年のあゆみ』秋田県立博物館
1985.　2.　秋田県教育委員会「秋田県立博物館収蔵資料（工芸）　栗沢焼と注口付甕」『教育秋田』第427号
1985.　3.　能代市教育委員会『金山館発掘調査概報』
1985.　3.　濱田淑子「東北のやきもの」『日本の伝統工芸』１　株式会社ぎょうせい
1985.　4.　秋田県教育委員会「秋田県立博物館収蔵資料（工芸）　自楽亭道入作「色絵皿・湯呑」」『教育秋田』第429号
1985.　4.　若松鉄四郎「能代市・山本郡出土の須恵系中世陶」『能代山本地方史研究』３号　能代山本地方史研究会
1986.　3.　栗沢光男・熊谷太郎・高橋忠彦「秋田県内の珠洲系陶器資料」『研究紀要』第１号　秋田県埋蔵文化財センター
1987.　2.　武田孝義「表紙写真解説―珠洲系の擂鉢（十五世紀）」『能代山本地方史研究』４号　能代山本地方史研究会
1987.　4.　芹沢長介「東北地方の近世陶器」『東北の近世陶器』　東北陶磁文化館
1989.　3.　二ツ井町教育委員会「考古ニュース―エヒバチ長根窯跡の窯跡と遺物確認」『月刊考古学ジャーナル』Ｎｏ.302　ニュー・サイエンス社
1989.　8.　能登谷宣康「大曲市蛭川遺跡より採集された遺物について」『研究紀要』第４号　秋田県埋蔵文化財センター
1989.　9.　秋田市教育委員会「考古ニュース―秋田市寺内で近世窯跡を確認」『月刊考古学ジャーナル』Ｎｏ.309　ニュー・サイエンス社
1990.　3.　二ツ井町教育委員会『エヒバチ長根窯跡・大川口館跡・烏野遺跡』二ツ井町埋蔵文化財調

査報告書第１集
1991. 3. 滝沢滋「由利郡の唐津焼」『鶴舞』第61号　本荘市文化財保護協会
1991. 3. 秋田城跡発掘調査事務所『寺内焼窯跡―寺内小学校建設に伴う近世陶磁器・瓦・煉瓦窯跡の発掘調査―』 秋田市教育委員会
1992. 1. 畑野栄三著『全国郷土玩具ガイド』１　株式会社婦女界出版社
1992. 2. 南外村教育委員会「考古ニュース―桧山腰遺跡で中世陶器窯跡を確認」『月刊考古学ジャーナル』Ｎo.343　ニュー・サイエンス社
1992. 3. 長山幹丸「南外村中世窯跡「桧山腰遺跡」発掘について」『出羽路』第104号　秋田県文化財保護協会
1992. 3. 南外村教育委員会『大畑・桧山腰窯跡発掘調査報告書』
1992. 10. 佐藤武「表紙によせて―須恵四耳壺」『鶴舞』第64号　本荘市文化財保護協会
1993. 4. 河北新報社「秋田」『炎の芸術・東北の窯』
1993. 10. 長山幹丸「南外村大畑・桧山腰窯跡を発掘して」『北方風土』第27号　北方風土社
1993. 11. 宮本康男「白岩焼と釉」『博物館ニュース』Ｎo.94　秋田県立博物館
1994. 3. 日野久「日本出土の貿易陶磁情報集成　秋田県」『日本出土の貿易陶磁』東日本編１　国立歴史民俗博物館
1994. 5. 宮本康男「白岩焼と釉〈鉄釉〉」『博物館ニュース』Ｎo.96　秋田県立博物館
1994. 11. 宮本康男「地方の焼き物の特徴を見るために」『博物館ニュース』Ｎo.98　秋田県立博物館
1997. 2. 小松正夫「中世秋田城の行方―高清水岡の考古学的知見から―」『生産の考古学』 同成社
1997. 3. 栗澤光男「秋田県出土の珠洲系陶器資料集成（上）」『研究紀要』第12号　秋田県埋蔵文化財センター
1997. 3. 磯村亨「男鹿市祓川Ｉ遺跡出土の中世陶器―特に越前･珠洲系陶器について―」『研究紀要』第12号　秋田県埋蔵文化財センター
1997. 3. 高橋学「近世蔵骨器の一例―大森町本郷家墓地の事例―」『研究紀要』第12号　秋田県埋蔵文化財センター
1997. 6. 櫻田隆・利部修「秋田県の貿易陶磁器」『東北の貿易陶磁器』 日本貿易陶磁研究会
1998. 8. 秋田県立博物館「企画展「秋田やきもの今昔」」『博物館ニュース』Ｎo.113
1998. 9. 秋田県立博物館「秋田やきもの今昔」『教育あきた』第590号　秋田県教育委員会
1998. 12. 羽後町歴史民俗資料館『堀内焼　特別展図録』
1999. 3. 栗澤光男「秋田県出土の珠洲系陶器資料集成（下）」『研究紀要』第14号　秋田県埋蔵文化財センター
1999. 3. 由利町教育委員会『小坂下瓦窯跡―町道『前郷蟹沢線』道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―』由利町文化財調査報告書第９集
1999. 11. 佐藤和夫「堀内焼考」『羽後路』Ｎo. ４　秋田県文化財保護協会羽後町支部
2000. 3. 秋田県教育委員会『洲崎遺跡―県営ほ場整備事業（浜井川地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―』秋田県文化財調査報告書第303集
2000. 3. 増田町教育委員会『焼山焼窯跡―秋田県平鹿郡増田町に所在する近世窯跡の発掘調査概報

—』
2000．7.　秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室「新指定の秋田県指定文化財について」『出羽路』第127号　秋田県文化財保護協会
2000．12.　秋田県広報課「秋田紀行　中山人形の工房を訪ねて」『フロムあきた』第4号
2002．2.　秋田市教育委員会『藩校明徳館跡—市街地再開発事業に伴う発掘調査報告書—』
2002．9.　五十嵐一治「秋田県観音寺廃寺跡の調査」『貿易陶磁研究』No.22　日本貿易陶磁研究会
2003．3.　高橋学「滑石製石鍋と山茶碗—雄勝町館堀城跡出土の事例から—」『研究紀要』第17号　秋田県埋蔵文化財センター
2003．7.　伊藤武士「3　出羽のかわらけ—（2）出羽北部—秋田県—」『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院
2003．7.　高橋学「3　出羽の陶器生産—（1）エヒバチ長根窯跡」『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院
2003．7.　高橋学「3　出羽の陶器生産—（2）大畑窯跡・桧山腰窯跡」『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院
2004．9.　小野正敏「発掘陶磁器からみた脇本城」『海と城の中世』東北中世考古学会
2004．9.　工藤直子「小鹿嶋　脇本城跡—海を見下ろす館—」『海と城の中世』東北中世考古学会
2004．9.　山口博之「出羽南半の様相」『海と城の中世』東北中世考古学会
2004．9.　泉　明「男鹿半島の城館」『海と城の中世』東北中世考古学会
2004．9.　播磨芳紀「桧山城跡と能代湊」『海と城の中世』東北中世考古学会
2004．9.　伊藤武士「秋田市後城遺跡・湊城跡—秋田湊と湊安東氏の城館—」『海と城の中世』東北中世考古学会
2004．9.　高橋学「秋田県館堀城跡と出土陶磁器－成立期の状況を中心に－」『貿易陶磁研究』No.24　日本貿易陶磁研究会
2005．2.　秋田魁新報社「窯 県内 土と炎の工房巡り①　三温窯(五城目町)」『夕刊 秋田魁新報』
2005．2.　秋田魁新報社「窯 県内 土と炎の工房巡り②　松岡焼柏容窯(湯沢市)」『夕刊 秋田魁新報』
2005．2.　秋田魁新報社「窯 県内 土と炎の工房巡り③　大炎窯(大館市)」『夕刊 秋田魁新報』
2005．2.　秋田魁新報社「窯 県内 土と炎の工房巡り④　海鵜の郷(象潟町)」『夕刊　秋田魁新報』
2005．2.　秋田魁新報社「窯 県内 土と炎の工房巡り⑤　倉田窯(西目町)」『夕刊 秋田魁新報』
2005．2.　秋田魁新報社「窯 県内 土と炎の工房巡り⑥　麻野陶工房(大曲市)」『夕刊 秋田魁新報』
2005．2.　秋田魁新報社「窯 県内 土と炎の工房巡り⑦　朴瀬窯(能代市)」『夕刊 秋田魁新報』
2005．3.　秋田魁新報社「窯 県内 土と炎の工房巡り⑧　白岩焼和兵衛窯(角館町)」『夕刊 秋田魁新報』
2005．3.　秋田魁新報社「窯 県内 土と炎の工房巡り⑨　須恵沢窯(秋田市)」『夕刊 秋田魁新報』
2005．3.　秋田魁新報社「窯 県内 土と炎の工房巡り⑩　幸炎窯(秋田市)」『夕刊 秋田魁新報』
2005．3.　秋田県教育委員会『東根小屋町遺跡－秋田県教育・福祉複合施設整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第387集

発　行　平成17年3月

秋田県埋蔵文化財センター研究紀要　第19号

発　行　　秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802
秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地
電話（0187）69-3331　FAX（0187）69-3330

印　刷　　有限会社平鹿印刷